

Oracle® Web Conferencing

管理者ガイド

リリース 2 (2.0.4.3)

部品番号 : B13932-02

2004 年 9 月

Oracle Web Conferencing 管理者ガイド, リリース 2 (2.0.4.3)

部品番号 : B13932-02

原本名 : Oracle Web Conferencing Administrator's Guide, Release 2 (2.0.4.3)

原本部品番号 : B10877-03

原本著者 : Jeffrey Doering、Dinesh Ajmera、PV Shivkumar、Rami Musa、Barbara Heninger

原本協力者 : Anindo Roy、Mehul Snghavi、Kiran Choudary、Ramu Sunkara、Vimal Chopra、Michael Tselner、Ravindra Dani

Copyright © 2003, 2004, Oracle Corporation. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation, and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（**redundancy**）、その他の対策を講じることが使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle は Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。その他の名称は、Oracle Corporation または各社が所有する商標または登録商標です。

目次

はじめに	ix
対象読者	x
このマニュアルの構成	x
関連ドキュメント	xi
表記規則	xii
1 Oracle Web Conferencing の概要	
Oracle Web Conferencing について	1-2
Web Conferencing アプリケーションの機能	1-3
Web Conferencing コンソールの機能	1-4
Oracle Web Conferencing のコンポーネント	1-5
Web Conferencing の前提条件	1-7
Web Conferencing の管理機能	1-7
システム管理機能およびツール	1-7
ビジネス管理	1-9
ユーザー管理	1-9
管理者ロード・マップ	1-10
2 Web Conferencing の理解	
概念および用語	2-2
Real-Time Collaboration インスタンス	2-2
Real-Time Collaboration コンポーネント	2-2
Real-Time Collaboration クラスタ	2-3
Real-Time Collaboration システム	2-4
Real-Time Collaboration コンポーネントの機能	2-5

プロセスの相互作用	2-7
インスタンス内でのプロセスの相互作用	2-7
インスタンス間でのプロセスの相互作用	2-7
接続	2-7
ランタイム・フロー	2-8
会議参加フロー	2-8
クライアント接続の詳細	2-10
ポートとネットワークの接続性	2-12
ユーザー管理	2-13
Web Conferencing のサイト	2-14
レポート	2-14

3 配置の計画

サイジングのガイドライン	3-2
インターネット/イントラネットの問題	3-2
ロード・バランサの問題	3-5
分散配置の問題点	3-5
コア・コンポーネントのローカルまたはグローバル配置	3-5
Voice Conversion Server のローカルまたはグローバル配置	3-6
Real-Time Collaboration クラスタ	3-6

4 インストール後

インストール後のタスク	4-2
インストール後のタスクのタイプ	4-4
Web Conferencing の設定	4-4
インターネット・アクセスに対する Web Conferencing の設定	4-7
Web Conferencing に対する Document Conversion Server および Voice Conversion Server の 設定	4-13
サービス可用性テストの設定	4-14
構成の検証	4-15
手動による Web Conferencing プロセスの起動および停止	4-15
Web Conferencing 用の Oracle9iAS コンポーネントの起動および停止	4-16
Oracle Real-Time Collaboration インスタンスの起動または停止	4-17

5 構成

Web Conferencing プロパティの使用	5-2
Web Conferencing に対するプロパティの機能	5-2
多重スコープ・プロパティ	5-3
現在のプロパティ設定の表示	5-4
Web Conferencing プロパティの一覧	5-5
ポートおよびネットワーク接続性を設定するプロパティ	5-11
プロキシ・サーバーのプロパティ	5-11
Oracle HTTP Server と統合するためのプロパティ	5-14
Multiplexer (MX) ポートをリダイレクトするためのプロパティ	5-14
Oracle HTTP Server の設定と同期化するためのプロパティ	5-16
Web Conferencing を Oracle9iAS Web Cache で構成するためのプロパティ	5-17
Multiplexer (Mx) を構成するためのプロパティ	5-18
ロード・バランサと統合するためのプロパティ	5-20
ユーザー権限を設定するプロパティ	5-21
SSL セキュリティを設定するプロパティ	5-22
セキュアな会議を設定するためのユーザーの制御	5-25
SSL Web サイトの共有ブラウザ	5-25
信頼できるルート認証局の証明書の追加	5-25
クラスタを設定するプロパティ	5-27
電子メール招待状を設定するプロパティ	5-28
アプリケーション・ページを設定するプロパティ	5-29
ログイン・メッセージおよび公開会議表のカスタマイズ	5-29
プライバシー声明のカスタマイズ	5-31
Web Calendar のユーザーの「予定」タブの非表示	5-32
クイックリンク・ビンの構成	5-32
Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ	5-33
Voice Conversion Server を設定するプロパティ	5-43
電子メールでの利用状況レポートを設定するプロパティ	5-44
ロギングを設定するプロパティ	5-44
タイムゾーンを設定するプロパティ	5-46

6 配置サンプル

基本配置	6-2
作業手順	6-3

前提条件	6-3
設定	6-4
インストール	6-5
インストール後	6-5
検証	6-7
複数の Real-Time Collaboration コア・コンポーネントとロード・バランサ	6-8
作業手順	6-9
前提条件	6-9
設定	6-10
インストール	6-11
インストール後	6-11
検証	6-12
複数の地域とロード・バランサ	6-13
既存システムへの新規コア・コンポーネントの追加	6-16
作業手順	6-17
前提条件	6-17
設定	6-17
インストール	6-18
インストール後	6-18
検証	6-19
既存システムへの Document Conversion Server および Voice Conversion Server の追加	6-19
作業手順	6-20
前提条件	6-20
設定	6-20
インストール	6-20
インストール後	6-21
検証	6-21
その他の例	6-22

7 監視

プロセスの監視	7-2
imt-pm および start/stop コマンド	7-2
imt-pm および Oracle Process Management and Notification	7-2
サービス可用性の監視	7-3
コンポーネントの監視	7-4

会議の監視	7-5
インスタンスの状態ページ	7-5
構成テスト	7-6
構成ステータス	7-7
Real-Time Collaboration インタフェース	7-7
サーブレット・インタフェース	7-7
サーブレットへの入力	7-8
サーブレットからの出力	7-9
サンプル	7-9
制限	7-10

8 レポート

利用状況レポート	8-2
フィードバック・レポート	8-3
稼働時間レポート	8-4

9 Web Conferencing のサイト

アプリケーションとサイトの統合	9-2
サイトの作成	9-2
サイト ID の使用	9-3
サイト・プロパティのカスタマイズ	9-3

10 imtctl コマンドライン・ユーティリティ

imtctl の実行	10-2
コマンドライン・モードでの imtctl の使用	10-2
imtctl スクリプト	10-3
システム、インスタンス、コンポーネントおよびサイトの値の設定	10-3
imtctl コマンドのリスト	10-5
インスタンスの起動および停止	10-6
start	10-7
stop	10-8
システム情報の表示	10-9
listInstances	10-9
listComponents	10-9
versions	10-11

プロパティの設定および表示	10-12
setProperty	10-12
getProperty	10-13
getProperties	10-14
ユーザー・ロールの設定	10-16
modifyRole	10-16
会議のダイヤルイン情報の設定	10-17
addSysDialin	10-17
getSysDialins	10-18
deleteSysDialin	10-18
システムのテストおよび監視	10-18
getState	10-18
getPids	10-19
getMonitorStats	10-20
runTests	10-22
ヘルプの表示および imtctl の終了	10-24
help	10-24
exit または quit	10-24

11 トラブルシューティング

A タイムゾーン

用語集

索引

図目次

1-1	Web Conferencing アプリケーション: システム管理者の画面	1-2
1-2	Web Conferencing コンソールのバナー	1-3
1-3	Real-Time Collaboration のシステム管理タスク	1-8
2-1	Real-Time Collaboration インスタンスのコンポーネントおよびプロセス	2-3
2-2	Real-Time Collaboration システムの階層	2-4
2-3	Real-Time Collaboration アーキテクチャ	2-5
2-4	Web Conferencing へのクライアント接続	2-10
3-1	Oracle Real-Time Collaboration の基本コンポーネント	3-2
3-2	Oracle Real-Time Collaboration の配置例	3-4
3-3	Real-Time Collaboration クラスタ化	3-7
4-1	Web Conferencing のインストール後のタスク	4-2
4-2	インターネット・アクセスに対する Web Conferencing の設定	4-3
5-1	プロパティ構成の階層	5-2
6-1	Web Conferencing の基本配置	6-2
6-2	複数のコア・コンポーネントと1つのLBRでの配置	6-8
6-3	複数の地域と1つのLBRでの配置	6-13
6-4	既存の Web Conferencing の配置にコア・コンポーネントを追加した例	6-16
6-5	既存の配置に Document Conversion Server および Voice Conversion Server を 追加した例	6-19
6-6	異なる DMZ にコア・コンポーネントを配置した例	6-22
9-1	サイト・プロパティの継承	9-4

はじめに

ここでは、このマニュアルの対象読者、構成、表記規則などについて説明します。

対象読者

このマニュアルは、Oracle Web Conferencing のインストール、構成および監視を行う必要がある管理者を対象としています。管理者ガイドは、エンド・ユーザーを対象としたものではありません。

このマニュアルの構成

このマニュアルの構成は次のとおりです。

第 1 章「Oracle Web Conferencing の概要」

この章では、Oracle Web Conferencing 製品の概要について説明します。

第 2 章「Web Conferencing の理解」

この章では、Oracle Web Conferencing の用語と定義、アーキテクチャ、プロセス、会議のランタイム・フロー、ポート、接続の詳細などの概念について説明します。

第 3 章「配置の計画」

この章では、Oracle Web Conferencing を配置する際の考慮事項について説明します。各地に分散している企業の場合、サイジングに始まりファイアウォール対策、トポロジの問題まで様々な問題を考慮する必要があります。

第 4 章「インストール後」

この章では、選択した配置構成で、Oracle Web Conferencing が完全に機能させるために必須のインストール後の手順について説明します。

第 5 章「構成」

この章では、Web Conferencing のシステムを構成する方法を説明します。ポートとネットワークの接続性、ユーザー権限、SSL セキュリティ、クラスタ、会議への電子メールでの招待、Web Conferencing アプリケーションのページ、会議実行時の機能、Voice Conversion Server、ロギング、システムのデフォルトのタイムゾーンなどについて説明します。

第 6 章「配置サンプル」

この章では、基本配置から各地に分散する高度な配置までの、いくつかの配置サンプルについて説明します。これらの配置の構成方法についても説明します。

第 7 章「監視」

この章では、会議サービスの優れた品質と安定した可用性を提供するために、Oracle Web Conferencing コンポーネントを監視する方法について説明します。

第 8 章「レポート」

この章では、利用状況レポートおよびフィードバック・レポートについて説明します。

第 9 章「Web Conferencing のサイト」

この章では、Oracle Web Conferencing のサイトについて説明します。

第 10 章「imtctl コマンドライン・ユーティリティ」

この章では、Real-Time Collaboration システムを管理および構成するためのコマンドライン・インタフェースを提供する、imtctl ユーティリティについて説明します。

第 11 章「トラブルシューティング」

この章では、最新のトラブルシューティング情報を参照できる URL を記載します。

付録 A「タイムゾーン」

サポートされているタイムゾーンのリストを記載します。

用語集

このマニュアルには用語集があります。用語集で説明する用語は太字で表示されています。

関連ドキュメント

詳細は、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.2.0) のドキュメント・セットの次のマニュアルを参照してください。

- 『Oracle Collaboration Suite for HP-UX PA-RISC, Linux Intel, and Solaris Operating System (SPARC) インストールおよび構成ガイド』
- Oracle Collaboration Suite のリリース・ノート
- 『Oracle Web Conferencing サイジング・ガイド』
- 『Oracle Collaboration Suite Oracle Web Conferencing 利用ガイド』

表記規則

このマニュアルでは、次の表記規則を使用します。

規則	意味
.	例で使用される垂直の省略記号は、例に直接関連しない情報が省略されていることを示します。
...	文またはコマンドで使用される水平の省略記号は、例に直接関連しない文またはコマンドの一部が省略されていることを示します。
太字	太字は、本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。
<>	山カッコは、ユーザーが指定する名前を表します。
[]	大カッコは、カッコ内の項目を任意に選択することを表します。

Oracle Web Conferencing の概要

Oracle Real-Time Collaboration は、Web Conferencing などのリアルタイム・コラボレーション・サービスを提供する最新の分散システムです。このガイドでは、主に Web Conferencing サービスの管理について説明しますが、サービスを提供するために必要な多くのコンポーネントおよび管理ツールは Web Conferencing 固有のものではなく、将来他のサービスにも使用される予定です。

この章では、エンド・ユーザーのコラボレーション機能および管理機能を含む、Oracle Web Conferencing 製品の概要について説明します。

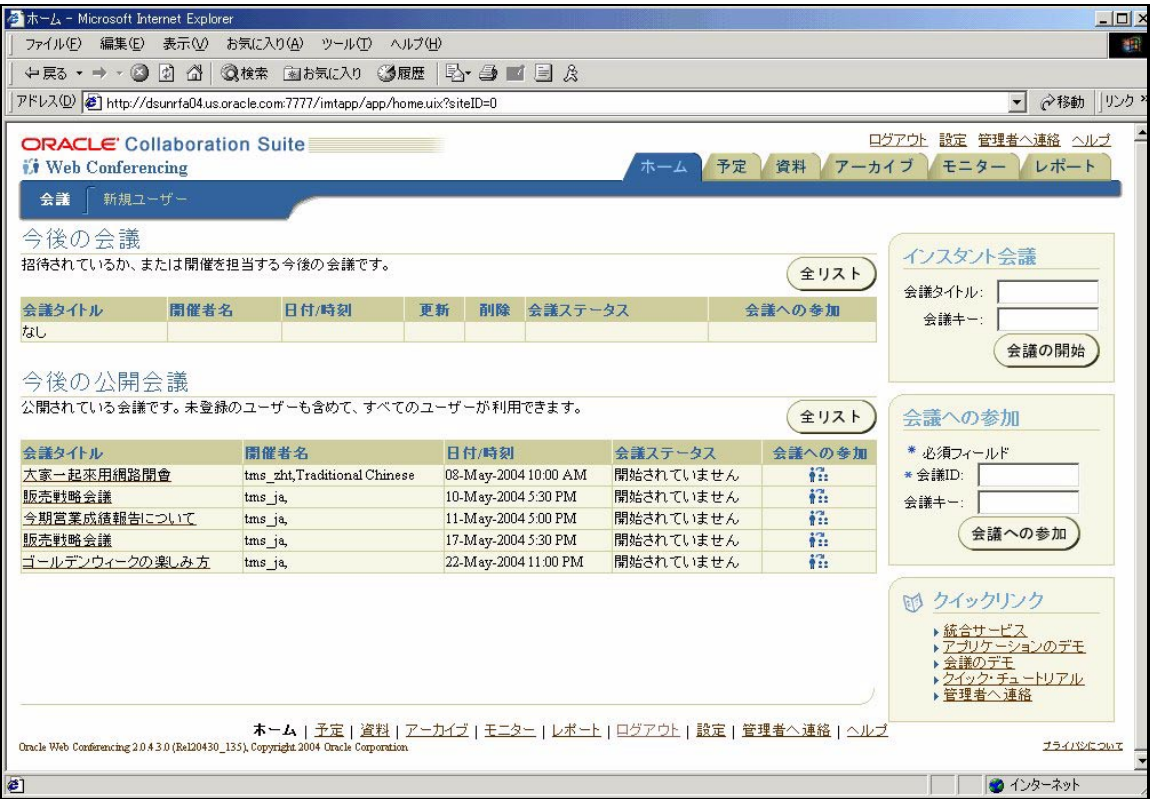
Oracle Web Conferencing について

Oracle Web Conferencing は、オンラインのリアルタイム・コラボレーションをあらゆる企業で可能にします。これによって、顧客、従業員、チームおよびパートナーは、E-Business のコンテンツ、取引および総合的なビジネス・フローで提供されるコンテキスト内で、オンライン会議を開催できます。

Oracle Web Conferencing は、オンライン会議への参加または会議の作成を可能にするクライアントおよびサーバー・アプリケーションで構成されています。ユーザーから見た場合、Web Conferencing システムには、次の 2 つの主要部があります。

- **Web Conferencing アプリケーション:** Web ブラウザに表示される一連のページ。ユーザーは、これを使用して、会議の予定、会議への参加、過去の会議の再生または将来の会議で共有する資料の選択を行うことができます。システム管理者は、このページを使用して、Web Conferencing 環境の監視および過去の会議の統計（接続時間、同時ユーザーの数など）の確認も行うことができます。

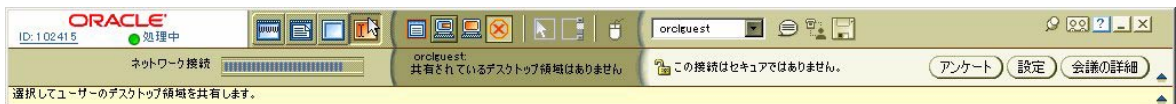
図 1-1 Web Conferencing アプリケーション：システム管理者の画面



注意： 前述の図の「モニター」および「レポート」タブは、ビジネス・モニター・ロールまたはビジネス管理者ロールを割り当てられたユーザーのみが使用できます。「サイト」および「システム」タブは、ビジネス管理者ロールを割り当てられたユーザーのみが使用できます。ユーザー権限の詳細は、2-13 ページの「ユーザー管理」を参照してください。

- **Web Conferencing コンソール：** ユーザーは、このコンソールで、デスクトップ共有、Web ページの共有ブラウズ、オンライン・ホワイトボード、チャット、会議参加者へのアンケートなどの機能を使用して会議に参加します。

図 1-2 Web Conferencing コンソールのバナー



次の項では、Web Conferencing アプリケーションおよび Web Conferencing コンソールの機能の詳細を説明します。

Web Conferencing アプリケーションの機能

ユーザーは、Oracle Web Conferencing アプリケーション（図 1-1）を使用して、会議を開始および管理できます。次のことを実行できます。

- **会議の予定：** 事前に会議を予定し、電子メールの招待状を送信し、会議の前に確認する資料を指定します。
- **インスタント会議の作成：** 会議を作成し、即座に開催します。
- **会議への参加：** 電子メールの招待状（開催者がこのオプションを有効にしている場合）、会議のリスト、または「会議への参加」ウィンドウから簡単に会議に参加できます。
- **資料の管理：** ドキュメント、ブックマーク、メッセージおよびアンケートなどの会議資料を各自のリポジトリに保存します。ユーザーは、会議中、自身の資料リポジトリにアクセスできます。
- **会議の記録：** 会議を記録していつでも再生できるようにします。
- **会議の再生：** アーカイブされた会議を任意に再生します。
- **アーカイブの公開：** パブリック・チャットの記録、会議参加者リストおよび会議の時間などの会議および会議に関する情報を公開します。

システム管理者は、Web Conferencing アプリケーションを使用して、システム・パフォーマンスの監視、カスタム・サイトの作成およびシステム・パフォーマンスに関するレポートの表示も行います。管理機能の概要は、1-7 ページの「[Web Conferencing の管理機能](#)」を参照してください。

Web Conferencing コンソールの機能

Web Conferencing コンソール ([図 1-2](#)) は、オンライン会議が開催される場所です。会議の各参加者は、各自のデスクトップでこのコンソールを実行します。このコンソールには、次の機能があります。

共有ブラウズ

- 少数または多数のユーザーによる HTML ページの同時ブラウズおよびスクロール。
- 会議中に Web アドレスを入力、またはユーザー定義のブックマークを選択することによって Web ページに移動。
- リアルタイムで個々の文字を表示するなどの Web フォームの記入。

ドキュメント・プレゼンテーション

- ユーザーの個人資料のリポジトリからのドキュメントの選択および表示。Microsoft Word、Excel、PowerPoint、HTML、テキストおよび画像 (.gif および .jpg) 形式でのプレゼンテーションがサポートされています。

ホワイトボード

- 共有コンテンツに確認および注釈のマークを付けたり、プレゼンテーション時の補足説明を書き込むためのマークアップおよび描画ツール。

デスクトップの共有

- プレゼンタの Microsoft Windows ベースのコンピュータのアプリケーションを他の参加者とリアルタイムで共有。オプションとして、任意の領域または複数の領域の共有、任意のアプリケーションの共有、デスクトップ全体の共有があります。

音声ストリーミング

- Oracle Web Conferencing コンソールを使用した、あらゆる電話または電話会議システムから送られる音声の聴取のみ可能なライブ・ストリーミング。

アンケート

- インスタント・アンケートの作成またはユーザー定義アンケートの選択が可能です。回答はリアルタイムで表示されます。
- すべての参加者へのアンケート結果の公開。

チャット

- すべての参加者、参加者のグループまたは会議の開催者とのライブ・チャット。
- 登録済のユーザーによるライブ・チャット中に使用するメッセージの事前定義。

共有操作権

- 参加者との会議の操作権の共有。(最終的な操作権は常に会議の開催者にあります。)

記録および再生

- 会議をオンデマンドで再生するための、画面上のデータ・コラボレーションと同期化された音声の記録。

Oracle Web Conferencing のコンポーネント

Oracle Web Conferencing は、Oracle Real-Time Collaboration のオプションの 1 つです。Web Conferencing システムは、次のコンポーネントで構成されます。

Oracle Web Conferencing コンソール

会議は、Web Conferencing コンソール (図 1-2 を参照) で開催されます。Web Conferencing コンソールは、ユーザーが会議に参加する際、ユーザーのコンピュータにまだダウンロードされていない場合や、現在のバージョンがインストールされていない場合にダウンロードされます。ユーザーは、Internet Explorer 5.5 以上または Netscape 4.75 以上を使用して Web Conferencing コンソールにアクセスします。(Netscape を使用した場合、Web Conferencing の一部の機能は使用できません。たとえば、ユーザーは、会議に参加することはできませんが、会議を予定することはできず、チャットなどの一部のコンソール機能は使用できません。)

Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネント

Real-Time Collaboration のコア・コンポーネントには、Web Conferencing Server、Web Conferencing アプリケーション (図 1-1 を参照)、Oracle Real-Time Collaboration Process Monitor、Real-Time Collaboration Multiplexer が含まれます。これらのコンポーネントは協調して動作し、Oracle Web Conferencing のリアルタイム・コラボレーションの中心機能を提供します。

Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネントでは、前提条件として、Oracle Collaboration Suite Middle-Tier が Oracle9iAS Single Sign-On および Oracle Internet Directory とともに動作するように構成されている必要があります。詳細は、「[Web Conferencing の前提条件](#)」を参照してください。

Document Conversion Server

ドキュメント・プレゼンテーション・モードで表示するために、MS Office ドキュメントを HTML に変換する Oracle Web Conferencing プロセスのグループです。Document Conversion Server コンポーネントは、Microsoft Windows および Microsoft Office を搭載するコンピュータにインストールする必要があります。

関連資料： 前提条件の詳細は、『Oracle Collaboration Suite for HP-UX PA-RISC, Linux Intel, and Solaris Operating System (SPARC) インストールガイド』を参照してください。

Voice Conversion Server

音声会議システムに接続し、アナログ音声のデジタル形式への変換およびストリーミングを行う Oracle Web Conferencing プロセスのグループです。Voice Conversion Server コンポーネントは、Microsoft Windows を搭載するコンピュータにインストールし、テレフォニ製品の専用ハードウェアおよびソフトウェアを用意する必要があります。

関連資料： 前提条件の詳細は、『Oracle Collaboration Suite for HP-UX PA-RISC, Linux Intel, and Solaris Operating System (SPARC) インストールガイド』を参照してください。

Real-Time Collaboration リポジトリ

Oracle9i データベースに常駐する Real-Time Collaboration データベース・スキーマのセットです。

- **rtc:** データベース表、ビュー、索引、トリガーなどがすべて含まれます。このスキーマは、Oracle Real-Time Collaboration のコンポーネントでは使用されません。
- **rtc_app:** Oracle Real-Time Collaboration の基礎である rtc スキーマの表およびビューに対応する適切なシノニムが含まれます。このスキーマには、これらの表からデータを選択または変更するための権限が付与されています。このスキーマは、Oracle Web Conferencing コンポーネントによる接続のために使用されます。

スキーマには次のものが含まれます。

- **システム・マップ:** システム内のすべてのインスタンスおよびコンポーネントの構成情報。
- **ユーザー・ロール:** システム権限を設定するユーザーに割り当てられるロール。ユーザー認証情報は、Oracle Internet Directory に格納されています。
- **会議情報:** 予定されている会議、会議アーカイブ、会議中に使用するためにロードされるユーザー・ドキュメント。
- **アプリケーション・メニュー定義などの Oracle Real-Time Collaboration の内部で使用するデータ。**

Web Conferencing の前提条件

Oracle Web Conferencing の配置には、次の基礎となるコンポーネントが必要になります。

Oracle9iAS

Oracle9i Application Server は、Oracle HTTP Server、Oracle9iAS Containers for J2EE およびその他の Oracle Web Conferencing コンポーネントが動作するための基礎となる環境を提供する J2EE 統合アプリケーション・サーバーです。

Oracle9iAS Infrastructure

Oracle Internet Directory および Oracle9iAS Single Sign-On が含まれます。Oracle9iAS Infrastructure は、ユーザー・プロビジョニングおよび認証サービスを提供します。

Oracle9i データベース

Oracle9i データベース、リリース 2 (9.2) は、Oracle Web Conferencing の基礎となる必須コンポーネントです。Oracle Web Conferencing 用の Oracle Real-Time Collaboration リポジトリは、このデータベース内に作成されます。

Web Conferencing の管理機能

Oracle Web Conferencing の管理は、システム管理、ビジネス管理、ユーザー管理で構成されます。

システム管理機能およびツール

Web Conferencing では、システム全体を管理するために次の機能が提供されます。

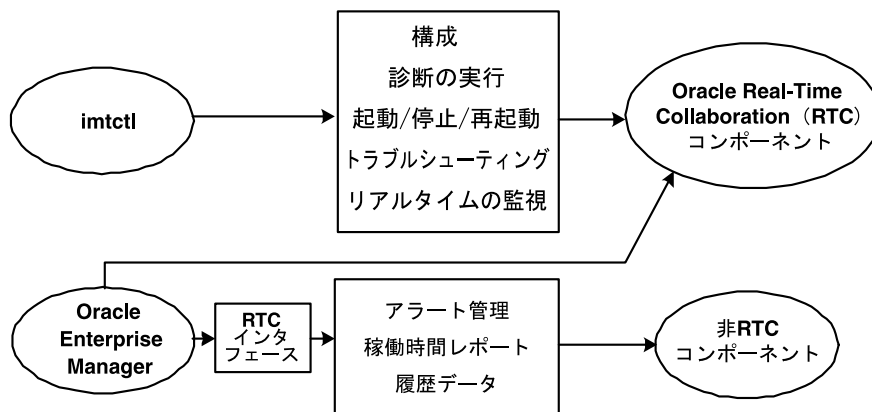
異なるトポロジを管理するためのサポート : 各地に分散している企業で Web Conferencing の管理を可能にし、ファイアウォールやロード・バランサ (LBR) などの全社的な対策を考慮に入れながらシステムを様々な方法で配置します。

高可用性 : プロセスの監視およびコンポーネントに障害が検出された際のプロセスの自動再起動を実現します。

Oracle Enterprise Manager: Oracle Enterprise Manager と統合します。

図 1-3 「Real-Time Collaboration のシステム管理タスク」に、Real-Time Collaboration のシステム管理を示します。

図 1-3 Real-Time Collaboration のシステム管理タスク



imctl ユーティリティは、Real-Time Collaboration システムを管理および構成するためのコマンドライン・インタフェースを提供します。ユーティリティでは、次のコマンドをサポートしています。

- システム属性（会議で使用可能な機能など）の構成
- システムの診断の実行
- Real-Time Collaboration インスタンスの起動、停止または再起動
- システムの問題に対するトラブルシューティング
- システムの監視

Oracle Enterprise Manager は、Oracle9iAS Middle-Tier、Oracle9iAS Infrastructure および Oracle9i データベースなどの、Oracle Real-Time Collaboration の基礎となる外部コンポーネントを管理するために使用します。Real-Time Collaboration インタフェースは、Web Conferencing の監視およびアラートの生成のために使用します。

Oracle Enterprise Manager スタンドアロン・コンソールによって、データベース・インスタンスの起動および停止、データベース・インスタンスの状態表示などの基本的なデータベース・インスタンス管理操作も行います。詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

Real-Time Collaboration インタフェースは、あらゆる外部管理フレームワークに組み込むことができます。このインタフェースを使用すると、サービス可用性テストを実行できます。また、リアルタイムの監視データにより、システムをチューニングするための履歴分析に利用できるデータを定期的に収集できます。これらのインタフェースの詳細は、[第 7 章「監視」](#)を参照してください。

ビジネス管理

Oracle Real-Time Collaboration ビジネス管理では、業務マネージャおよびサポート・スタッフが、利用状況の監視およびビジネス関連のアクティビティの管理に使用できる様々な機能が提供されます。

会議の監視 : システムで現在実行されている会議を監視できます。この機能は、サポート面とビジネス管理面の両面で役立ちます。詳細は、[第 7 章「監視」](#)を参照してください。

レポート : Oracle Real-Time Collaboration では、全体の利用状況のレポートとフィードバック・レポートを生成できます。詳細は、[第 8 章「レポート」](#)を参照してください。

サイト管理 : 1 つの企業内で複数のライン・オブ・ビジネスまたは様々なサイト利用のために単一の Web Conferencing の配置をカスタマイズできます。ライン・オブ・ビジネスごとに、独自のロック・アンド・フィールドとカスタマイズされた Real-Time Collaboration システムとの統合を利用できます。詳細は、[第 9 章「Web Conferencing のサイト」](#)を参照してください。

監視機能およびレポート機能は、適切な Web Conferencing 管理権限を持つユーザーが Web Conferencing アプリケーション・インタフェースで使用できます。管理者も、`imctl` コマンドライン・インタフェースを使用して様々なビジネス管理タスクを実行できます。ReportManager 機能を使用すると、レポートを作成してそれを電子メールで自動的に受信者に送信できます。

ユーザー管理

Real-Time Collaboration システムでは、ユーザー・データの管理に Oracle Internet Directory を使用します。Real-Time Collaboration で使用される Oracle Internet Directory ホストは、インストール時に指定されます。この Oracle Internet Directory のユーザーはすべて、`enduser` ロールで Real-Time Collaboration を使用します。

デフォルトでは、ユーザーは Oracle Internet Directory の `oiddas` インタフェースを使用して管理されます。これは、通常、`http://<ldaphostname>:7777/oiddas` で利用できます。Oracle Internet Directory 管理者権限を持つユーザー (`orcladmin` など) は、ユーザーの作成、更新および削除を実行できます。

関連資料 : 詳細は、『Oracle Collaboration Suite for HP-UX PA-RISC, Linux Intel, and Solaris Operating System (SPARC) インストレーションおよび構成ガイド』を参照してください。

管理者ロード・マップ

Oracle Web Conferencing の配置およびシステムの管理を正常に行うために、オラクル社では、次の手順で作業を進めることをお勧めしています。

手順 1 Oracle Web Conferencing の理解

配置の前に、アーキテクチャ、コンポーネント、エンド・ユーザー接続、ロード・バランシング、ネットワークとポートについての対策を含む Oracle Web Conferencing 製品の基本概念を理解しておきます。Web Conferencing のアーキテクチャおよびコンポーネントについては、この章および第 2 章「[Web Conferencing の理解](#)」を参照してください。

手順 2 配置の計画

『Oracle Web Conferencing サイジング・ガイド』のサイジング・ガイドラインに従って、実際の配置用にハードウェア要件を見積もります。ファイアウォール対策や読み込みによるロード・バランサなどを含む、他の Web ベース・アプリケーションの配置を考慮します。

手順 3 Oracle Web Conferencing のインストール

『Oracle Collaboration Suite for HP-UX PA-RISC, Linux Intel, and Solaris Operating System (SPARC) インストールおよび構成ガイド』の手順に従って、Oracle Real-Time Collaboration システムをインストールします。

注意： インストール・ガイドでは、Oracle Collaboration Suite のすべてのツールをインストールするための情報を提供します。Web Conferencing のみをインストールする場合は、インストールの概要の部分および Web Conferencing のインストールの項を参照してください。

次に、第 4 章「[インストール後](#)」のインストール後の手順を実行します。完了後、この章で説明されているインストール後の検証テストを実行します。設定が不十分な場合、一部のテストに失敗することがあります。ほとんどの場合、構成に不備があることが原因です。問題が発生したらその都度構成しなおしてください。

手順 4 Oracle Web Conferencing の監視

定期的にサービス可用性テストを実行することにより、Real-Time Collaboration システムの状態を監視します。テスト結果をアラート管理システムへ反映させます。詳細は、第 7 章「[監視](#)」を参照してください。

手順 5 Oracle Web Conferencing のトラブルシューティング

必要に応じてシステムのトラブルシューティングを実施し、ユーザーの苦情や、手動またはアラートで実行される診断テストによって検出された障害に対応します。必要に応じて、「モニター」、「レポート」および「システム」タブで使用可能な情報を使用します。

手順 6 Web Conferencing システムのチューニング

必要に応じて、Web Conferencing (Real-Time Collaboration) システムをチューニングします。既存の構成を変更するか、さらにマシンを追加する必要がある場合があります。

Web Conferencing の理解

この章では、Oracle Web Conferencing の概要およびアーキテクチャについて説明します。
この章では、次の内容について説明します。

- Real-Time Collaboration の用語および概念
- 各プロセス内およびプロセス間の相互作用などの Oracle Web Conferencing の Real-Time Collaboration プロセス。
- Web Conferencing Server に接続されている様々なクライアントの会議の詳細なランタイム・フロー。
- Web Conferencing に必要なポート、およびネットワークの接続性の問題の概要

概念および用語

次の項では、Oracle Real-Time Collaboration で使用する一部の用語を詳細に説明します。また、システムの基本概念についても説明します。

Real-Time Collaboration インスタンス

Real-Time Collaboration インスタンスは、同じマシンにインストールされた Real-Time Collaboration コンポーネントのグループです。

3 つの基本コンポーネント（コア・コンポーネント、Document Conversion Server および Voice Conversion Server）がインストール時に作成されます。これらのすべてが同一マシン上にインストールされる場合、インスタンスは 1 つのみになります。Real-Time Collaboration リポジトリは、Oracle Collaboration Suite Information Store がインストールされている場合は Information Store データベースにあり、それ以外の場合は最初のコア・コンポーネントのインストール中に作成されます。

関連資料： 詳細は、『Oracle Collaboration Suite for HP-UX PA-RISC, Linux Intel, and Solaris Operating System (SPARC) インストレーションおよび構成ガイド』を参照してください。

Real-Time Collaboration コンポーネント

Oracle Real-Time Collaboration コンポーネントは、同一の機能を実行するインスタンス内のプロセス・セットです。各コンポーネントには、コンポーネント・タイプとコンポーネント名があります。（コンポーネント・タイプおよびコンポーネント名は、[第 10 章「imctl コマンドライン・ユーティリティ」](#)で説明するとおり、imctl コマンドを使用してシステムを構成する場合に使用できます。）

次の表に、Oracle Real-Time Collaboration コンポーネントのタイプと名前を示します。

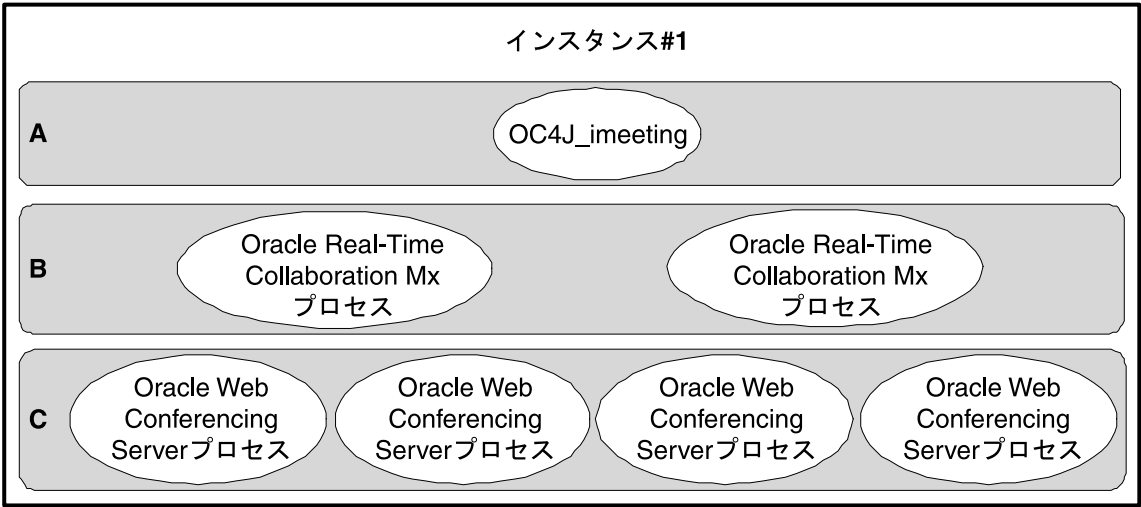
表 2-1 Real-Time Collaboration コンポーネント

正式なコンポーネント名	コンポーネント・タイプ	コンポーネント名	プロセス数
Oracle Web Conferencing Server	clbsvr	imt-collab	1 ～ n
Web Conferencing の J2EE アプリケーション : OC4J_immeeting	oc4j	oc4j_immeeting	1 ～ n
Multiplexor	mxcomm	imt-mx	1 ～ n
Voice Conversion Server	voiceconv	imt-voiceconv	1
Document Conversion Server	docconv	imt-docconv	1
Real-Time Collaboration Process Monitor	imt-pm	imt-pm	1

imtctl コマンド `listComponents` を使用して、インスタンス内のコンポーネントのリストを表示できます。詳細は、[第 10 章「imtctl コマンドライン・ユーティリティ」](#)を参照してください。

図 2-1「[Real-Time Collaboration インスタンスのコンポーネントおよびプロセス](#)」に、3 つのコンポーネントとそれらのプロセスで構成されるインスタンスを示します。

図 2-1 Real-Time Collaboration インスタンスのコンポーネントおよびプロセス



コンポーネント A: OC4J_imeting (1 つのプロセス)

コンポーネント B: Real-Time Collaboration Multiplexer (2 つのプロセス)

コンポーネント C: Web Conferencing Server (4 つのプロセス)

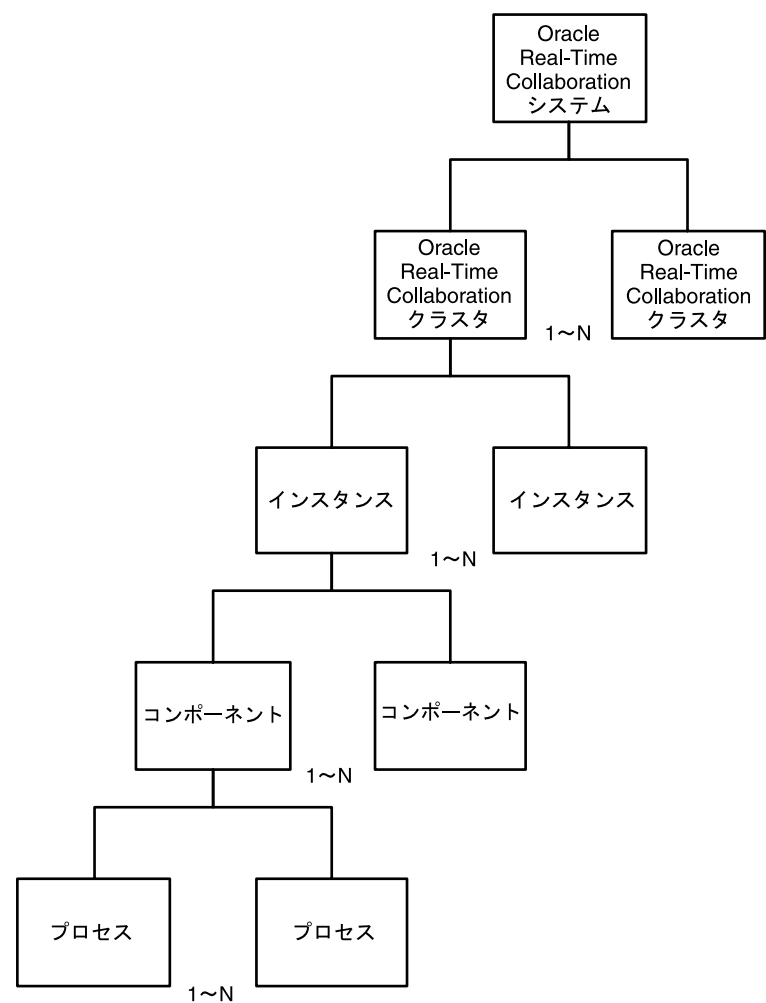
Real-Time Collaboration クラスタ

InstanceLocation プロパティが同じで、同じ Real-Time Collaboration リポジトリを使用する Real-Time Collaboration インスタンスのグループです。クラスタの詳細は、[第 3 章「配置の計画」](#)を参照してください。

Real-Time Collaboration システム

同じ Oracle Real-Time Collaboration リポジトリを共有するすべてのインスタンスのセットです。インスタンスはクラスタの一部として構成できるため、Oracle Real-Time Collaboration システムは、すべてのクラスタの集合であると考えられます。

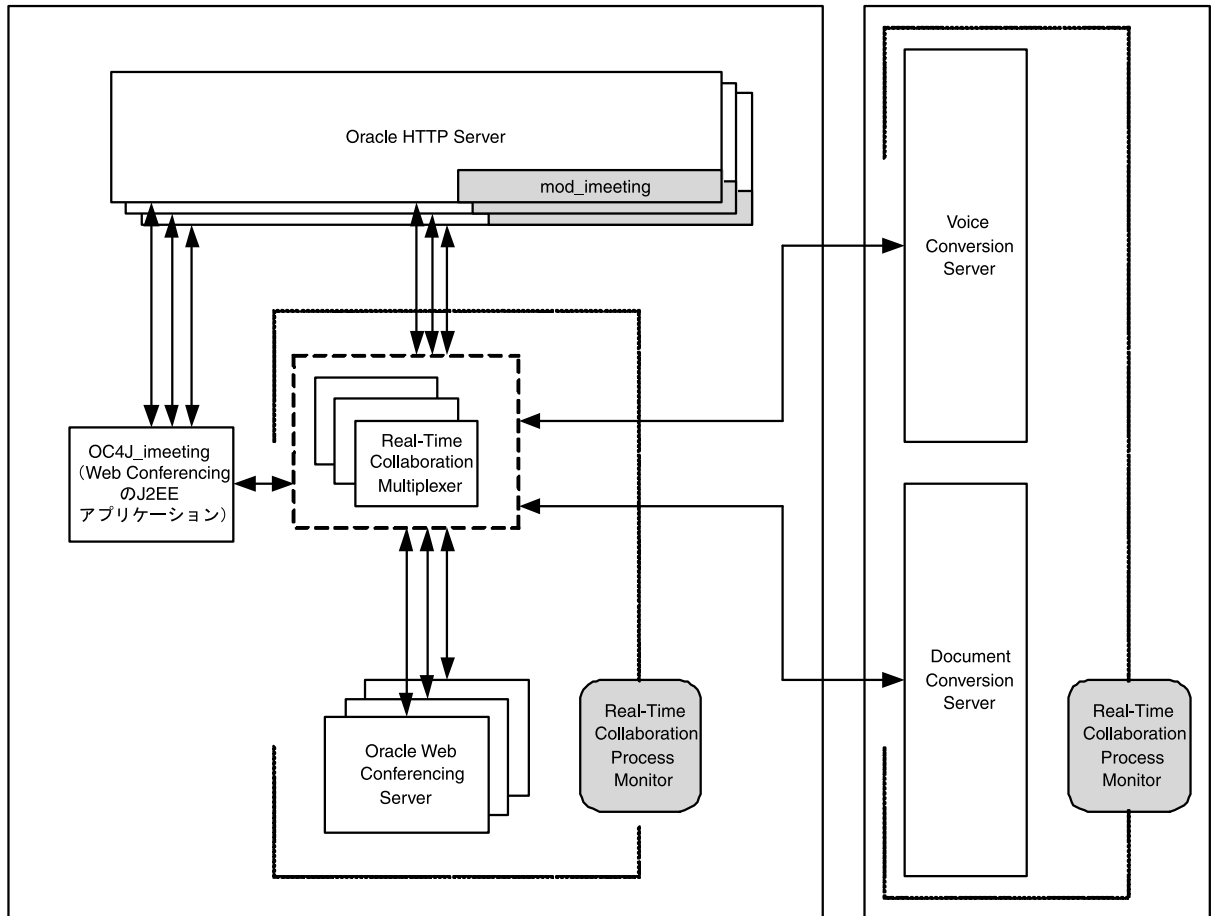
図 2-2 Real-Time Collaboration システムの階層



Real-Time Collaboration コンポーネントの機能

図 2-3 「Real-Time Collaboration アーキテクチャ」に、Real-Time Collaboration コンポーネントの相互関係を示します。次の項では、Web Conferencing システムでの各コンポーネントの役割の詳細を説明します。

図 2-3 Real-Time Collaboration アーキテクチャ



Oracle Web Conferencing Server

Web Conferencing Server コンポーネントは、次のことを実行します。

- 会議のすべての参加者の状態と参加者の会議内での権限を管理します。
- 会議中にアクティブなすべてのコラボレーション・モードに対してリアルタイム・データを効率的に配信します。
- 会議を記録およびアーカイブするためのサービスを提供します。

Real-Time Collaboration Multiplexer (mx)

Multiplexer コンポーネントは、次のことを実行します。

- クライアント、Web Conferencing Server およびその他の Real-Time Collaboration プロセスからの接続を受け入れます。
- すべてのクライアント、およびマシン上のすべての Web Conferencing Server の間のデータ通信をルーティングします。
- すべてのコンポーネントの通信ハブとして動作します。

OC4J_immeeting

OC4J_immeeting は、Oracle9iAS Containers for J2EE で動作する Oracle Web Conferencing の J2EE アプリケーションです。次のことを実行します。

- エンド・ユーザーに対して、Oracle Web Conferencing の Web ベースのユーザー・インタフェースを提供します。
- Oracle Calendar などの外部アプリケーションとの統合を提供します。
- ユーザー管理のために Oracle Internet Directory と接続します。

Real-Time Collaboration Process Monitor (imt-pm)

このプロセス・モニターは、すべての Real-Time Collaboration プロセス（OC4J_immeeting プロセスを除く）を監視し、プロセス停止時にはプロセスを再起動して高可用性を実現します。このプロセス自体は、Oracle Process Management and Notification システムによって監視されます。

Voice Conversion Server

Voice Conversion Server は、音声会議システムに接続してアナログ音声ストリームを取り込み、それをデジタル化して、mx 経由で Web Conferencing Server プロセスへ配信します。

Document Conversion Server

Document Conversion Server は、ドキュメント・プレゼンテーション用に Microsoft Office ドキュメントを HTML に変換します。Web Conferencing アプリケーションは、ドキュメント変換のためのフロント・エンドをユーザーに提供します。

HTTPD +mod_imeeting

mod_imeeting プラグインは、Oracle HTTP Server と相互作用します。これにより、Oracle Web Conferencing でエンド・ユーザーの接続要求をリスニングする唯一のリスニング・ポイントとして Oracle HTTP Server を使用できるようになります。Oracle HTTP Server をリスナーとした接続が確立されると、その接続はソケット・ハンドオフを使用して mx に渡されます。HTTP Server とプラグインの相互作用の状態の詳細は、2-10 ページの「[クライアント接続の詳細](#)」を参照してください。

プロセスの相互作用

次の項では、インスタンス内およびインスタンス間の Real-Time Collaboration プロセスについて説明します。また、これらのプロセスで確立される接続についても説明します。

インスタンス内でのプロセスの相互作用

インスタンス内では、各 Web Conferencing Server プロセスは常にそれぞれの Multiplexor (mx) プロセスに接続されています。

各 OC4J プロセスは、そのインスタンスが属しているクラスタ内の任意の mx に接続できます。OC4J は、最初に必要に応じていずれかの mx プロセスに接続し、それ以降はその接続をキャッシュします。

各会議の参加者は、Oracle Web Conferencing コンソールから、直接またはソケット・ハンドオフを介していずれかの mx プロセスに接続します (2-10 ページの「[クライアント接続の詳細](#)」を参照)。mod_imeeting は、同じインスタンス内のすべての mx プロセスに接続します。

インスタンス間でのプロセスの相互作用

インスタンス間では、あるインスタンスの Voice Conversion Server プロセスおよび Document Conversion Server プロセスが、これらのプロセスがサービスを提供するように構成されている他のインスタンスのすべての Multiplexer プロセスに接続されます。

接続

Real-Time Collaboration コンポーネントは、仮想チャネル接続と Real-Time Collaboration リポジトリ (データベース) への接続の両方を確立します。

仮想チャネル

通信ハブとして動作する Multiplexer にすべてのプロセスが接続するため、次のような必須の仮想チャネルが作成されます。

- Web Conferencing コンソールは、会議の間、Multiplexer を介して Web Conferencing Server プロセスに接続します。

- Oracle Web Conferencing OC4J_immeeting プロセスは、Multiplexer を介して、ドキュメント変換に使用される Document Conversion Server プロセスに接続します。
- 各 Web Conferencing Server プロセスは、Multiplexer を介して、会議中の音声ストリーミングのために、Voice Conversion Server プロセスに接続します。

データベース接続

- 各 Web Conferencing Server プロセスは、Real-Time Collaboration リポジトリへの接続プールを保持します。
- 各 OC4J_immeeting プロセスは、Real-Time Collaboration リポジトリへの接続プールを保持します。
- 各 Document Conversion Server は、Real-Time Collaboration リポジトリへの接続を保持します。
- 各 Real-Time Collaboration Process Monitor は、Real-Time Collaboration リポジトリへの接続を保持します。

ランタイム・フロー

次の項では、ユーザーが会議に参加する場合のイベントのフローおよびユーザーが Web Conferencing システムへ接続する方法の詳細を説明します。

会議参加フロー

参加者が Oracle Web Conferencing アプリケーション、電子メール招待状または Oracle Web Conferencing と統合されたアプリケーションから会議に参加する場合、次のイベントが発生します。

1. アプリケーションは、会議のレコードをデータベースから参照し、会議を開催できる Web Conferencing Server のリストを取得します。また、参加する人物とその人物が参加する会議の属性に基づいて要求を許可します。
2. Oracle Web Conferencing アプリケーション (OC4J_immeeting) のサーバー・ロード・バランサ機能は、Web Conferencing Server プロセスを選択してそこでセッションを開始し、会議 ID と Web Conferencing Server プロセス間の対応付けを記録します。
3. Web Conferencing コンソールの接続に必要な次のクライアント・パラメータのリストが生成されます。
 - Oracle Web Conferencing アプリケーション (OC4J_immeeting) の Multiplexer ロード・バランサ (OC4J で稼働) 機能。そのサーバー・プロセスへの接続に使用する 1 つの mx が選択されます。

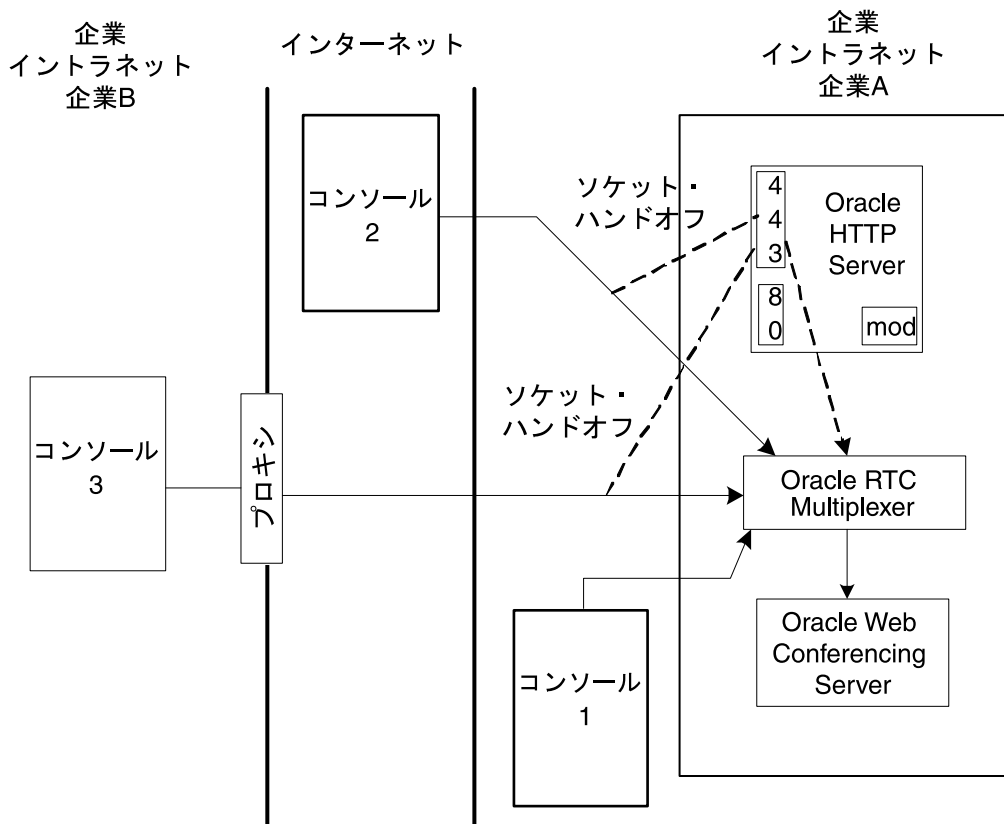
- mx の記述から、HTTPS 接続情報（接続のリダイレクトに使用可能な Oracle HTTP Server および mod を識別）が取得されます。
 - 暗号化されたクライアント認証トークンが生成されます。
 - ユーザー・フィードバック情報を送り、コンソールで使用する Java および JSP コンポーネントを取得するための URL が生成されます。
4. Oracle Web Conferencing アプリケーションが応答することによって、ユーザーの Web ブラウザ上でポップアップ・ウィンドウが開き、クライアント・パラメータを含む Web Conferencing コンソール・インストーラ（ActiveX コントロール）が表示されます。
 5. ユーザーが Web Conferencing コンソール・インストーラをまだ入手していない場合、または使用しているバージョンが古い場合は、Internet Explorer によって自動的に最新バージョンがダウンロードされインストールされます（セキュリティ警告ダイアログが表示されます）。
 6. Web Conferencing コンソール・インストーラで互換性チェックが実行されます。互換性チェックが正常に終了したら、クライアント・システムで使用可能な Web Conferencing のバージョンがチェックされます。
 7. クライアント・マシン上に Web Conferencing コンソール・インストーラがインストールされていない場合、または Web Conferencing コンソールのバージョンが現在のバージョンでない場合は、新しいコンソール・パッケージがダウンロードされ、インストールされます。
 8. Web Conferencing コンソール・インストーラは、すべてのパラメータを使用して Web Conferencing コンソールを（個別プロセスとして）起動します。
 9. Web Conferencing コンソールは、「[クライアント接続の詳細](#)」で詳細が説明されているアルゴリズムを使用して、mx への接続を試行します。結果は、次のとおりです。
 - すべての試行が失敗した場合、クライアントにエラー・メッセージが送信されます。
 - 接続が確立された場合、Web Conferencing コンソールは mx を介して会議セッションへの仮想チャネルを作成し、次の手順に進みます。
 10. Web Conferencing コンソールは、クライアントを識別する認証トークンをサーバーに送信します。
 11. Web Conferencing Server は、すべての会議の状態情報（参加者リスト、共有コンテンツ、チャットの記録など）を Web Conferencing コンソールに送信して、コンソールを初期化します。
 12. Web Conferencing コンソールがオープンされ、会議が開始されます。

クライアント接続の詳細

この項では、参加者が Web Conferencing へ接続する方法の詳細を説明します。会議の参加者はすべて、次の3つのカテゴリに分類されます。

- ファイアウォールをまったく横断せずに、直接 Oracle Web Conferencing へ接続する参加者。たとえば、企業イントラネット内のすべての参加者。
- 企業のファイアウォールを横断して、インターネットから Web Conferencing へ接続する参加者。たとえば、Web Conferencing が企業の非武装地帯（DMZ）に配置されており、参加者がインターネットから会議に接続する場合。
- 他の企業のイントラネットからその企業のプロキシを経由してインターネット経由で接続する参加者。

図 2-4 Web Conferencing へのクライアント接続



Web Conferencing コンソールは、次の方法で Multiplexer への接続を試行します。

1. **TCP/IP 直接接続**: 通常、この方法は、企業イントラネット内のクライアントに有効です。また、Multiplexer ポートがインターネットに対してオープンである場合は、インターネットから接続しているクライアントに有効です。
2. **HTTPS 経由** (Oracle HTTP Server/mod_imeeting 経由): TCP/IP 直接接続に失敗した場合、Web Conferencing コンソールは HTTPS での接続を試行します。この方法は、通常、オープンなインターネットまたは透過プロキシからアクセスするクライアントに有効です。Oracle HTTP Server によって接続が確立されると、その接続はソケット・ハンドオフを使用して mod_imeeting から Multiplexer に渡されます。これによって、Multiplexer と Web Conferencing コンソール間で直接通信することが可能になります。
3. **HTTPS トンネル** (Oracle HTTP Server/mod_imeeting 経由): TCP/IP 直接接続および HTTPS 経由の接続が両方とも失敗した場合、会社の内部プロキシを介して接続している別のイントラネットのクライアントが接続する方法は、HTTPS トンネルを介して接続する方法のみです。Web Conferencing コンソールは、クライアント・マシンのブラウザ設定からプロキシ情報を取得し、そのプロキシを介して Oracle HTTP Server への接続を確立します。接続の確立後、その接続は mod_imeeting から Multiplexer に渡されます。この場合、Web Conferencing コンソールと Multiplexer はリモート・プロキシを介して HTTPS トンネルで通信します。

この項で説明した方法で接続するために必要な接続情報は、ユーザーが会議に参加する際に Web Conferencing コンソールに提供されます (ユーザーに対して透過的)。

ポートとネットワークの接続性

次の表に、Oracle Web Conferencing のポートとネットワークの接続性情報を示します。

表 2-2 ポートとネットワークの接続性

コンポーネント	プロトコル	ポート	IP	ポートの数	アクセス可能性 (必須)	アクセス可能性 (推奨)
Oracle HTTP Server/mod_imeeting	HTTP	80	プライマリ	1	すべてのクライアント	
Oracle HTTP Server/mod_imeeting	HTTPS	443	プライマリ	1	すべてのクライアント	
Oracle HTTP Server/mod_imeeting	HTTPS トンネル	443	セカンダリ ¹	1	すべてのクライアント	
mx (Multiplexer)	mx ²	2400 ~ 49151 ³	プライマリ	n	Voice Conversion Server および Document Conversion Server は、サービス提供先のインスタンスの Multiplexer にアクセスする必要があります。	イントラネット・クライアントは TCP/IP で直接接続できます。Real-Time Collaboration コア・コンポーネントが DMZ に配置されている場合、イントラネットからのこれらのポートへのアクセスは問題になりません。
mx (Windows NT 上)	リダイレクト ⁴	2400 ~ 49151	プライマリ	n	ローカル・ホスト	
voiced	HTTP	2400 ~ 49151	プライマリ	1	Voice Conversion Server でサポートされている Real-Time Collaboration コア・コンポーネントが動作するすべてのマシン。	リモート・ステータス用
imt-pm	HTTP	2400 ~ 49151	プライマリ	1	すべての Real-Time Collaboration インスタンスからのローカル・ホスト。	

¹ Oracle9iAS Web Cache が Real-Time Collaboration コア・コンポーネントと同じマシン上にある場合にのみ必要なセカンダリ IP アドレス。詳細は、4-7 ページの「インターネット・アクセスに対する Web Conferencing の設定」を参照してください。

² mx は、Real-Time Collaboration 固有の内部プロトコルです。

³ ポートはこの範囲内で選択されます。

⁴ リダイレクトは、Real-Time Collaboration 固有の内部プロトコルです。

インターネットからアクセス可能な配置では、インターネットまたはエクストラネットに面している DMZ のファイアウォールの場合、従来のポート（443 および 80）のみを開けば十分に足りります。

ユーザー管理

Oracle Real-Time Collaboration では、LDAP を使用する Oracle Internet Directory ストアを使用して、ユーザー認証を行います。Oracle Internet Directory ユーザーはすべて、Real-Time Collaboration を使用できます。ユーザーは、Oracle Internet Directory から利用できる標準機能を使用して作成されます。

関連資料： 詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

Real-Time Collaboration ユーザーには、異なるロールを割り当てることができます。ロールによって、ユーザーがアクセスできる Oracle Web Conferencing の機能が決定します。Web Conferencing には次のロールがあります。

エンド・ユーザー・ロール

エンド・ユーザー・ロールの *enduser* は、初めてシステムへログインするすべてのユーザーに付与されるデフォルトのロールです。これは、Oracle Web Conferencing のすべての正規ユーザー用のロールです。

ビジネス・モニター・ロール

ビジネス・モニター・ロールの *businessmonitor* は、システムを監視し、システムで実行できる様々なレポートへのアクセス権を持つ Oracle Web Conferencing ユーザーが使用します。このロールを付与されたユーザーは、「モニター」および「レポート」タブの他、Oracle Web Conferencing アプリケーションのすべてのエンド・ユーザー・タブにもアクセスできます。

ビジネス管理者ロール

ビジネス管理者ロールの *businessadmin* は、Web Conferencing の配置を管理する Web Conferencing ユーザーが使用します。エンド・ユーザーをサポートするユーザーもこれに該当します。この役割のユーザーは、Web Conferencing アプリケーションの「サイトの管理」および「システム構成」タブへアクセスできます。

imtctl コマンドの `modifyRole` オプションを使用して、Web Conferencing ユーザーにロールを割り当てます。imtctl の詳細は、[第 10 章「imtctl コマンドライン・ユーティリティ」](#)を参照してください。

Web Conferencing のサイト

Oracle Web Conferencing を使用すると、様々なライン・オブ・ビジネス（販売、サポートなど）用に個々のサイトを作成し、それらのサイトに対してシステム、アプリケーションおよび会議レベルのプロパティをカスタマイズできます。businessadmin 権限を持つユーザー（2-13 ページの「[ユーザー管理](#)」を参照）は、imtctl を使用してサイトを構成し、「サイト」タブにアクセスしてサイトを監視できます。サイトの作成方法および使用方法の詳細は、[第 9 章「Web Conferencing のサイト」](#)を参照してください。

レポート

Oracle Real-Time Collaboration は、Oracle Web Conferencing アプリケーションで利用可能な電子メール・レポートおよび利用状況レポートなどの様々なレポート機能を提供しています。これらの機能には、送信者および受信者の電子メール・アドレスなどのように、インストール後の構成が必要な部分もあります。構成が必要なプロパティの詳細は、[第 4 章「インストール後」](#)を参照してください。

businessadmin または businessmonitor ロールを付与されたユーザー（2-13 ページの「[ユーザー管理](#)」を参照）は、「レポート」タブでレポートを参照できます。Web Conferencing のレポートの詳細は、[第 8 章「レポート」](#)を参照してください。

配置の計画

この章では、Oracle Web Conferencing を配置する際の考慮事項について説明します。各地に分散している企業の場合、サイジングに始まりファイアウォール対策、トポロジの問題まで様々な問題を考慮する必要があります。

サイジングのガイドライン

Web Conferencing を個々のニーズに合うように設定するには、『Oracle Web Conferencing サイジング・ガイド』を参照してハードウェア要件を決定してください。このマニュアルは、Web Conferencing をインストールおよび配置する前に参照してください。

インターネット/イントラネットの問題

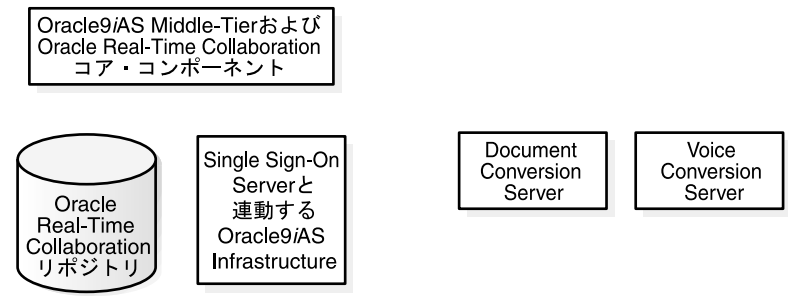
これまでの章で説明したとおり、Oracle Web Conferencing システムには、次のコンポーネントが含まれています。

- Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネント : Web Conferencing の中心機能を提供します。
- Document Conversion Server: 会議中に共有する必要がある Microsoft Office ドキュメントを変換します。
- Voice Conversion Server: 会議中に音声データを配信します。
- Oracle9iAS データベースに常駐する Oracle Real-Time Collaboration データベース・スキーマのセット。

また、Oracle Web Conferencing システムは、Oracle9iAS Infrastructure システムと連動して、ユーザー・サインオンを管理し、ユーザー情報を Oracle Internet Directory と同期化させます。

図 3-1 「Oracle Real-Time Collaboration の基本コンポーネント」に、Web Conferencing に必要なコンポーネントを示します。次のコンポーネントは、Web Conferencing のインストール後に使用できます。

図 3-1 Oracle Real-Time Collaboration の基本コンポーネント



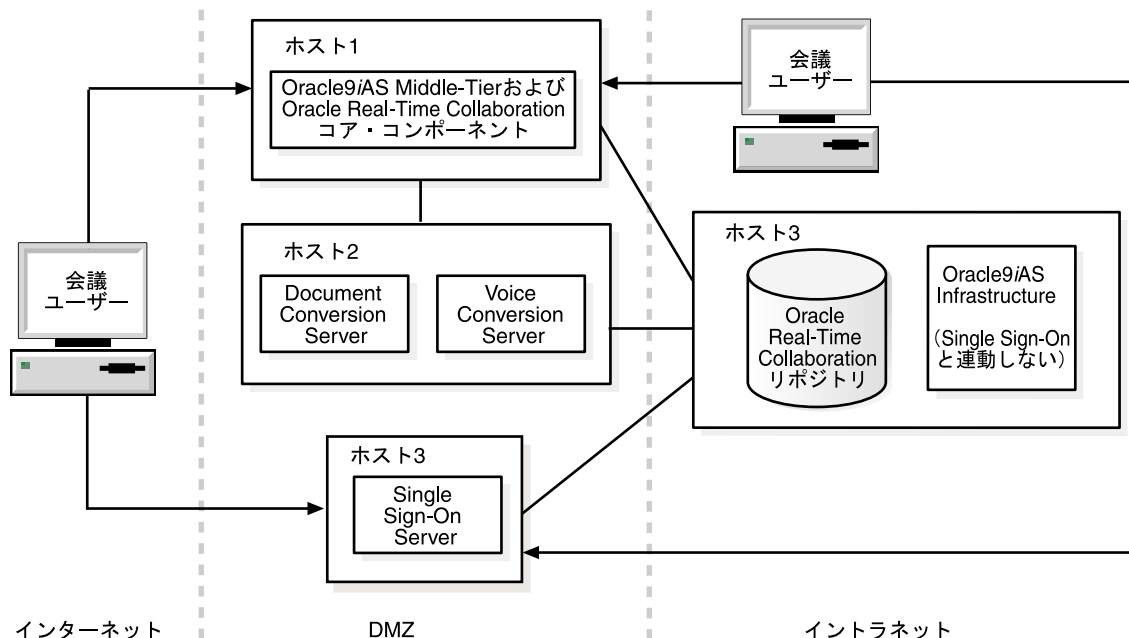
Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネント、Document Conversion Server および Voice Conversion Server は、Oracle9iAS Middle-Tier システムにインストールされます。Document Conversion Server および Voice Conversion Server は、Microsoft Windows および Microsoft Office を実行しているコンピュータにインストールする必要があります。(Voice Conversion Server および Document Conversion Server には、追加のハードウェアおよびソフトウェア要件があります。詳細は、『Oracle Web Conferencing サイジング・ガイド』を参照してください。) サポートしているデータベースおよびインフラストラクチャ・システムは、コア・コンポーネントとともにインストールすることもできますが、別のデータベース・ホストにインストールすることもできます。

ただし、通常、ファイアウォールの背後のセキュアなイントラネット・エリア、ファイアウォールとパブリック・インターネット間の DMZ (非武装地帯)、イントラネット内とファイアウォール外の両方の、インターネット上の Web Conferencing ユーザーを含む企業のイントラネットでは会議サービスをサポートする場合は、いくつかの点について注意する必要があります。

図 3-2 「Oracle Real-Time Collaboration の配置例」に、企業ファイアウォール外のユーザーにアクセスを許可できる配置の例を示します。コンポーネントは、DMZ 内またはファイアウォールの背後に、次のとおり配置されます。

- Real-Time Collaboration コア・コンポーネントは、DMZ 内に配置され、HTTP 用にはポート 80 で、HTTPS 用にはポート 443 でリスニングを行います。
- 会議に参加するユーザーの認証に使用する Single Sign-On Server は、DMZ に配置され、ファイアウォール外のユーザーとの通信を行います。
- Real-Time Collaboration リポジトリ (Single Sign-On なし) は、内部ファイアウォールの背後に配置されます。
- Oracle9iAS Infrastructure は、内部ファイアウォール内に配置されます。

図 3-2 Oracle Real-Time Collaboration の配置例



Single Sign-On Server と Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネントは、必要に応じて、同じ中間層システムに配置できます。Single Sign-On Server と Oracle9iAS Infrastructure は、両方が DMZ に配置されてインターネット・ユーザーにサービスを提供する場合、同じシステムに配置できます。リポジトリと Oracle9iAS Infrastructure は、別々のマシンにも同じマシンにも配置できます。Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネントと同じマシンにも配置できます。

また、Multiplexer のリスニング・ポートを配置する場所を検討する必要があります。

- mx ポートへの TCP/IP 直接接続の使用可能化: すべてのイントラネット・ユーザーが、Real-Time Collaboration コア・コンポーネント (mx によってリスニングが行われるポート) への TCP/IP 直接接続を使用できるようにする必要があります。
- mx ポートへの内部 DMZ ファイアウォールのオープン (Document Conversion Server および Voice Conversion Server をサポートする必要がある場合): Voice Conversion Server および Document Conversion Server がサービス提供先の Real-Time Collaboration コア・コンポーネントに接続できるようにする必要があります。これらを異なる DMZ に配置する場合、Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・マシンの mx コンポーネントがリスニングするポートで、イントラネットと DMZ 間のファイアウォールを開けておく必要があります。

ロード・バランサの問題

ロード・バランサ（LBR）を使用して、Oracle 中間層サーバーで処理されるプロセスを管理できます。その場合は、次のことに注意してください。

- LBR の背後のマシンはすべて、イントラネットでルーティング可能な IP アドレスを持ち、標準の HTTPS ポート（443）を使用してインターネットから直接アクセスできる必要があります。
- 地域ロード・バランサ（地域で負荷を分散するロード・バランサ）を使用する場合は、Oracle Real-Time Collaboration クラスタを作成して、地理的な分散状況に基づいてシステムをパーティション化する必要があります（詳細は、3-6 ページの「[Real-Time Collaboration クラスタ](#)」を参照）。

例は、第 6 章「[配置サンプル](#)」を参照してください。

分散配置の問題点

様々な地域に各部門を持つ企業で Web Conferencing を使用する場合は、次のことを注意する必要があります。

- 1 地域で開催される会議の数
- 地域を横断して開催される会議の数
- 地域を横断して開催される音声配信会議の数
- クラスタを作成すると、Real-Time Collaboration プロセスを別々の地域に分散させるために有効かどうか

次の項では、Real-Time Collaboration コア・コンポーネントおよび Voice Conversion Server を配置する場所を検討する場合に適用する実践的な規則について説明します。

コア・コンポーネントのローカルまたはグローバル配置

Web Conferencing の使用中は、1 人のユーザーのデスクトップから他の複数のエンド・ユーザーのデスクトップにデータが配布されるため、エンド・ユーザーの所在地によっては待機時間の問題が発生する場合があります。Oracle Web Conferencing 自体には、ネットワーク待機時間の問題を処理する機能はありません。他の対策によって、この問題を解決する必要があります。

ただし、特定の地域で開催される会議の数に応じて、Real-Time Collaboration コア・コンポーネントを配置する場所を検討できます。次に、2 つの配置例を示します。

配置例 1: 特定の地域で多くの会議が開催される場合

企業で、同じ地域の参加者が多い会議を開催する場合、その地域ごとに Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・インスタンスのセットを配置することをお勧めします。

たとえば、世界中に複数の部門が分散している企業で、各部門の従業員間で多くの会議が開催されるとします。異なる地域の他の部門から参加者を迎える会議を開催する場合もあります。

この場合、ユーザーが異なる地域の **Real-Time Collaboration** クラスタを使用して会議に参加するとネットワーク待機時間の問題が発生し、得策ではありません。かわりに、各地域ごとに **Real-Time Collaboration** コア・コンポーネント・インスタンスを使用するようにします。コンポーネントの地域別クラスタを作成する方法については、3-6 ページの「**Real-Time Collaboration クラスタ**」を参照してください。

配置例 2: 全地域で多くの会議が開催される場合

ほとんどの会議で異なる地域から参加者が参加する場合、地域ごとに **Real-Time Collaboration** コア・コンポーネント・インスタンスのセットを配置しても、待機時間の問題は解決できません。

たとえば、アメリカ合衆国に本社を置く企業が、販売およびサポート部門を、インドにある代理店に委託するとします。インド現地の代理店従業員とアメリカ合衆国の顧客が参加する会議が大部分を占める場合、インド現地に **Real-Time Collaboration** コア・コンポーネント・インスタンスを配置しても、待機時間の問題は解決できません。

Voice Conversion Server のローカルまたはグローバル配置

Voice Conversion Server は、使用する会議の電話番号に正確にアクセスできる地域に配置する必要があります。中継ポイントを介さずに番号にアクセスできる地域に **Voice Conversion Server** を配置すると有効です。たとえば、ほとんどの **Web Conferencing** ユーザーがイギリスなどの特定の地域に電話する場合、**Voice Conversion Server** をアメリカ合衆国ではなくイギリスに配置してイギリスの電話番号を呼び出すようにします。地域別コンポーネントを作成する方法については、「**Real-Time Collaboration クラスタ**」を参照してください。

Real-Time Collaboration クラスタ

システム内の複数のインスタンスを明示的にグループに分割しない場合、すべてのインスタンスの **Web Conferencing Server** プロセスは 1 つのグループに含まれると考えられます。新しい会議が作成されて **Web Conferencing Server** プロセスを選択する必要がある場合は、必ずシステム内のいずれかの **Web Conferencing Server** に会議が割り当てられます。ただし、地理的な分散状況に基づいてシステムをクラスタに分割した方が便利な場合があります。

図 3-3 「Real-Time Collaboration クラスタ化」に、地域に基づいてコンポーネントがグループ化されている Web Conferencing の配置例を示します。

図 3-3 Real-Time Collaboration クラスタ化

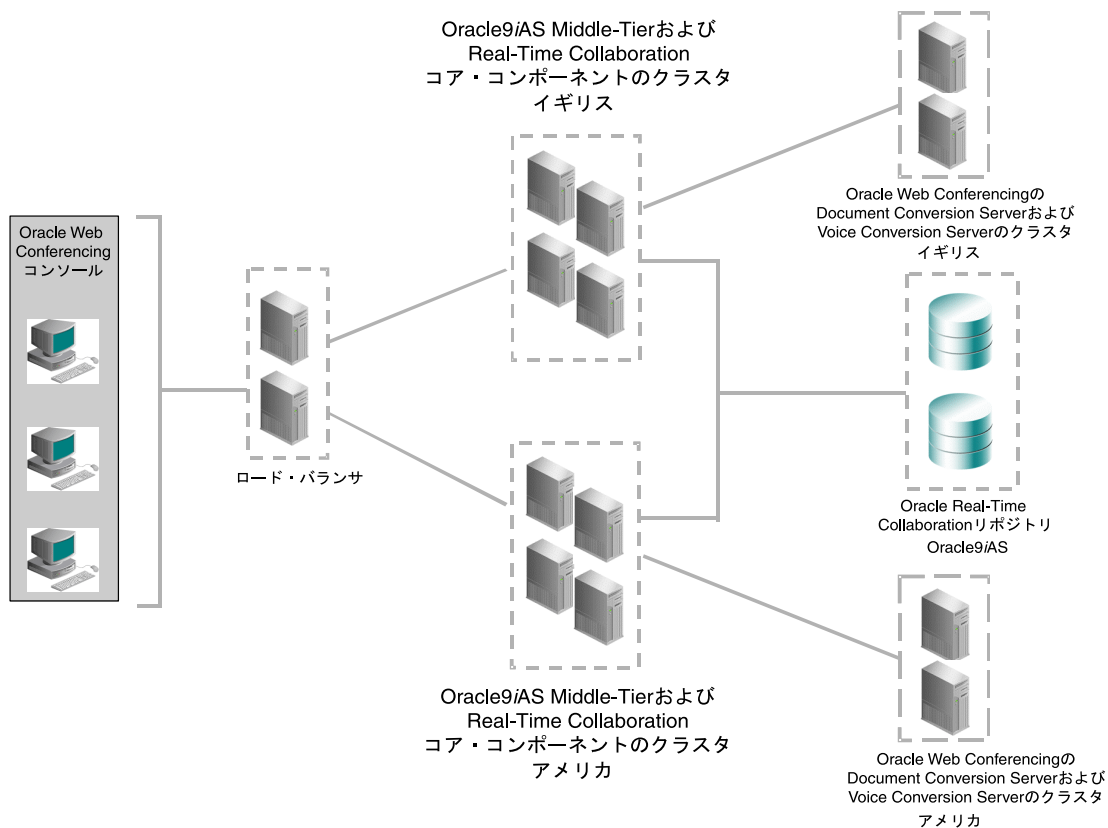


図 3-3 に示すクラスタと同様のクラスタを作成するには、InstanceLocation プロパティを使用します。同じ InstanceLocation プロパティ値を持つ複数のインスタンスは、Real-Time Collaboration クラスタを構成します。クラスタを作成すると、次の利点があります。

- **ロード・バランシング**: クラスタ内のインスタンスの Web Conferencing Server プロセスはすべて共有可能なサーバー資源となり、異なる Web Conferencing Server 間での効率的な負荷分散が可能になります。
- **ロードの分離**: ハードウェア・ロード・バランサも各地に分散している場合、個々の場所に適した、別々の Real-Time Collaboration クラスタでサービスをユーザーに提供できます。
- **高可用性**: 1 つのインスタンスが停止した場合は、そのインスタンス内のすべての Web Conferencing Server が停止しますが、同じクラスタ内の他のインスタンスの Web Conferencing Server によって、ユーザーへのサービスを中断することなく提供できます。

Web Conferencing アプリケーション (OC4J_limeeting) は、会議のための Web Conferencing Server プロセスを選択するコンポーネントです。Oracle Web Conferencing アプリケーションは Web Conferencing Server プロセスの場所を認識し、同じ場所の値を持つインスタンス内の Web Conferencing Server プロセスを選択します。

Document Conversion Server または Voice Conversion Server にも、InstanceLocation プロパティを割り当てることができます。異なる地域に設置されている複数の Document Conversion Server または Voice Conversion Server (あるいはその両方) が存在し、InstanceLocation プロパティを使用して Real-Time Collaboration コア・コンポーネントのクラスタを指定した場合は、一致する InstanceLocation プロパティを Document Conversion Server および Voice Conversion Server に割り当てることもできます。たとえば、図 3-3 「Real-Time Collaboration クラスタ化」に示すとおり、イギリスの Document Conversion Server および Voice Conversion Server の各インスタンスは、場所属性の値が UK の Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・セットにサービスを提供するように割り当てられます。アメリカ合衆国の Document Conversion Server および Voice Conversion Server の各インスタンスは、場所属性の値が US の Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・セットにサービスを提供するように割り当てられます。

関連資料: InstanceLocation プロパティの設定方法の詳細は、5-27 ページの「[クラスタを設定するプロパティ](#)」を参照してください。

インストール後

この章では、Oracle Web Conferencing を起動および実行するために必要なインストール後の手順について説明します。内容は次のとおりです。

- インストール後のタスク
- 「手動による Web Conferencing プロセスの起動および停止」

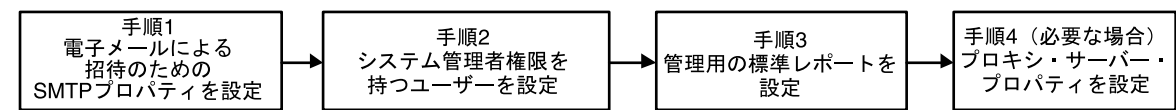
この章で説明するタスクを実行する際に、様々な Real-Time Collaboration プロパティを設定します。プロパティの詳細は、[第 5 章「構成」](#)を参照してください。プロパティの設定時は、`imtctl` コマンドを実行します。`imtctl` ユーティリティの詳細は、[第 10 章「`imtctl` コマンドライン・ユーティリティ」](#)を参照してください。

インストール後のタスク

Oracle Web Conferencing システムのインストール後、実行する必要がある構成タスクがあります。この項では、これらのタスクについて説明します。

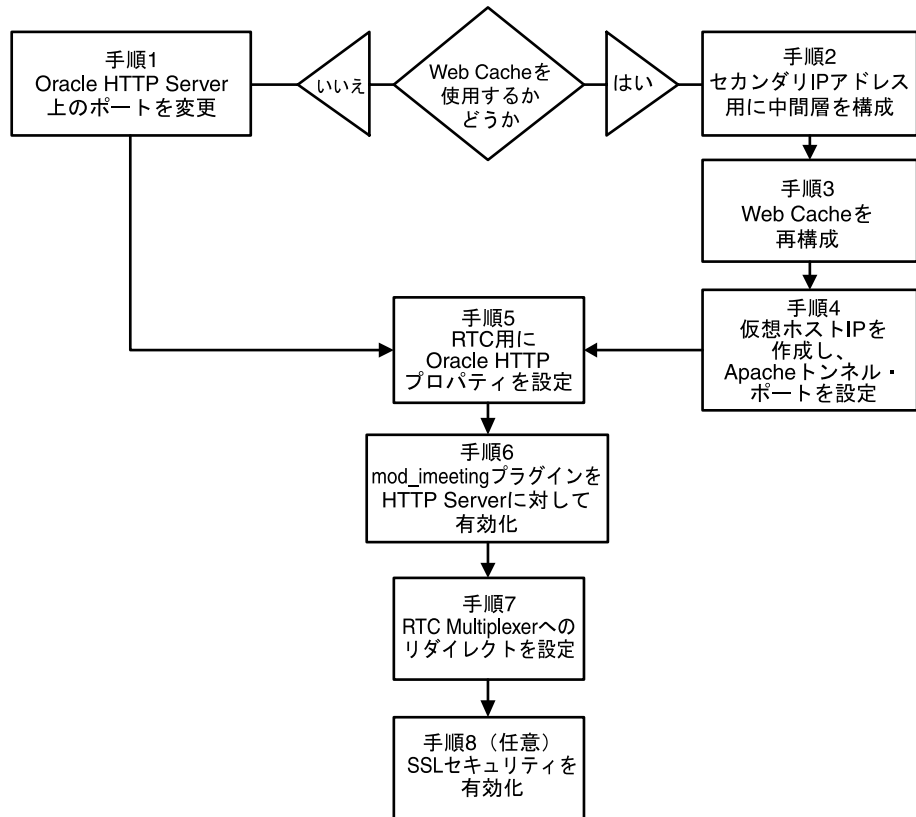
- [図 4-1](#) に、基本的なインストール後のタスクを示します。これらのタスクの概要は、4-4 ページの「[Web Conferencing の設定](#)」を参照してください。

図 4-1 Web Conferencing のインストール後のタスク



- インターネット上で、企業ファイアウォール外から会議参加者を迎える会議を開催する必要がある場合は、[図 4-2](#) に示す手順を実行します。手順 1 または手順 2～4 のいずれかを実行します。これらの手順の概要は、4-7 ページの「[インターネット・アクセスに対する Web Conferencing の設定](#)」を参照してください。

図 4-2 インターネット・アクセスに対する Web Conferencing の設定



- 音声を配信して会議を開催し、会議の音声を再生する必要がある場合。詳細は、4-13 ページの「[Web Conferencing に対する Document Conversion Server および Voice Conversion Server の設定](#)」を参照してください。
- Real-Time Collaboration コンポーネントを監視する必要がある場合。詳細は、4-14 ページの「[サービス可用性テストの設定](#)」を参照してください。
- `runtests` ユーティリティを使用して前述の構成を確認する場合。詳細は、4-15 ページの「[構成の検証](#)」を参照してください。

インストール後のタスクのタイプ

Oracle Web Conferencing システム（Oracle Web Conferencing コア・コンポーネント、Document Conversion Server および Voice Conversion Server のインスタンスを含む）のインストールで、Web Conferencing システム全体とインストールした Real-Time Collaboration コンポーネントの各インスタンスの両方に対してタスクを実行します。必要に応じて、他の Oracle サーバーに対してもタスクを実行できます。

- **システム・タスク** : Oracle Web Conferencing システム全体で 1 回実行する必要があります。ほとんどの場合、システムに新しいインスタンスが追加されてもこれらの手順を繰り返す必要はありません。必要に応じて、特定のインスタンスのグローバル設定をオーバーライドできます。
- **インスタンス・タスク** : 各インスタンスごとに 1 回実行する必要があります。実行する必要がある特定のタスク・セットは、システムの配置方法（インターネット・アクセスの許可、SSL セキュリティの有効化など）によって決まります。

次の項では、インストール後の手順について説明します。各手順で、実行するタスクのタイプを示します。

Web Conferencing の設定

Web Conferencing を使用して会議を開催するには、次の手順を 1 回実行します。

手順 1 既存の電子メールとの統合（システム・タスク）

Oracle Web Conferencing アプリケーションでは、ユーザーを会議に招待するなどの様々な目的で送信メールを生成できます。STMP ホストに関する情報を使用して Real-Time Collaboration システムを構成する必要があります。この手順は、1 回実行します。

1. Real-Time Collaboration コア・コンポーネントのインスタンスが構成されているマシン上で、テキスト・エディタを使用して次のスクリプトを開きます。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/scripts/mail.imt
```

2. スクリプトを編集して、次の Real-Time Collaboration プロパティのデフォルト値をシステムの実際の値と置き換えます。
 - Smtphost: 電子メールの SMTP サーバーのホスト名 (mailhost.mycompany.com など)。
 - Smtport: 電子メールの SMTP サーバーによってメールがリスニングされるポート (デフォルトは 25)。
 - EmailEnabled: 会議の招待状の電子メール送信の有効化。このプロパティは true に設定します。
 - AdminEmail: Web Conferencing システムから管理メールを受信する電子メールのアカウント名 (joe.smith@oracle.com など)。

これらのプロパティの詳細は、5-28 ページの「[電子メール招待状を設定するプロパティ](#)」を参照してください。

3. `imtctl` で次のスクリプトを実行してプロパティを設定します。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtctl < scripts/mail.imt
```

このスクリプトで、Real-Time Collaboration システム全体の電子メール・プロパティが設定されます。

手順 2 管理者ロールの設定（システム・タスク）

すべてのビジネス管理者権限を持つ 1 人以上のユーザーが必要です。ビジネス管理者は、システムの監視、レポートの表示、カスタム・サイトの作成とメンテナンスおよびシステム状態の確認を行うことができます。このユーザーを設定するには、`imtctl` 内で `modifyRole` コマンドを使用します。この手順は、1 回実行します。

- Real-Time Collaboration インスタンスが構成されているマシンで、次のコマンドを入力します。次の例を、適切なユーザー名で置き換えてください。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtctl modifyRole -username joe.smith@mycompany.com  
-rolename businessadmin
```

このコマンドの詳細は、5-21 ページの「[ユーザー権限を設定するプロパティ](#)」を参照してください。

手順 3 レポートの設定（システム・タスク）

「**レポート**」タブに表示されるシステム利用状況レポートは、UNIX および Linux では `imtreport`、Microsoft Windows では `imtreport.cmd` というスクリプトによって生成されます。これらのスクリプトは、次のことを実行します。

- 利用状況レポート・サマリー表への読込み
- `html` ファイル形式でのレポートの生成
- 管理者への電子メールの送信

定期的にスクリプトを実行するには、`cron` ジョブ（UNIX または Linux の場合）またはスケジュールされたタスク（Windows の場合）を設定する必要があります。この設定は、1 回行います。

1. Real-Time Collaboration コア・コンポーネントのインスタンスが構成されているマシン上で、テキスト・エディタを使用して次のスクリプトを開きます。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/scripts/imtreport
```

Windows の場合、スクリプト名は `imtreport.cmd` です。

2. 受信者リストのデフォルト値を置き換え、実行中のレポートを選択するように、スクリプトを編集します。スクリプトには、提供されているすべてのオプションについてのコメントが記述されています。次の項目を編集してください。
 - `imtreport` 内の行 `export IMT_USE_BI_CLASSES` を `export IMT_USE_REPORT_CLASSES` に変更します。この行の変更に失敗すると、`NoClassDefFound` エラーが発生します。
 - `SITE_ID` パラメータに、特定のサイト ID またはすべてのサイト用の 100 を設定します。空の文字列を設定すると、「TODAYSDATE は無効な識別子です」エラーが発生します。
 - カンマで区切られた受信者リストで、カンマの後の空白を削除します。削除に失敗すると、レポートは、受信者リストの最初の受信者のみに電子メールで送信されます。
 - `imtjvm` の最上位に `DISPLAY` 変数を設定します。設定に失敗すると、「コンストラクタ `javax.swing.plaf.FontUIResource` で問題が発生しました ...」エラーが発生します。
3. `imtctl` でスクリプトを定期的に行うように、`cron` ジョブまたはスケジュールされたタスクを設定します。レポートの情報は、週ごと（日曜日から土曜日まで）に分析されます。毎週日曜日にこのスクリプトを実行することをお勧めします。
 - UNIX および Linux の場合は、次のコマンドを実行する `cron` ジョブを作成します。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtctl < scripts/imtreport
```
 - Windows の場合は、次のコマンドを実行するスケジュールされたタスクを作成します。

```
%ORACLE_HOME%\imeeting\bin\imtctl < scripts/imtreport.cmd
```
4. すべてのレポートの最上位に表示される企業名を定義する Web Conferencing プロパティを設定します。

```
$ORACLE_HOME/bin/imeeting/imtctl
imtctl> setProperty -system true -pname ReportEnvironmentName -pvalue "My
Company's Report Title"
imtctl> exit
```

手順 4 既存プロキシ・サーバーとの統合（システム・タスク）

Web Conferencing の共有ブラウズ・モードでは、HTTP または HTTPS プロトコルを使用して Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・インスタンスから Web サイトにアクセスします。プロキシ・サーバーを使用して Web サイトへのアクセスを制御する企業の場合、会議中の共有ブラウズ・モードをサポートする（ユーザーが会議で Web サイトをブラウズできるようにする）には、そのプロキシ・サーバーを通過して Real-Time Collaboration コア・コンポーネントから Web サイトにアクセスする必要がある場合があります。プロキシ・サーバーに関する情報を使用して Web Conferencing システムを構成する必要があります。この手順は、1 回実行します。

1. Real-Time Collaboration コア・コンポーネントのインスタンスが構成されているマシン上で、テキスト・エディタを使用して次のスクリプトを開きます。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/scripts/proxy.imt
```

2. スクリプトを編集して、次の Real-Time Collaboration プロパティのデフォルト値をシステムの実際の値と置き換えます。

- UserAgentProxyHost: HTTP プロキシのホスト名
- UserAgentProxySSLHost: HTTPS プロキシのホスト名
- UserAgentProxyPort: HTTP プロキシのポート（値が 80 でない場合）
- UserAgentProxySSLPort: HTTPS プロキシのポート（値が 443 でない場合）
- UserAgentProxyExclusions: プロキシしない URL のリスト（`"["domain1", "domain2"]"` という形式）
- UserAgentProxyEnabled: true に設定

これらのプロパティの詳細は、5-11 ページの「[プロキシ・サーバーのプロパティ](#)」を参照してください。

3. `imtctl` でスクリプトを実行します。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtctl < scripts/proxy.imt
```

インターネット・アクセスに対する Web Conferencing の設定

企業ファイアウォール外のユーザーと Web 会議を開催する場合は、この項の次の手順を実行します。これらの手順の多くは、各 Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・インスタンスに対して実行する必要があります。

注意： 手順 1 を選択するか、手順 2 ～ 4 を選択するかは、Oracle9iAS Web Cache を Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・インスタンスで使用するかどうかによって異なります。

手順 1 (Web Cache を使用しない場合) Oracle HTTP Server 上のポートの変更 (システム・タスク)

Web Cache を使用しない場合は、Oracle HTTP Server 上のポートを変更する必要があります。これらのポートは、次の標準値に設定する必要があります。

- 80 (HTTP ポートの場合)
- 443 (HTTPS ポートの場合)

このタスクを完了した後は、手順 2 ～ 4 をスキップして手順 5 に進むことができます。

手順 2 (Web Cache を使用する場合) セカンダリ IP アドレスを使用するように中間層を構成 (システム・タスク)

Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・インスタンスが構成されている中間層で Oracle9iAS Web Cache を使用する場合は、その中間層にセカンダリ IP アドレスを設定する必要があります。

1. Oracle HTTP Server で、Apache 構成ファイルを開きます。

```
$ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/httpd.conf
```

2. 次の行を追加して、新しい IP アドレスを設定し、ポート 443 をリスニングします。この仮想ホストの別名を作成している場合は、オプションで、*ServerName* を入力できます。次に示す *wallet-file-location* は、プライマリ IP アドレス上の SSL に使用される Wallet と同じ Wallet に設定する必要があります。

```
<VirtualHost second-IP-address:443>
    ServerName
    Port 443
    SSLEngine on
    SSLCipherSuite SSL_RSA_WITH_RC4_128_MD5:SSL_RSA_WITH_RC4_128_SHA:SSL_RSA_
WITH_3DES_EDE_CBC_SHA:SSL_RSA_WITH_DES_CBC_SHA:SSL_RSA_EXPORT_WITH_RC4_40_
MD5:SSL_RSA_EXPORT_WITH_DES40_CBC_SHA
    SSLWallet wallet-file-location
    Listen second-ip-address:443
</VirtualHost>
```

3. プライマリ VirtualHost エントリ (同じ構成ファイル内の他の <VirtualHost> エントリ) には、次の Listen エントリが含まれています。

```
<VirtualHost ....
...
    Listen primary-ip-address:443
</VirtualHost>
```

4. Oracle HTTP Server を更新後、再起動します。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl updateConfig -ct ohs -v
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl restart -ct ohs -v
```


手順 3 (Web Cache を使用する場合) プライマリ IP ポートをリスニングするように Web Cache を構成 (システム・タスク)

Oracle9iAS Web Cache がすべてのネットワーク・インタフェースにバインドされている場合は、ポート 443 のプライマリ IP アドレスのみにバインドされるように構成する必要があります。

手順 4 (Web Cache を使用する場合) セカンダリ IP アドレスの作成およびトンネル・プロパティの設定 (インスタンス・タスク)

Oracle9iAS Web Cache を使用する場合は、ApacheTunnel プロパティを Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・インスタンスに作成して、セカンダリ IP アドレスおよび前の手順で設定したポートを使用するように設定する必要があります。これらの手順を、Web Cache を使用する各 Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・インスタンスに対して繰り返す必要があります。

1. Real-Time Collaboration コア・コンポーネントが含まれている各マシンで、`imtctl` を起動します。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtctl  
imtctl>
```

2. セカンダリ IP アドレスおよび前の手順で作成したポートを使用するように ApacheTunnel プロパティを設定します。

```
imtctl> setProperty -pname ApacheTunnelHost -pvalue second-IP-address  
imtctl> setProperty -pname ApacheTunnelPort -pvalue 443  
imtctl> exit
```

手順 5 Oracle HTTP Server 設定を使用するように Web Conferencing を設定 (インスタンス・タスク)

Real-Time Collaboration インストーラでは、Web Conferencing を実行しているクライアントが、Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・マシン用に構成された実際のホスト名を使用して Collaboration のリソースにアクセスすることが前提とされています。外部の場所からコア・コンポーネント・マシンへのアクセスに使用する名前を DNS エイリアシングおよびその他の高度なネットワーク配置例でカスタマイズする必要がある一部の配置では、この前提が適用されない場合があります。各 Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・マシンで次のスクリプトを使用し、ホスト名および関連プロパティを設定します。

1. Real-Time Collaboration コア・コンポーネントのインスタンスが構成されている各マシン上で、テキスト・エディタを使用して次のスクリプトを開きます。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/scripts/hostname.imt
```

2. スクリプトを編集して、次の Real-Time Collaboration プロパティのデフォルト値をシステムの実際の値と置き換えます。

- ApacheWebHost: Oracle HTTP Server のホスト名
- ApacheWebPort: Oracle HTTP Server で HTTP リクエストがリスニングされるポート (通常、80)
- ApacheWebSecurePort: Oracle HTTP Server によって HTTPS リクエストがリスニングされるポート (通常、443)
- ApacheProtocolSecure: true (Oracle HTTP Server でセキュアな SSL 接続が使用されている場合) または false (SSL が使用されていない場合) に設定

これらのプロパティの詳細は、5-15 ページの「[MxRedirectEnabled](#)」を参照してください。

3. imtctl でスクリプトを実行します。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtctl < scripts/hostname.imt
```

手順 6 mod_imeeting の有効化 (サーバー・タスク)

mod_imeeting は、Oracle HTTP Server の Real-Time Collaboration プラグインです (第 2 章「[Web Conferencing の理解](#)」を参照)。このプラグインによって、Oracle Web Conferencing で Oracle HTTP Server を使用してエンド・ユーザーの接続リクエストをリスニングできます。mod_imeeting は、Oracle HTTP Server で起動する必要があります。

1. Oracle HTTP Server で、テキスト・エディタを使用して次のファイルを開きます。

```
$ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/oracle_apache.conf
```

2. mod_imeeting.conf に対する次の行を oracle_apache.conf に追加します。

```
include "$ORACLE_HOME/imeeting/conf/mod_imeeting.conf"
```

3. Oracle HTTP Server を更新後、再起動します。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl updateConfig -ct ohs -v  
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl restart -ct ohs -v
```

手順 7 mod_imeeting から mx へのリダイレクトの設定 (インスタンス・タスク)

Oracle HTTP Server は、mod_imeeting から Web Conferencing Multiplexer (mx) に接続を渡します (第 2 章「[Web Conferencing の理解](#)」を参照)。各 Real-Time Collaboration コア・コンポーネントに対して次の手順を実行する必要があります。

1. Real-Time Collaboration コア・コンポーネントのインスタンスが構成されている各マシン上で、テキスト・エディタを使用して次のスクリプトを開きます。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/scripts/redirect.imt
```

2. スクリプトを編集して、次のプロパティを設定します。

- **MxRedirectPort:** Oracle HTTP Server の `mod_imeeting` プロセスがこのマシンの `mx` プロセスと接続するポート (Windows または Windows NT の場合) またはドメイン名ソケット (UNIX または Linux の場合)。デフォルト値をシステムの実際の値に置き換えます。"`[%NNNN%]`" という形式で値を入力します。`NNNN` は、2400 ~ 49151 の範囲内の任意の整数です。すべての二重引用符、スラッシュおよび角カッコを入力します。例:

```
setProperty -ct mxcomm -pname MxRedirectPort -pvalue "[%2420%]"
```

- **MxRedirectEnabled:** `MxRedirectPort` が設定されていることを示します。このプロパティは、現行の `redirect.imt` スクリプトには含まれていないため、このスクリプトに追加し、`true` に設定する必要があります。たとえば、次のように設定します。

```
setProperty -ct mxcomm -pname MxRedirectEnabled -pvalue "true"
```

詳細は、5-14 ページの「[Oracle HTTP Server と統合するためのプロパティ](#)」を参照してください。

3. `imtctl` でスクリプトを実行します。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtctl < scripts/redirect.imt
```

手順 8 SSL セキュリティの設定 (オプションのシステムおよびインスタンス・タスク)

すべての会議でセキュアな HTTPS 接続を使用するように Web Conferencing を設定できます。この設定を行うには、この項の前述の手順を実行済である必要があります。その後、Oracle HTTP Server を更新し、Web Conferencing システムおよび各 Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・インスタンスのセキュリティ・プロパティを設定します。

1. Oracle HTTP Server で、テキスト・エディタを使用して次のファイルを開きます。

```
$ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/mod_osso.conf
```

2. `imt_mod_osso.conf` に対する次の行を `mod_osso.conf` に追加します。

```
include "$ORACLE_HOME/imeeting/conf/imt_mod_osso.conf"
```

3. Oracle HTTP Server を更新後、再起動します。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl updateConfig -ct ohs -v
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl restart -ct ohs -v
```

4. Oracle HTTP Server Wallet を、自動ログイン・モードに設定する必要があります。Wallet は、Oracle Wallet Manager を使用してこのモードに設定します。Oracle Wallet Manager の使用方法の詳細は、『Oracle9i Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle HTTP Server の設定を完了した後、いずれかの Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・インスタンスに対して次の手順を実行します。これらの手順は、1 回のみ実行する必要があります。

1. Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・インスタンスで、`imctl` を起動します。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imctl  
imctl>
```

2. 次のプロパティを、次に示すように設定した後、`imctl` を終了します。

```
imctl> setProperty -system true -pname GlobalMeetingSSLSupportEnabled -pvalue  
true  
imctl> setProperty -system true -pname SSLRequiredforMeetings -pvalue true  
-force true  
imctl> exit
```

-force true オプションを指定すると、すべての会議が強制的にセキュアになります。ユーザーがセキュアな会議と非セキュアな会議のいずれかを選択できるようにする場合は、-force true オプションを指定しません。

Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・マシン上の Multiplexer (mx) では、Oracle HTTP Server で使用される Wallet と同じ Wallet が使用されます。MxWalletLocation プロパティを設定して、Wallet ファイルが格納されている場所を指定する必要があります。各 Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・インスタンスに対して次の手順を実行します。

1. 各 Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・インスタンスで、`imctl` を起動します。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imctl  
imctl>
```

2. 次のプロパティを、次に示すように設定した後、`imctl` を終了します。

```
imctl> setProperty -pname MxWalletLocation -pvalue path/wallet-file  
imctl> exit
```

Web Conferencing に対する Document Conversion Server および Voice Conversion Server の設定

Real-Time Collaboration コア・コンポーネントに複数の InstanceLocation を設定して地域別クラスタを作成する場合（3-5 ページの「[分散配置の問題点](#)」を参照）は、Document Conversion Server および Voice Conversion Server に対して一致する場所を指定する必要があります。また、Voice Conversion Server を構成する場合は、追加の手順もあります。この項では、これらのすべての手順について説明します。

1. Real-Time Collaboration コア・コンポーネントに様々な InstanceLocations が含まれている場合は、一致する InstanceLocations が含まれるように Document Conversion Server および Voice Conversion Server を構成します。たとえば、Real-Time Collaboration コア・コンポーネントの場所がアメリカ合衆国（US）の場合は、Voice Conversion Server で次のように入力します。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtctl setProperty -pname InstanceLocation -pvalue  
"["US"]"
```

詳細は、5-27 ページの「[クラスタを設定するプロパティ](#)」を参照してください。

2. VoiceDialInPrefix プロパティを設定します。このプロパティは、実行された音声コールにダイヤルイン接頭辞を提供します。たとえば、多くの企業で、ユーザーは、番号呼出しの前に 9 と入力する必要があります。この値をダイヤルイン接頭辞プロパティに入力できます。Voice Conversion Server で、次のように入力します。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtctl setProperty -i instance-name -pname  
"VoiceDialInPrefix" -pvalue "9"
```

このプロパティの詳細は、5-43 ページの「[Voice Conversion Server を設定するプロパティ](#)」を参照してください。

3. システム・ダイヤルインを設定します。

システム・ダイヤルインは管理者が作成するシステム全体のダイヤルインです。すべての Oracle Web Conferencing ユーザーが使用できます。通常、システム管理者は、システムのユーザーに一般的に利用されている電話会議ベンダーのシステム・ダイヤルインを作成します。システム・ダイヤルインは、ユーザー独自のダイヤルインを作成する際のテンプレートとして機能しますが、ユーザーがこれらを編集することはできません。通常、システム・ダイヤルインは、すべてのユーザーの共通情報と、実用的なダイヤル・インにするためにユーザーが情報を追加する必要がある部分で構成されており、そのままでは不完全なダイヤル・シーケンスです。ユーザーは、指定された内容をシステム・ダイヤルインに追加し、会議で使用するユーザー定義のダイヤルインとして保存します。

たとえば、一般的に電話会議ベンダーは、PIN または会議 ID をユーザーに付与します。システム管理者は、特定の会議ベンダーの料金無料電話番号、PIN および会議 ID のプレースホルダ、「,」、「#」、「*」などの必要なセパレータを含むシステム全体のダイヤルインを作成します。ユーザーは、各自の PIN および会議 ID を追加してシステム・ダイヤルインを変更し、別の名前で保存します。

表 4-1 ダイアルイン

ダイヤルイン名	ダイヤルイン・シーケンス
音声会議ベンダー (US)	18005555555,<ADD CONF ID HERE>#,,,,,,##,,,,,##
音声会議ベンダーでの Joe のアカウント	18005555555,8282828#,,,,,,##,,,,,##

システム・ダイヤルインは、`imtctl` の `AddSysDialIn` コマンドを使用して管理できます。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtctl addSysDialin -name Name_for_Dial-in -sequence dial-in sequence
```

このコマンドの詳細は、10-17 ページの「[会議のダイヤルイン情報の設定](#)」を参照してください。

サービス可用性テストの設定

Real-Time Collaboration コア・コンポーネントを定期的に ping するように、監視インフラストラクチャを設定できます。たとえば、インスタンス (ApacheWebHost) の URL が `my.company.com` の場合は、次の URL を ping するように cron ジョブ (UNIX または Linux の場合) を設定できます。

- 会議サービスの可用性 : Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・マシンで、会議を開催できるかどうかをチェックします。
`http://my.company.com/imtapp/servlet/ImtTestServlet?mtgtest=true`
- Voice Conversion Server の可用性 : Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・マシンで、会議中の音声ライブ・ストリーミングが可能かどうかをチェックします。
`http://my.company.com/imtapp/servlet/ImtTestServlet?voiceconvtest=true`
- Document Conversion Server の可用性 : このコア・コンポーネント・マシンで、ドキュメント変換リクエストを正常に処理できるかどうかをチェックします。
`http://my.company.com/imtapp/servlet/ImtTestServlet?docconvtest=true`

詳細は、[第 7 章「監視」](#)を参照してください。

構成の検証

次のテストを起動して、Real-Time Collaboration コア・コンポーネントが正しく構成されているかどうかを検証します。

```
imtctl> runtests -system true
```

Voice Conversion Server が正常に設定されているかどうかを検証するには、そのサーバーと同じ Real-Time Collaboration コア・コンポーネントにサービスを提供するように割り当てられている Voice Conversion Server（存在する場合）を停止します。次に、Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・インスタンス・マシン上で次のように入力します。

```
imtctl> runtests -testlist voiceconvtest
```

Document Conversion Server の場合も同様に実行します。

```
imtctl> runtests -testlist docconvtest
```

runtests コマンドおよびこのコマンドで実行されるテストの詳細は、[第 10 章「imtctl コマンドライン・ユーティリティ」](#)を参照してください。テストが失敗した場合は、前述のインストール後の手順が正しく実行されているかどうかを検証します。

注意： Document Conversion Server および Voice Conversion Server に Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・インスタンスの InstanceLocation と一致する InstanceLocation プロパティが含まれていない場合に、3-6 ページの「[Real-Time Collaboration クラスタ](#)」で説明したとおりにクラスタを使用すると、コア・コンポーネントに対する Voice Conversion Server 可用性テストおよび Document Conversion Server 可用性テストは失敗します。詳細は、5-27 ページの「[クラスタを設定するプロパティ](#)」を参照してください。

手動による Web Conferencing プロセスの起動および停止

Real-Time Collaboration コンポーネント、および Oracle Web Conferencing で使用されるその他の Oracle コンポーネントは、インストール時に起動されます。なんらかの理由でこれらのプロセスを起動または停止する必要がある場合は、この項を参照してください。次の項目について説明します。

- [Web Conferencing 用の Oracle9iAS コンポーネントの起動および停止](#)
- [Oracle Real-Time Collaboration インスタンスの起動または停止](#)

この項では、`dcmctl` および `imctl` ユーティリティの使用方法について説明します。これらのコマンドの詳細は、次のマニュアルを参照してください。

関連資料： `dcmctl` の詳細は、『Oracle9i Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

関連資料： `imctl` の詳細は、[第 10 章「imctl コマンドライン・ユーティリティ」](#)を参照してください。

Web Conferencing 用の Oracle9i/AS コンポーネントの起動および停止

Oracle Web Conferencing システムでは、Oracle Web Conferencing の J2EE アプリケーション (OC4J_imeeting)、Oracle HTTP Server、Oracle Process Management and Notification などのいくつかの Oracle9i/AS コンポーネントが使用されます。この項では、必要に応じて、これらのプロセスを起動または停止する方法について説明します。

1. プロセスの状態を判断するには、Real-Time Collaboration コア・コンポーネントがインストールされているすべてのサーバーに対して `dcmctl getState` コマンドを使用します。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl getState -v
```

2. OC4J_imeeting を起動するには、次のコマンドを入力します。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl start -co OC4J_imeeting -t 120 -v
```

3. Oracle HTTP Server を起動するには、次のように入力します。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl start -ct ohs -t 120 -v
```

4. Oracle Process Monitor and Notification システムを起動するには、次のように入力します。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl start -ct opmn
```

5. いずれかのプロセスを停止するには、同じコマンド（ただし、`start` のかわりに `stop`）を入力します。

Oracle Real-Time Collaboration インスタンスの起動または停止

すべての Real-Time Collaboration プロセスは、インストール時にインストーラによって自動的に起動されます。インストール時以外の場合でも、Web Conferencing コンポーネントがインストールされている各インスタンスに対して `imtcctl` ユーティリティを使用して、すべての Web Conferencing コンポーネントを起動または停止できます。

1. Oracle Real-Time Collaboration コンポーネントの状態を確認するには、`imtcctl getState` コマンドを使用します。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtcctl getState
```

2. Real-Time Collaboration インスタンスを起動するには、インスタンスが構成されている各マシンで、次の `start` コマンドを入力します。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtcctl start
```

会議中にドキュメントの共有および音声の配信を行うためのドキュメント変換のサポートに使用する Document Conversion Server または Voice Conversion Server は、Windows マシンにインストールされます。これらのサーバーを起動するコマンドは、次のとおりです。

```
%ORACLE_HOME%\imeeting\bin\imtcctl start
```

3. `stop` コマンドを使用して、Web Conferencing コンポーネントを停止できます。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtcctl stop
```

`imtcctl` コマンドおよびその構文の詳細は、第 10 章「[imtcctl コマンドライン・ユーティリティ](#)」を参照してください。

5

構成

この章では、Web Conferencing システムの構成について詳細に説明します。必須およびオプションの構成タスクの両方を説明します。また、プロパティ管理システムおよび構成管理の基本についても説明し、使用できるプロパティを示します。

システムに新しいインスタンスを追加する場合は、[第4章「インストール後」](#)に記載されている手順に従ってください。構成についての詳細はすべて、この章の説明を参照してください。

Web Conferencing プロパティの使用

Web Conferencing システムを構成するには、プロパティを使用します。プロパティの設定には、`imtcctl` ユーティリティを使用します。この章では、様々なプロパティを `imtcctl` ユーティリティを使用して設定するための構文を示します。ユーティリティの使用方法については、[第 10 章「imtcctl コマンドライン・ユーティリティ」](#)を参照してください。ここでは、次の内容について説明します。

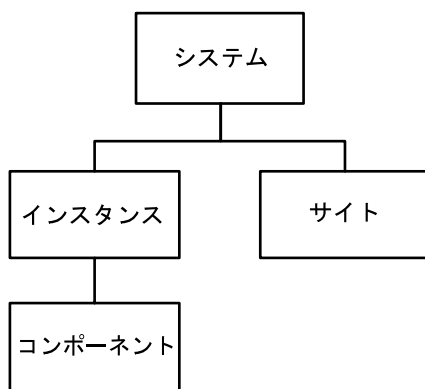
- 「Web Conferencing に対するプロパティの機能」
- 「多重スコープ・プロパティ」
- 「現在のプロパティ設定の表示」

Web Conferencing に対するプロパティの機能

個々のインスタンスおよびコンポーネントの設定や、システム全体の属性をカスタマイズするには、プロパティを設定します。また、作成している特定のサイト（サイトの作成については、[第 9 章「Web Conferencing のサイト」](#)を参照してください）に対してもプロパティを設定して、企業内での特定のライン・オブ・ビジネスや部門用に会議の属性を制御できます。

プロパティが作用する Web Conferencing システムの部分を、プロパティのスコープと呼びます。[図 5-1「プロパティ構成の階層」](#)に、プロパティのスコープおよびプロパティ相互の関係を示します。

図 5-1 プロパティ構成の階層



- **システム・プロパティ**: Web Conferencing システム全体に対する設定。これらは通常、1 度設定すると、その後で新しいインスタンスまたは Real-Time Collaboration のコア・コンポーネントの新規セットをシステムに追加した場合でも変更する必要はありません。

例: ロード・バランサ (LBR) ・プロパティ。企業で 1 つの LBR を使用する場合、通常、そのプロパティを設定する必要があるのは 1 度だけです。

- **インスタンス・プロパティ**: 単一のインスタンスに対する設定。これらのプロパティ値を変更すると、そのインスタンスのみに影響します。

例: 場所のプロパティ。システム内の各インスタンスには場所属性があり、それぞれ異なる値を設定できます。

- **コンポーネント・プロパティ**: 特定のインスタンスのコンポーネントに対する設定。これらのプロパティを変更すると、そのコンポーネントの構成のみが変更されます。

例: コンポーネントのプロセス数を制御するプロパティ。インスタンスの各コンポーネントには、それぞれ異なるプロセス数を設定できます。たとえば、Multiplexer (mx) コンポーネントには 2 つの mx プロセス、Web Conferencing Server コンポーネントには 4 つの Web Conferencing Server プロセスを設定することができます。

コンポーネント・プロパティを変更すると、そのインスタンスのコンポーネントのみが変更されることに注意してください。他のインスタンスにある同じコンポーネントは変更されません。このため、たとえばすべてのインスタンスの mx プロセス数を 5 に設定する場合は、このプロパティを各インスタンスに設定する必要があります。

- **サイト・プロパティ**: 特定のサイトに対して特定のライン・オブ・ビジネスや部門の Web Conferencing を構成するための設定。サイトの作成については、第 9 章「[Web Conferencing のサイト](#)」を参照してください。

例: PreLoginMessage プロパティ。このプロパティは、ログイン・ページでログイン・リンクの下に表示されるメッセージ・テキストを制御します。作成する各サイトごとに、異なるメッセージを指定できます。

多重スコープ・プロパティ

一部のプロパティは、複数のスコープに作用します。Oracle Real-Time Collaboration には、プロパティに対する次の機能があります。

- **継承**: 特定のスコープのプロパティ値を階層の上位レベルから継承できます。たとえば、システム・スコープでログ・レベルを設定すると、すべてのインスタンスとそのインスタンスのコンポーネントがそのログ・レベルを使用します。

継承の順序は、[図 5-1 「プロパティ構成の階層」](#) の上位から下位への順序に従います。

- **オーバーライド**: 特定のスコープでプロパティを設定し、その値を階層の下位レベルで異なる値にオーバーライドできます。たとえば、システム・スコープのログ・レベルを設定した場合でも、特定のインスタンスのログ・レベルを変更することができます。その他のインスタンスはすべて、システム・スコープで設定されたログ・レベルを維持します。

この方法により、管理者は最大限の柔軟性と機能性を利用してシステムを構成できます。プロパティのスコープを設定するには、`imctl` コマンドに、`-system` や `-i` などのスコープ・オプションを含めます。`imctl` の詳細は、[第 10 章「imctl コマンドライン・ユーティリティ」](#)を参照してください。

この章の残りの項では、個々のプロパティの使用方法について説明します。各プロパティに適用するスコープは、次の表の左側の列に記載されています。

表 5-1 プロパティに使用可能なスコープ

スコープ	プロパティの適用範囲
システム	システム全体に適用されます。
インスタンス	インスタンスに適用されます。
コンポーネント	コンポーネントに適用されます。
システムおよびインスタンス	システム全体に適用されますが、特定のインスタンスがオーバーライドされます。
インスタンスおよびコンポーネント	インスタンスに適用されますが、そのインスタンスの特定のコンポーネントがオーバーライドされます。
システム、インスタンス、コンポーネント	システム全体に適用されますが、特定のインスタンスがオーバーライドされ、次にそのインスタンスの特定のコンポーネントがオーバーライドされます。
サイト	サイト全体に適用されます。
システムおよびサイト	システム全体に適用されますが、特定のサイトがオーバーライドされます。

現在のプロパティ設定の表示

`imctl` コマンド `getProperties` を使用して、現在のプロパティ設定を一覧表示できます。既存のプロパティ設定の表示については、10-14 ページの [「getProperties」](#)を参照してください。

Web Conferencing プロパティの一覧

次の表に、Oracle Web Conferencing の構成に使用できるプロパティの一覧をアルファベット順に示します。次の項では、そのプロパティが Web Conferencing のどの部分を構成するかに基づき、グループ単位でプロパティを説明します。

表 5-2 Web Conferencing プロパティ

プロパティ	構成する部分	詳細	参照先
AdditionalLocationsServed	複数インスタンスのクラスタ	Document Conversion Server および Voice Conversion Server がサービスを提供する場所を設定します。	「クラスタを設定するプロパティ」
AllowPublicMeetings	会議のデフォルト	会議を公開または非公開に設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
ApacheProtocolSecure	HTTP サーバー	Apache HTTP サーバーが、SSL セキュリティを使用しているかどうかを設定します。	「MxRedirectEnabled」
ApacheTunnelHost	WebCache のセカンダリ IP アドレス	httpd.conf の仮想ホストのセカンダリ IP アドレスを設定します。	「Web Conferencing を Oracle9iAS Web Cache で構成するためのプロパティ」
ApacheTunnelPort	WebCache のセカンダリ IP アドレス	トンネル・ポートを設定します。	「Web Conferencing を Oracle9iAS Web Cache で構成するためのプロパティ」
ApacheWebHost	HTTP サーバー	Apache サーバーのホスト名を設定します。	「MxRedirectEnabled」
ApacheWebPort	HTTP サーバー	HTTP リクエストをリスニングしている HTTP (Apache) サーバーのポートを設定します。	「MxRedirectEnabled」
ApacheWebSecurePort	HTTP サーバー	HTTPS リクエストをリスニングしている HTTP サーバーのポートを設定します。	「MxRedirectEnabled」
DefaultTimeZoneName	タイムゾーン設定	この Web Conferencing システムのタイムゾーンを設定します。	「タイムゾーンを設定するプロパティ」
EarlyJoinMinutes	会議のデフォルト	会議の予定開始時刻の何分前から参加者が参加できるかを設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」

表 5-2 Web Conferencing プロパティ（続き）

プロパティ	構成する部分	詳細	参照先
EnableChat	会議のデフォルト	会議でチャットを使用できるかどうかを設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
EnableCobrowseMode	会議のデフォルト	会議で共有ブラウズを使用できるかどうかを設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
EnableDesktopSharingMode	会議のデフォルト	会議でデスクトップを共有できるかどうかを設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
EnableDocumentPresentationMode	会議のデフォルト	会議でドキュメント・プレゼンテーション・モードを使用できるかどうかを設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
EnableRecording	会議のデフォルト	会議を記録できるかどうかを設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
EnableSharedControl	会議のデフォルト	開催者と参加者間で共有操作できるかどうかを設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
EnableWhiteboardMode	会議のデフォルト	会議でホワイトボード・モードを使用できるかどうかを設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
FirstAttendeeBehavior	会議のデフォルト	会議への 1 人目の参加者が、共同プレゼンタとなるように設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
GlobalMeetingSSLSupportEnabled	SSL セキュリティ	Web Conferencing に SSL を使用可能にします。	「SSL セキュリティを設定するプロパティ」
GlobalProtocolSecure	ロード・バランサの統合	グローバル Web ホストに SSL セキュリティをオンまたはオフに設定します。	「ロード・バランサと統合するためのプロパティ」
GlobalWebHost	ロード・バランサの統合	この Web Conferencing システムのグローバル Web ホスト名を設定します。	「ロード・バランサと統合するためのプロパティ」

表 5-2 Web Conferencing プロパティ（続き）

プロパティ	構成する部分	詳細	参照先
GlobalWebPort	ロード・バランサの統合	グローバル Web ホストの HTTP ポートです。	「ロード・バランサと統合するためのプロパティ」
GlobalWebSecurePort	ロード・バランサの統合	グローバル Web ホストの HTTPS ポートです。	「ロード・バランサと統合するためのプロパティ」
InstanceLocation	複数インスタンスのクラスタ	インスタンスの場所を設定します。	「クラスタを設定するプロパティ」
IsCalendarOCSInstalled	予定の作成に Oracle Calendar を使用	ユーザーが、Oracle Calendar を使用して Web 会議を予定するように、「予定」タブを非表示にします。	「Web Calendar のユーザーの「予定」タブの非表示」
LogFlushInterval	ログ・レポート	ログがフラッシュされる時期を設定します。	「ロギングを設定するプロパティ」
LogLevel	ログ・レポート	ログ情報が記録されるレベルを設定します。	「ロギングを設定するプロパティ」
LogPath	ログ・レポート	ログが保存される場所を設定します。	「ロギングを設定するプロパティ」
MeetingAllControlLayout	会議のデフォルト	すべての参加者がコンソールのレイアウトを制御できるかどうかを設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
MeetingAllUseTools	会議のデフォルト	すべての参加者が注釈ツールを使用できるかどうかを設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
MeetingAllViewAttendeeList	会議のデフォルト	参加者が参加者リストを表示できるかどうかを設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
MeetingAllViewStatusMsg	会議のデフォルト	参加者が会議のステータス・メッセージを表示できるかどうかを設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
MeetingAutoHide	会議のデフォルト	会議の開始時に、Conference コンソールを非表示にするかどうかを設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
MeetingChatInterface	会議のデフォルト	チャット・インタフェースが、ドッキングかポップアップ・ウィンドウかを設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」

表 5-2 Web Conferencing プロパティ（続き）

プロパティ	構成する部分	詳細	参照先
MeetingChatType	Conference defaults	会議に使用できるチャットのタイプを設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
MeetingDialInAndConfId	会議のデフォルト	予定されているすべての会議のデフォルトのダイヤルイン情報を設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
MeetingDurationMinutes	会議のデフォルト	予定されているすべての会議のデフォルトの時間を設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
MeetingEmailJoin	会議のデフォルト	予定されている会議に、参加者が電子メールの招待状から直接参加することを許可します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
MeetingEndUrl	会議のデフォルト	予定されている会議の終了 URL を設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
MeetingExpandHelpText	会議のデフォルト	Help バナーをコンソールに表示するかどうかを設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
MeetingExpandSecondRow	会議のデフォルト	2 行目にコンソール・バナー（ネットワーク・ステータス、アンケート、作業環境、詳細なコマンド）を表示するかどうかを設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
MeetingInformation	会議のデフォルト	予定されているすべての会議のその他の情報を設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
MeetingIsInstant	会議のデフォルト	会議がインスタント会議かどうかを設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
MeetingPublishOption	会議のデフォルト	参加者リストがデフォルトで参加者に公開されるかどうかを設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
MeetingSharedControlSendPoll	会議のデフォルト	プレゼンタと操作権を共有している参加者がアンケートを送信できるかどうかを設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」

表 5-2 Web Conferencing プロパティ（続き）

プロパティ	構成する部分	詳細	参照先
MeetingSharedControlUseTools	会議のデフォルト	プレゼンタと操作権を共有している参加者が注釈ツールを使用できるかどうかを設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
MeetingShouldSendEmail	会議のデフォルト	予定された会議で、デフォルトで参加者に電子メールが送信されるかどうかを設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
MeetingStartUrl	会議のデフォルト	予定されている会議の開始 URL を設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
MeetingTypeOfMtg	会議のデフォルト	予定されているすべての会議のデフォルトの会議タイプ (REGULAR、PUBLIC、RESTRICTED) を設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
MxListenPort	Multiplexer (mx)	mxcomm プロセスがリスニングするポートを設定します。	「Multiplexer (Mx) を構成するためのプロパティ」
MxRedirectPort	Multiplexer (mx) リダイレクト	mod_immeeting から mx へ渡すために Multiplexer ポートまたはソケット名を設定します。	「Oracle HTTP Server と統合するためのプロパティ」
MxWalletLocation	SSL セキュリティ	Oracle HTTP Server で使用される Oracle Wallet	「SSL セキュリティを設定するプロパティ」
MxWalletPassword	SSL セキュリティ	Oracle Wallet のパスワードを設定します。	「SSL セキュリティを設定するプロパティ」
PreLoginMessage	Web Conferencing アプリケーション・ページ	ログイン・ページでログイン・リンクの下に表示されるメッセージ・テキストをカスタマイズします。	「アプリケーション・ページを設定するプロパティ」
PrivacyLink	プライバシー声明	プライバシー・リンクの URL を設定します。	「プライバシー声明のカスタマイズ」
PrivacyText	プライバシー声明	プライバシー・リンクのプライバシー声明のテキストを設定します。	「プライバシー声明のカスタマイズ」
PublicMeetingNumRows	Web Conferencing アプリケーション・ページ	公開会議表の行数を設定します。	「アプリケーション・ページを設定するプロパティ」

表 5-2 Web Conferencing プロパティ（続き）

プロパティ	構成する部分	詳細	参照先
PublicMeetingSortBy	Web Conferencing アプリケーション・ページ	公開会議表で会議がソートされる基準を設定します。	「アプリケーション・ページを設定するプロパティ」
PublicMeetingSortOrder	Web Conferencing アプリケーション・ページ	公開会議表で会議がソートされる順序を設定します。	「アプリケーション・ページを設定するプロパティ」
QuicklinkNName	Web Conferencing アプリケーション・ページ	クイックリンクの名前の 1 つを構成します。	「クイックリンク・ビンの構成」
QuicklinkNURL	Web Conferencing アプリケーション・ページ	クイックリンクの 1 つに対応付けられた URL を設定します。	「クイックリンク・ビンの構成」
ReportEnvironmentName	レポート	レポートの環境（サイト、システムなど）の名前を設定します。	「電子メールでの利用状況レポートを設定するプロパティ」
ShowPrivacyLink	プライバシー声明	プライバシー声明へのリンクの表示、または非表示を設定します。	「プライバシー声明のカスタマイズ」
Smtphost	電子メールの会議招待状	電子メールの SMTP サーバーのホスト名を指定します。	「電子メール招待状を設定するプロパティ」
Smtport	電子メールの会議招待状	電子メールの SMTP のポートをリスニングします。	「電子メール招待状を設定するプロパティ」
SrvNumProcs	Multiplexer (mx)	コンポーネントの mx プロセス数を設定します。	「Multiplexer (Mx) を構成するためのプロパティ」
SSLRequiredforMeetings	SSL セキュリティ / 会議のデフォルト	会議で SSL セキュリティを使用するかどうかを制御します。	「SSL セキュリティを設定するプロパティ」
StartupMeetingMode	会議のデフォルト	すべての会議のデフォルトの開始モードを設定します。	「Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ」
UserAgentProxyEnabled	プロキシ・サーバー情報	すべてのプロキシ設定を有効にします。	「プロキシ・サーバーのプロパティ」
UserAgentProxyExclusions	プロキシ・サーバー情報	プロキシしない URL リストを設定します。	「プロキシ・サーバーのプロパティ」
UserAgentProxyHost	プロキシ・サーバー情報	HTTP プロキシ・サーバーのホスト名を設定します。	「プロキシ・サーバーのプロパティ」
UserAgentProxyPort	プロキシ・サーバー情報	プロキシ・サーバーのポート番号を設定します。	「プロキシ・サーバーのプロパティ」

表 5-2 Web Conferencing プロパティ（続き）

プロパティ	構成する部分	詳細	参照先
UserAgentProxySSLHost	プロキシ・サーバー情報	HTTPS プロキシ・サーバーのホスト名を設定します。	「プロキシ・サーバーのプロパティ」
UserAgentProxySSLPort	プロキシ・サーバー情報	SSL プロキシ・サーバーのポート番号を設定します。	「プロキシ・サーバーのプロパティ」
VoiceDialInPrefix	音声会議のデフォルト	Voice Conversion Server のダイヤルイン接頭辞を設定します。	「Voice Conversion Server を設定するプロパティ」

ポートおよびネットワーク接続性を設定するプロパティ

ここでは、Real-Time Collaboration のネットワーク接続性の構成に関するすべてのプロパティについて説明します。imtctl スクリプトを使用してプロキシ・サーバーのプロパティを設定する手順については、4-4 ページの「[Web Conferencing の設定](#)」を参照してください。imtctl スクリプトを使用して Oracle HTTP Server と統合および同期化する手順については、4-7 ページの「[インターネット・アクセスに対する Web Conferencing の設定](#)」を参照してください。ここでは、次のプロパティについて説明します。

- [「プロキシ・サーバーのプロパティ」](#)
- [Oracle HTTP Server と統合するためのプロパティ](#)
- [「Web Conferencing を Oracle9iAS Web Cache で構成するためのプロパティ」](#)
- [「Multiplexer \(Mx\) を構成するためのプロパティ」](#)
- [「ロード・バランサと統合するためのプロパティ」](#)

プロキシ・サーバーのプロパティ

次のプロパティにより、共有ブラウザやクロスインスタンス HTTP ベース診断などの必要なタスクのためのすべての Oracle Web Conferencing HTTP クライアント・コードで使用するプロキシ設定を構成します。imtctl スクリプトを使用してプロキシ・サーバーのプロパティを設定する手順については、4-4 ページの「[Web Conferencing の設定](#)」を参照してください。

UserAgentProxyHost

説明: HTTP プロキシのホスト名を設定します。

デフォルト値: なし

有効な値: ホスト名

スコープ: コンポーネント

例：

- システム全体に対してプロキシを `www-proxy.company.com` に設定するには、次のようにコマンドを入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname UserAgentProxyHost -pvalue  
"www-proxy.company.com"
```

- 現在のインスタンスに対してプロキシを `www-proxy.company.com` に設定するには、次のようにコマンドを入力します。

```
imtctl> setProperty -pname UserAgentProxyHost -pvalue "www-proxy.company.com"
```

UserAgentProxySSLHost

説明：HTTPS プロキシのホスト名を設定します。

デフォルト値：なし

有効な値：有効なホスト名

スコープ：コンポーネント

例：

- システム全体に対してプロキシを `www-proxy.company.com` に設定するには、次のようにコマンドを入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname UserAgentProxySSLHost -pvalue  
"www-proxy.company.com"
```

- 現在のインスタンスに対してプロキシを `www-proxy.company.com` に設定するには、次のようにコマンドを入力します。

```
imtctl> setProperty -pname UserAgentProxySSLHost -pvalue "www-proxy.company.com"
```

UserAgentProxyPort

説明：プロキシ・ポートを設定します。

デフォルト値：80

有効な値：任意のポート

スコープ：コンポーネント

例：

- システム全体に対してプロキシ・ポートを 80 に設定するには、次のようにコマンドを入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname UserAgentProxyPort -pvalue 80
```

- 現在のインスタンスに対してプロキシ・ポートを設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -pname UserAgentProxyPort -pvalue 80
```

UserAgentProxySSLPort

説明：SSL プロキシ・ポートを設定します。

デフォルト値：443

有効な値：任意のポート

スコープ：コンポーネント

例：

- システム全体に対して SSL プロキシ・ポートを 443 に設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname UserAgentProxySSLPort -pvalue 443
```

- 現在のインスタンスに対して SSL プロキシ・ポートを設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -pname UserAgentProxySSLPort -pvalue 443
```

UserAgentProxyExclusions

説明：プロキシしないドメインまたはホストの URL リストを設定します。

デフォルト値：なし

有効な値：（単純な末尾照合アルゴリズム）。値の書式は、"`\"domain1\"、\"domain2\"`\" のようになります。

スコープ：システム、インスタンス。プロパティをシステム・スコープで設定し、その値を特定のコンポーネントでオーバーライドできます。

例：

- システム全体に対して `company.com` および `companycorp.com` ドメインのプロキシ排除を設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname UserAgentProxyExclusions -pvalue  
"[\".company.com\", \".companycorp.com\"]"
```

- 現在のインスタンスに対して `company.com` および `companycorp.com` ドメインのプロキシ排除を設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -pname UserAgentProxyExclusions -pvalue "[\".company.com\",  
\".companycorp.com\"]"
```

UserAgentProxyEnabled

説明：プロキシ設定を使用可能にします。このプロパティを `true` に設定しないかぎり、他のプロキシ設定は有効になりません。

デフォルト値：`true`

有効な値：`true/false`

スコープ：コンポーネント

例：プロキシ設定を有効にするには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname UserAgentProxyEnabled -pvalue true
```

Oracle HTTP Server と統合するためのプロパティ

Oracle HTTP Server との統合のために、まず、`mod_imeeting` プロセスを有効にする必要があります。この手順の詳細および `MxRedirectPort` プロパティの設定については、4-7 ページの「[インターネット・アクセスに対する Web Conferencing の設定](#)」を参照してください。

Multiplexer (MX) ポートをリダイレクトするためのプロパティ

次のプロパティは、`mod_imeeting` プロセスから Multiplexer へ、接続をリダイレクトするポートを設定します。このハンドオフの詳細は、2-10 ページの「[クライアント接続の詳細](#)」を参照してください。

注意： `mx` リダイレクト・プロパティを設定する前に、「[インターネット・アクセスに対する Web Conferencing の設定](#)」に示されたタスクを行う必要があります。

MxRedirectPort

説明: Web Conferencing コンソール経由で接続するインターネット・エンド・ユーザーは、通常、Oracle HTTP Server および `mod_imeeting` に接続します。最終的には、`mod_imeeting` から `Multiplexer` にソケットが渡されます。このプロパティによって、このインスタンスの `mod_imeeting` と `mx` プロセス間の通信を円滑にします。

デフォルト値: なし。値は、プラットフォームによって次のように異なります。

- UNIX: ポートではなく、名前。ソケットはドメイン名ソケットを使用して渡されます。
- NT: ポート。
- Linux: ポートではなく、名前。

有効な値: 2400 ~ 2700 までの整数。

スコープ: コンポーネント

例:

- 単一の `mx` プロセスの場合 (インストーラによるデフォルト設定)、次のように入力します。

```
imctl> setProperty -ct mxcomm -pname MxRedirectPort -pvalue "[\"2420\"]"
```

- 2 つの `mx` プロセスの場合、次のように入力します。

```
imctl> setProperty -ct mxcomm -pname MxRedirectPort -pvalue  
"[\"2420\", \"2421\"]"
```

Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・マシン上に Oracle9iAS Web Cache が常駐しておらず、Oracle HTTP Server がリスナーの場合は、通常はこれらの 2 つの例ですべての接続モードをサポートすることができます。

MxRedirectEnabled

説明: `MxRedirectPort` を設定済で、`Multiplexer` にソケットを渡す際に `mod_imeeting` で使用する必要があることを示します。`MxRedirectPort` を使用する場合は、このプロパティを `true` に設定する必要があります。

デフォルト値: `false`

有効な値: `true`、`false`

スコープ: コンポーネント

例:

```
imctl> setProperty -ct mxcomm -pname MxRedirectEnabled -pvalue "true"
```

Oracle HTTP Server の設定と同期化するためのプロパティ

次のプロパティを変更して、Oracle HTTP Server の設定と同期化させます。これらのプロパティの設定手順およびプロパティの設定に `imctl` スクリプトを使用する方法については、4-7 ページの「インターネット・アクセスに対する [Web Conferencing の設定](#)」を参照してください。

ApacheWebHost

説明 : Apache サーバーのホスト名を設定します。Real-Time Collaboration インストーラでは、Oracle Web Conferencing リソースにアクセスする際には、クライアントによって Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・マシン用に構成された実際のホスト名が使用されるものとして設定が行われます。これは、外部の場所から Web Conferencing リソースへのアクセスに使用する名前のカスタマイズが必要な可能性がある DNS エイリアシングおよびその他の高度なネットワーク配置例では、適切でないことがあります。

デフォルト値 : インストール時にインストーラによって導出される実際のホスト名。

有効な値 : 任意のホスト名

スコープ : インスタンス

例 : 実際のホスト名が `web10.us.oracle.com` で、使用される名前が `imeeting.company.com` の場合は、次のように入力します。

```
imctl> setProperty -pname ApacheWebHost -pvalue "imeeting.company.com"
```

ApacheWebPort

説明 : Oracle HTTP Server が HTTP リクエストをリスニングするポートです。

デフォルト値 : 7777

有効な値 : 任意の正規ポート値

スコープ : インスタンス

例 : インスタンス上の Oracle HTTP Server がポート 7777（通常設定）ではなく、ポート 80 で HTTP リクエストをリスニングしている場合は、次のように入力します。

```
imctl> setProperty -pname ApacheWebPort -pvalue 80
```

注意 : ポートに 80 以外の値を設定した場合、リモート・プロキシの背後のユーザーへのアクセスが妨げられる可能性があります。

ApacheWebSecurePort

説明 : Oracle HTTP Server が HTTPS リクエストをリスニングするポートです。

デフォルト値 : 4443

有効な値 : 任意の正規ポート値

スコープ : インスタンス

例 : インスタンス上の Oracle HTTP Server がポート 4443 ではなく、ポート 443 で HTTPS リクエストをリスニングしている場合は、次のように入力します。

```
imtcctl> setProperty -pname ApacheWebSecurePort -pvalue 443
```

注意： ポートに 443 以外の値を設定した場合、リモート・プロキシの背後のユーザーへのアクセスが妨げられる可能性があります。

ApacheProtocolSecure

説明 : ApacheWeb ホストが SSL を使用しているかどうかを設定します。

デフォルト値 : false

有効な値 : true/false

スコープ : システム

例 : Oracle HTTP Server Web ホストが SSL を使用している場合は、次のように入力してこのプロパティを true に設定する必要があります。

```
imtcctl> setProperty -pname ApacheProtocolSecure -pvalue true
```

Web Conferencing を Oracle9iAS Web Cache で構成するためのプロパティ

Oracle9iAS Web Cache が、Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・マシンにある場合、Oracle HTTP Server に、セカンダリ IP アドレスと仮想ホストを作成する必要があります。これらの作成方法については、4-7 ページの「[インターネット・アクセスに対する Web Conferencing の設定](#)」を参照してください。その後、示されているプロパティを持つトンネル・ホストを設定します。

注意： 示されているプロパティを設定する前に、「[インターネット・アクセスに対する Web Conferencing の設定](#)」に示されているタスクを行う必要があります。

ApacheTunnelHost

説明: httpd.conf に構成する仮想ホストのセカンダリ IP アドレスです。

デフォルト値: なし

有効な値: IP アドレス

スコープ: インスタンス

例: セカンダリ IP アドレスが 145.35.28.4 の場合は、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -pname ApacheTunnelHost -pvalue 145.35.28.4
```

ApacheTunnelPort

説明: トンネル・ポートを設定します。443 に設定する必要があります。443 以外の値を設定すると、インターネットからプロキシを通過して接続しようとする他のイントラネットのクライアント接続を妨げるなどの問題が発生します。

デフォルト値: 443

有効な値: ポート番号

スコープ: インスタンス

例: これは、トンネル・ポートを 443 にするデフォルト設定です。

```
imtctl> setProperty -pname ApacheTunnelPort -pvalue 443
```

Multiplexer (Mx) を構成するためのプロパティ

任意で、次のプロパティを使用し、Multiplexer (mx) で処理されるプロセス数を設定できます。mx は、Web Conferencing Server プロセスなど、インスタンスのすべてのコンポーネント・プロセスが接続する通信ハブです。ユーザーは Web Conferencing コンソールを介して、インスタンス上で Web Conferencing Server で開催される会議の mx プロセスに接続します。そのとき、このインスタンスにサービスを提供している Voice Conversion Server および Document Conversion Server プロセスは、mx に接続します。Multiplexer プロセスの概要および Multiplexer プロセスによる Web Conferencing 接続リクエストの処理方法については、[第 2 章「Web Conferencing の理解」](#)を参照してください。

ユーザーがインターネットを介して Web Conferencing にアクセスする場合は、mod_immeeting プロセスから Multiplexer へ接続をリダイレクトするポートを指定できます。

SrvNumProcs

説明:各コンポーネントのプロセスを設定します。コンポーネント・タイプ `clbsrvr` に対してこのパラメータを設定しても、その他のパラメータに影響を与えません。ただし、`mx` コンポーネントのこのプロパティを変更する場合は、対応する十分なポートがあることを確認してください。

デフォルト値:コンポーネント・タイプ `mxcomm` は1、`clbsrv` は4

有効な値:システムのメモリー容量に依存します。

スコープ:コンポーネント

例:

- 現在のインスタンスで `mx` プロセス数を2に設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -ct mxcomm -pname SrvNumProcs -pvalue 2
```
- 現在のインスタンスで Web Conferencing Server プロセス数を8に設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -ct clbsvr -pname SrvNumProcs -pvalue 8
```

MxListenPort

説明:`mxcomm` コンポーネントのプロセスがリスニングするポートのリストを指定します。

デフォルト値:なし (インストール時に設定)

有効な値:2400 ~ 2700

スコープ:コンポーネント

例:

- ダイレクト・ポート 2400 でリスニングする1つの `mx` 通信プロセスを設定するには、次のように入力します。
- 1つのインスタンスで、一方はダイレクト・ポート 2400、もう一方は 2401 でリスニングする2つの `mx` プロセスを設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -ct mxcomm -pname MxListenPort -pvalue ["2400"]
```

```
imtctl> setProperty -ct mxcomm -pname MxListenPort -pvalue ["2400","2401"]
```

ロード・バランサと統合するためのプロパティ

実際にリクエストを処理する複数の Real-Time Collaboration コア・コンポーネント中間層へリクエストを分散する場合、ロード・バランサ (LBR) は、単一の公開されたアドレスをクライアント・ブラウザに提供します。これは、すべてのリクエストに対してグローバル Web ホストとして機能します。ロード・バランサ自体は非常に高速なネットワーク・デバイスで、リクエストを多数の物理サーバーに分散させることができます。

通常、前述の Web Conferencing プロパティをシステム全体に対して 1 回設定します。ただし、地理的な問題を考慮して、公開されたアドレスに異なる設定をする場合は、これらの各アドレスに、リクエストを処理する複数の Real-Time Collaboration コア・コンポーネントがあります。この 2 つ目のシナリオでは、次のプロパティを各 Real-Time Collaboration インスタンスに設定する必要があります。

GlobalWebHost

説明: グローバル Web ホストの名前です。

たとえば、ロード・バランサの背後に複数のマシン (imeeting1.oracle.com、imeeting2.oracle.com) があり、会議に参加するために使用される URL には、Web ホスト名 imeeting.oracle.com を表示します。

この名前を独自に DNS 登録しても機能しません。

デフォルト値: なし

有効な値: ホスト名 (machine.company.com や machine.us.company.com など)

スコープ: システム、インスタンス

例: グローバル Web ホストに server1.oracle.com を設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname GlobalWebHost -pvalue "server1.oracle.com"
```

GlobalWebPort

説明: グローバル Web ホストの HTTP ポートです。

デフォルト値: 80

有効な値: 任意の正規ポート値

スコープ: システム、インスタンス

例: グローバル Web ホストがポート 80 で HTTP リクエストをリスニングするように再設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname GlobalWebPort -pvalue 80
```

注意: ポートに 80 以外の値を設定した場合、リモート・プロキシの背後のユーザーへのアクセスが妨げられる可能性があります。

GlobalWebSecurePort

説明: グローバル Web ホストの HTTPS ポートです。

デフォルト値: 443

有効な値: 任意の正規ポート値

スコープ: システム、インスタンス

例: グローバル Web ホストがポート 443 で HTTPS リクエストをリスニングするように再設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname GlobalWebSecurePort -pvalue 443
```

注意: ポートに 443 以外の値を設定した場合、リモート・プロキシの背後のユーザーへのアクセスが妨げられる可能性があります。

GlobalProtocolSecure

説明: グローバル Web ホストが SSL セキュリティを使用しているかどうかを設定します。

デフォルト値: false

有効な値: false、true

スコープ: システム、インスタンス

例: グローバル Web ホストが SSL を使用している場合は、このプロパティを true に設定します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname GlobalProtocolSecure -pvalue true
```

ユーザー権限を設定するプロパティ

imtctl コマンドライン・インタフェースを使用して、Web Conferencing ユーザーにロールを割り当てます。たとえば、次のようにします。

```
imtctl> modifyRole -username "anyusername" -rolename "businessadmin"
```

このコマンドの詳細は、10-16 ページの「[ユーザー・ロールの設定](#)」を参照してください。

SSL セキュリティを設定するプロパティ

Oracle Real-Time Collaboration では、HTTPS Secure Sockets Layer (SSL) に対する完全なサポートを提供することにより、アプリケーション・セキュリティとともに会議実行時の完全なセキュリティを確保しています。

SSL 設定を正しく構成してください。Web Conferencing プロパティ (Oracle HTTP Server 設定と同期している必要がある) および任意のロード・バランサ設定が設定されている必要があります。次のプロパティを設定する必要があります。

- ApacheWebSecurePort (5-17 ページを参照)
- ApacheProtocolSecure (5-17 ページを参照)
- GlobalWebSecurePort (5-21 ページを参照)
- GlobalProtocolSecure (5-21 ページを参照)

さらに、4-7 ページの「インターネット・アクセスに対する Web Conferencing の設定」に示す最終手順のとおり、Oracle HTTP Server 上の `imt_mod_osso.conf` ファイルを更新する必要があります。

注意： この項で説明したプロパティを設定する前に、「インターネット・アクセスに対する Web Conferencing の設定」の SSL の手順をお読みください。

次の項では、ユーザーが、セキュアな会議の設定とセキュア・サイトの共有ブラウズの追加構成を制御するプロパティと、管理者がセキュリティ・オプションの構成に使用できるプロパティの両方について説明します。

注意： 管理者は、Oracle9iAS の制御に基づき、一部またはすべてのページで HTTPS を使用するように指定できます。ユーザー・ログイン時の Oracle9iAS Single Sign-On アクセスには HTTPS を使用することを強くお勧めします。

デフォルトでは、システム全体で SSL は無効化されています。ただし、管理者はシステム全体に対して SSL を有効にできます。SSL の有効化は、必ずしも SSL の使用を強制するものではなく、会議の実行時に SSL が利用できることを意味します。その他のプロパティは、システムまたはサイトでのすべての会議に対して、SSL の使用を指定するために使用できます。

GlobalMeetingSSLSupportEnabled

説明: Real-Time Collaboration システム全体で会議の実行時の SSL を有効にします。これは、ユーザーが、会議をセキュアにするかその必要がないかを選択できる、という意味です。

デフォルト値: false

有効な値: false/true

スコープ: システム

例: Web Conferencing システム全体で SSL による会議を有効にするには、次のように入力します。

```
imctl> setProperty -system true -pname GlobalMeetingSSLSupportEnabled pvalue "true"
```

MxWalletLocation

説明: mx は、Oracle HTTP Server が Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・マシン上で使用するものと同じ Wallet を使用します。唯一の要件として、Wallet は自動ログイン・モードである必要があります。Wallet を自動ログイン・モードに変更するには、Oracle Wallet Manager を使用します。その後、MxWalletLocation プロパティを Wallet の位置に設定します。

関連資料: Oracle Wallet Manager の使用方法の詳細は、『Oracle9i Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

デフォルト値: 設定されていません。この場合、場所には
\$ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/ssl.wlt/default が使用されています。

有効な値: Wallet のフルパス

スコープ: インスタンス

たとえば、次のようにします。

```
imctl> setProperty -pname MxWalletLocation -pvalue  
"/902ias/Apache/Apache/conf/ssl.wlt/default"
```

MxWalletPassword

説明: Wallet のパスワードを設定します。このプロパティを設定するには、最初に Apache サーバーの `iasobf` コマンドを使用して、Wallet ユーザー・アカウントに `obfuscate` したパスワードを作成する必要があります。

有効な値: Wallet ユーザーの `obfuscate` したパスワード

スコープ: インスタンス

たとえば、次のようにします。

1. Apache サーバーで、次のように入力し、Wallet ユーザーのパスワードを `obfuscate` します。

```
$ORACLE_HOME/Apache/Apache/bin/iasobf -p oracle1 root base64 encoded string
```

Base64 形式でエンコードされた次のような文字列が返されます。

```
03421BAB7EC4DFBD304495A4D56D541030CE4F7BB1DCA48C5
```

2. `obfuscate` したパスワードの結果を取得し、`mxWalletPassword` プロパティを設定します。

```
imtctl> setProperty -pname MxWalletPassword -pvalue string
```

SSLRequiredForMeetings

説明: 管理者にすべての会議で HTTPS を要求させるか、または、すべての会議のデフォルト・オプションとして HTTPS を設定させるようにします。

デフォルト値: `false`

有効な値: `false/true`

スコープ: システム、サイト

例:

- すべての会議で HTTPS をデフォルトで使用するようにより要求し、サイトではこの設定をオーバーライドできるようにするには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname SSLRequiredForMeetings -pvalue true
```

- 特定の Oracle Web Conferencing サイトにおいて、すべての会議で HTTPS の使用を必須にするには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteId <site-id> -pname SSLRequiredForMeetings -pvalue true  
-force true
```

セキュアな会議を設定するためのユーザーの制御

Oracle Web Conferencing アプリケーションでは、「詳細」タブで「標準」または「制限付き」ラジオ・ボタンを選択することによって、ユーザーが、普通または SSL の会議を選択できます（両方のオプションが管理者によって許可されている場合）。ただし、Oracle9iAS で提供されるコントロールを使用すると、管理者は、アプリケーションの一部またはすべての URL に対して SSL の使用を指定することができます。このため、ユーザーがセキュリティ保護されていない URL に接続すると、セキュリティ保護された URL にリダイレクトされます。

Web Conferencing の作業環境を設定すると、ユーザーは、作成した会議の参加者すべてにセキュア・モードの使用を指定できます。この場合、参加者は開催者の設定に基づいて、セキュア・モードの使用を強制されます。

SSL Web サイトの共有ブラウズ

ユーザーは、Oracle Web Conferencing を使用して、SSL Web サイトを共有ブラウズできます。Web サイトに RSA、GTE、CyberTrust、Baltimore Technologies、および Entrust のいずれかの認証局から発行された Web サーバー証明書がある場合、Web Conferencing 構成を追加する必要はありません。

この設定はすべてには対応していません。デフォルト・セット以外の認証局から発行された証明書を使用する Web サイトを共有ブラウズする場合は、Web Conferencing コンソールに次のエラー・メッセージが表示されます。

```
IMT_SRV_CM_SSL_HANDSHAKE_FAILED.
```

```
The certificate submitted by the site has either expired or is not trusted by the  
iMeeting server. Please request your iMeeting server administrator to update the  
Trusted Signer Certificates Database with the certificate for the site you are  
visiting.
```

```
[https://www.secureWeb site.com/uri/]
```

```
...
```

このエラーが発生したら、次の項に記載されているように、信頼できるルート認証局の証明書を Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・マシンに追加してください。

信頼できるルート認証局の証明書の追加

SSL 通信の特徴は、デジタル証明書が使用されることです。証明書は、認証局（CA）と呼ばれる第三者機関によって発行されます。ブラウザを使用して SSL で保護された Web サイトを参照する場合、ブラウザは Web サイトの証明書を検証することでその Web サイトが保護されているかどうかを確認します。ブラウザには信頼できるルート認証局の証明書のセットが組み込まれており、これらは Web サイトから送信されるあらゆる証明書の検証に使用されます。ブラウザからは、そのままサイトに移動するかどうかを確認するメッセージが表示される場合があります。また、CA によって署名された新しい証明書が Web サイトから送信される場合、証明書のインストールを求められることもあります。

会議の参加者のために Web サイトを参照する Web Conferencing Server には、信頼できるルート認証局の証明書のデフォルト・セットが用意されています。デフォルト・セット以外の CA ベンダーから発行された証明書を配布する Web サイトを参加者が共有ブラウズする場合は、Real-Time Collaboration コア・コンポーネントの構成に信頼できるルート認証局の証明書を追加する必要があります。この場合、ここで説明する手順に従ってください。

CA ルート証明書をブラウザにインストールし、Base64 形式でエンコードされる X.509 (.CER) ファイルとしてエクスポートするには、Internet Explorer 5.5 以上を使用する必要があります。Netscape はルート証明書をファイルにエクスポートできないため、使用できません。

1. Oracle Web Conferencing を使用していない Internet Explorer ブラウザから、Web Conferencing でエラーが発生した SSL で保護された Web サイトへ移動します。
2. ブラウザを使用して、ブラウザの下部のステータス・バーに黄色の鍵が表示されるまでその Web サイト内のセキュリティ保護されたエリアにアクセスします。
3. 黄色の鍵をクリックし、ポップアップ・ウィンドウで「証明のパス」タブをクリックします。
4. すべての証明書を証明連鎖から 1 つずつ選択します。「全般」タブをクリックし、選択した証明書の記述を読みます。発行者名、有効期間などが記載されています。
5. 発行者 (CA) を信頼できる場合は、「詳細設定」タブをクリックします。
6. 「ファイルにコピー」をクリックし、次の画面で「次へ」をクリックします。
7. 次の画面で、Base64 形式でエンコードされる X.509 (.CER) にエクスポートする書式を選択し、「次へ」をクリックします。
8. 証明書を保存するファイル名を `cavendor.cer` などのように入力し、CA 証明書を保存します。4 ~ 8 の手順を連鎖のすべての証明書に対して繰り返します。

それぞれのファイルには、次のような書式で証明書が含まれます。

```
-----BEGIN CERTIFICATE-----
MIICYzCCAdACEAuZ4ibKgW0O66lustIp2TowDQYJKoZIhvcNAQEEBQAwXzELMAkG
A1UEBhMCVVMxIDAeBgNVBAoTF1JTSBEYXRhIFNlY3VyaXR5L0CBJmMuMS4wL0YD
VQQLEyVTZW51cmUgU2VydmlvYyIENlcnRpZmljYXRpb24gQXV0aG9yaXR5MB4XDTAw
...
-----END CERTIFICATE-----
```

9. 手順 8 で保存したファイルを Real-Time Collaboration コア・コンポーネントのデフォルトのプロパティ `TrustDBFile` (このプロパティの値を確認するには、`imtcctl` コマンドの `getProperty` を使用) で指定されている `certdb.txt` ファイルに追加します。このファイルは通常、`$ORACLE_HOME/imeeting/conf` にあります。

クラスタを設定するプロパティ

3-6 ページの「[Real-Time Collaboration クラスタ](#)」で説明するとおり、Real-Time Collaboration コア・コンポーネントのクラスタを作成できます。作成するには、別の InstanceLocation プロパティをコンポーネント・セットに割り当てます。たとえば、コンポーネント A および B の InstanceLocation が「US」で、コンポーネント C および D の InstanceLocation が「India」である場合、2 つのクラスタが作成され、1 つは US、もう 1 つは India とラベル付けされます。

また、Voice Conversion Server および Document Conversion Server が構成されているインスタンスは、それらのインスタンスに、使用する Real-Time Collaboration コア・コンポーネントの位置と一致する InstanceLocation を割り当てることでクラスタ化できます。

推奨している方法ではありませんが、なんらかの理由により、Voice Conversion Server または Document Conversion Server が構成されているインスタンスに複数の場所を指定する必要がある場合は、この章で説明する AdditionalLocationsServed プロパティを使用します。

InstanceLocation

説明: インスタンスの場所を設定します。デフォルトでは、すべてのインスタンスはデフォルトの場所にあります。特定の場所にあるすべてのコア・サービス (Web Conferencing Server) は、ロード・バランシングが考慮されます。

デフォルト値: デフォルト

有効な値: 任意の文字列

スコープ: インスタンス

例: インスタンスの場所を US に設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -pname InstanceLocation -pvalue "US"
```

AdditionalLocationsServed

説明: Voice Conversion Server および Document Conversion Server インスタンスがサービスを提供する場所のリストを設定します。

デフォルト値: デフォルト

有効な値: 値の書式は "[\"location1\", \"location2\"]" である必要があります。

スコープ: インスタンス

例: Document Conversion Server および Voice Conversion Server インスタンスが、場所が HQ および UK のインスタンスにサービスを提供するように設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -pname AdditionalLocationsServed -pvalue "[\"HQ\", \"UK\"]"
```

電子メール招待状を設定するプロパティ

Oracle Web Conferencing アプリケーションでは、ユーザーを会議に招待するなどの様々な目的で送信メールを生成できます。この機能を有効にするには、特定の電子メール関連のプロパティを使用して Real-Time Collaboration システムを構成する必要があります。電子メールを設定する手順 (imtcctl スクリプトを使用して次のプロパティを設定する手順を含む) については、4-4 ページの「[Web Conferencing の設定](#)」を参照してください。

Smtphost

説明 : Oracle Web Conferencing が電子メールを送信するために使用する SMTP サーバーのホスト名です。

デフォルト値 : なし

有効な値 : ホスト名

スコープ : システム、インスタンス

例 :

- システム全体に対して SMTP ホストを mail-net.company.com に設定するには、次のように入力します。

```
imtcctl> setProperty -system true -pname Smtphost -pvalue "mail-net.company.com"
```

- 現在のインスタンスに対して SMTP ホストを mail-net.company.com に設定するには、次のように入力します。

```
imtcctl> setProperty -pname Smtphost -pvalue "mail-net.company.com"
```

Smtport

説明 : SMTP サーバーのリスニング・ポートです。

デフォルト値 : 25

スコープ : システム、インスタンス

例 :

- システム全体に対して Smtport を 3000 に設定するには、次のように入力します。

```
imtcctl> setProperty -system true -pname Smtport -pvalue 3000
```

- 現在のインスタンスに対して Smtport を 3000 に設定するには、次のように入力します。

```
imtcctl> setProperty -pname Smtport -pvalue 3000
```

EmailEnabled

説明: 会議の招待状の電子メール送信を有効化します。

デフォルト値: false

有効な値: false、true

スコープ: システム、インスタンス

例: システム全体で電子メールの会議への招待状を有効にするには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname EmailEnabled -pvalue true
```

AdminEmail

説明: Web Conferencing システムから管理メールを受信する必要がある電子メールのアカウントを設定します。

デフォルト値: なし

有効な値: 任意のユーザーの電子メール・アドレス

スコープ: システム、インスタンス

例: Joe Smith が管理メールを受信するように設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname AdminEmail -pvalue joe.smith@oracle.com
```

アプリケーション・ページを設定するプロパティ

Oracle Web Conferencing アプリケーションの様々な要素をカスタマイズできます。これらのカスタマイズは、システム・スコープとサイト・スコープで可能です。サイトのカスタマイズはシステムのカスタマイズよりも優先されます。

ログイン・メッセージおよび公開会議表のカスタマイズ

PreLoginMessage

説明: ログイン・ページでログイン・リンクの下に表示されるメッセージ・テキストを設定します。

デフォルト値: "Login is based on Single Sign-On. To log in, enter your global e-mail ID (first.last@oracle.com) and your e-mail password."

有効な値: 任意のテキスト・メッセージ

スコープ: システム、サイト

例：ログイン・リンクのテキストを "Log in to OracleWeb Conferencing" に設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname PreLoginMessage -pvalue "Log in to Oracle  
Web Conferencing"
```

PublicMeetingNumRows

説明：公開会議表に表示される行数を設定します。

デフォルト値：10

有効な値：-1（すべての会議を表示）、またはすべての正の整数

スコープ：システム、サイト

例：特定サイト（siteID 123456）の公開会議表の会議をすべて表示するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteID 123456 -pname PublicMeetingNumRows -pvalue -1
```

PublicMeetingSortBy

説明：公開会議表のソート列を設定します。

デフォルト値：「ソート日付」列の番号

有効な値：列位置を示す 0 以上の整数

スコープ：システム、サイト

例：Web Conferencing システム全体の公開会議表を 2 番目の列でソートするには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname PublicMeetingSortBy -pvalue 1
```

PublicMeetingSortOrder

説明：PreLoginPublicMeetingSortBy プロパティで指定した列のソート方法を設定します。

デフォルト値：asc

有効な値：asc（昇順）、desc（降順）

スコープ：システム、サイト

例：PublicMeetingSortBy 列で行を降順でソートするには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname PublicSortOrder -pvalue desc
```


プライバシー声明のカスタマイズ

デフォルトのプライバシー声明が、Oracle Web Conferencing に付属しています。「プライバシー声明」というラベル付きの声明へのリンクは、Web Conferencing アプリケーション・ページの下部に表示されます。企業のニーズに合うように声明を変更する必要があるかどうかを評価する必要があります。変更する必要がある場合は、次のプロパティを使用して変更できます。

ShowPrivacyLink

説明: プライバシー・リンクを、Web Conferencing アプリケーション・ページの下部に表示するかどうかを設定します。

デフォルト値: true

有効な値: false、true

スコープ: システム、サイト

例: サイト ID 123456 のプライバシー声明を非表示にするには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteID 123456 -pname ShowPrivacyLink -pvalue false
```

PrivacyLink

説明: プライバシー・リンクのリンク先の URL を設定します。

デフォルト値: cmn_privacy.uix

有効な値: すべての有効な URL (Web Conferencing のホームからの関連リンク、または `http://www.site.com/filename.html` という形式の完全なリンク)

スコープ: システム、サイト

例: Web ページ `www.mycompany.com/legal/privacy.html` にリンクするようにプライバシー・リンクを設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname PrivacyLink -pvalue  
"www.mycompany.com/legal/privacy.html"
```

PrivacyText

説明: プライバシー声明に表示されるテキストを設定します。

デフォルト値: ORACLE RECOMMENDS EACH COMPANY DISCUSS THE LEGAL ISSUES OF USING ORACLE WEB CONFERENCING WITH ITS CUSTOMERS, PARTNERS, AND EMPLOYEES AND REPLACE THE TEXT ON THIS PAGE WITH THE APPROPRIATE DISCLAIMER. FOR INSTRUCTIONS ON HOW TO CHANGE THIS TEXT, PLEASE REFER TO THE ORACLE WEB CONFERENCING ADMINISTRATOR'S GUIDE.

有効な値: 任意の有効な文字列

スコープ: システム、サイト

例: プライバシ・テキストを「My Company Privacy text」に設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname PrivacyText -pvalue "My Company Privacy text"
```

Web Calendar のユーザーの「予定」タブの非表示

企業内で Oracle Collaboration Suite Calendar を Web Conferencing と組み合わせて使用している場合、ユーザーにカレンダーからのみ会議を予定させる必要があることがあります。このようにするには、「予定」タブが Web Conferencing アプリケーション・ページに表示されないように次のプロパティを設定します

IsCalendarOCSInstalled

説明: 「予定」タブを表示するかどうかを設定します。

デフォルト値: false

有効な値: false、true

スコープ: システム

例: 「予定」タブを非表示にし、ユーザーが Oracle Calendar を使用して Web 会議を予定するようにするには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname IsCalendarOCSInstalled -pvalue true
```

クイックリンク・ビンの構成

Web Conferencing のログイン前ページおよびホーム・ページのクイックリンク・ビンによく使用する URL を追加すると、その URL に簡単にアクセスできます。このビンに、次のプロパティを使用してリンク名および URL を設定すると、4 つのユーザー定義リンクを追加できます。

QuicklinkNName

説明: クイックリンクの名前を設定します (N は 1 ～ 4 の任意の数字)。

デフォルト値: Quicklink1、Quicklink2、Quicklink3、Quicklink4

有効な値: 任意の文字列

スコープ: システム、サイト

例: Real-Time Meetings という名前の、最初のユーザー定義リンクを設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname Quicklink1Name -pvalue "Real-Time Meetings"
```

QuicklinkNURL

説明: QuicklinkNName に関連付けられた URL を設定します (N は 1 ～ 4 の任意の数字)。

デフォルト値: なし

有効な値: 任意の有効な URL

スコープ: システム、サイト

例: `http://realtime meetings.company.com` にジャンプする最初のユーザー定義リンクを設定するには、次のように入力します。

```
imctl> setProperty -system true -pname Quicklink1URL -pvalue  
"http://realtime meetings.company.com"
```

注意: クイックリンクに関連付けられた値が無効な場合、そのリンクはクイックリンク・ビンに表示されません。

Web Conferencing 実行時の特性を設定するプロパティ

次のプロパティを使用して、会議セッションの特性を構成できます。これらのプロパティは、Oracle Web Conferencing Integration Service を使用して、統合サイトから会議が作成される場合に使用します。

各ユーザーも「設定」ページを使用して、自身の会議に対してこれらの項目の多くを設定できることに注意してください。

StartupMeetingMode

説明: Web Conferencing コンソールがロードされる際のデフォルトの開始モードを設定します。

デフォルト値: Cobrowse

有効な値: Cobrowse、DocumentPresentation、Whiteboard、DesktopSharing

スコープ: サイト

例: サイト 1010506 で開催される会議を常にデスクトップ共有モードで起動するには、次のように入力します。

```
imctl> setProperty -siteId 1010506 -pname StartupMeetingMode -pvalue DesktopSharing
```

EnableDesktopSharingMode

説明: 会議でデスクトップ共有を使用できるかどうかを設定します。

デフォルト値: true

有効な値: true、false

スコープ: システム、サイト

例: サイト 1010506 で開催される会議でデスクトップ共有モードを許可しないように設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteId 1010506 -pname EnableDesktopSharingMode -pvalue false
```

EnableWhiteboardMode

説明: 会議でホワイトボード・モードを使用できるかどうかを設定します。

デフォルト値: true

有効な値: true、false

スコープ: システム、サイト

例: サイト 1010506 で開催される会議でホワイトボード・モードを許可しないように設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteId 1010506 -pname EnableWhiteboardMode -pvalue true
```

EnableDocumentPresentationMode

説明: 会議でドキュメント・プレゼンテーションを使用できるかどうかを設定します。

デフォルト値: true

有効な値: true、false

スコープ: システム、サイト

例: サイト 1010506 で開催される会議でドキュメント・プレゼンテーションを許可しないように設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteId 1010506 -pname EnableDocumentPresentationMode -pvalue false
```

EnableCobrowseMode

説明: 会議でユーザーが Web サイトの共有ブラウズを使用できるかどうかを設定します。

デフォルト値: true

有効な値: true、false

スコープ: システム、サイト

例：サイト 1010506 で開催される会議で他の Web サイトの共有ブラウズを許可するように設定するには、次のように入力します。

```
imctl> setProperty -siteId 1010506 -pname EnableCobrowseMode -pvalue true
```

MeetingAutoHide

説明：起動時に、Conference コンソールを自動的に非表示にするかどうかを設定します。

デフォルト値：false

有効な値：true、false

スコープ：サイト

たとえば、次のように入力します。

```
imctl> setProperty -siteId 1010506 -pname MeetingAutoHide -pvalue true
```

注意： このプロパティを設定する際は注意してください。会議コンソールを非表示にすると、ユーザーは Web 会議への参加が正常に行われたことを確認できません。

MeetingExpandHelpText

説明：ユーザーが Conference コンソールでヘルプ・テキストを表示できるかどうかを設定します。

デフォルト値：false

有効な値：false、true

スコープ：サイト

例：サイト 1010506 で開催される会議の Conference コンソールでヘルプ・テキストを表示するように設定するには、次のように入力します。

```
imctl> setProperty -siteId 1010506 -pname MeetingExpandHelpText -pvalue true
```

MeetingExpandSecondRow

説明：ユーザーが Conference コンソールで、2 行目のアイコンおよびコントロールを表示できるかどうかを設定します。2 行目には、ネットワーク接続情報、セキュリティ・アイコン、「アンケート」、「設定」および「会議の詳細」ボタンが含まれます。

デフォルト値：false

有効な値：false、true

スコープ：サイト

例: サイト 1010506 で開催される会議の **Conference** コンソールで 2 行目のアイコンを表示するように設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteId 1010506 -pname MeetingExpandSecondRow -pvalue true
```

MeetingAllUseTools

説明: 会議のすべての参加者が注釈ツールを使用できるかどうかを設定します。

デフォルト値: **true**

有効な値: **false**、**true**

スコープ: サイト

例: サイト 1010506 で開催される会議に参加するユーザーによる注釈ツールの使用を許可しないようにするには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteId 1010506 -pname MeetingAllUseTools -pvalue false
```

MeetingAllControlLayout

説明: すべての参加者がコンソールのレイアウトを制御できるかどうかを設定します。

デフォルト値: **true**

有効な値: **false**、**true**

スコープ: サイト

例: サイト 1010506 で開催される会議ですべての参加者がコンソールのレイアウトを制御できるかどうかを設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteId 1010506 -pname MeetingAllControlLayout -pvalue true
```

MeetingAllViewAttendeeList

説明: 参加者が参加者リストを表示できるかどうかを設定します。

デフォルト値: **true**

有効な値: **false**、**true**

スコープ: サイト

例: サイト 1010506 のユーザーによる会議参加中の参加者リストの表示を許可しないようにするには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteId 1010506 -pname MeetingAllViewAttendeeList -pvalue false
```

MeetingAllViewStatusMsg

説明:参加者がステータス・メッセージを表示できるかどうかを設定します。

デフォルト値: true

有効な値: false、true

スコープ: サイト

例: サイト 1010506 のユーザーによる会議のステータス・メッセージの表示を許可しないようにするには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteId 1010506 -pname MeetingAllViewStatusMsg -pvalue false
```

MeetingChatType

説明:会議のデフォルトのチャット・タイプを設定します。

デフォルト値: PUBLIC_HOST (ホストとのパブリック・チャット)

有効な値: ALL (すべての参加者間のグループ・チャット)、NONE (使用可能なチャットなし)、HOST (ホストとのプライベート・チャット) PUBLIC_HOST (ホストとのパブリック・チャット)

スコープ: サイト

例: サイト 1010506 での会議のデフォルトのチャット・モードをすべての参加者がグループ・チャットに参加できるように設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteId 1010506 -pname MeetingChatType -pvalue ALL
```

MeetingChatInterface

説明:チャット・ウィンドウをコンソールにドッキングするか、またはポップアップ・ウィンドウにするかを設定します。

デフォルト値: P (ポップアップ)

有効な値: P、D (ドッキング)

スコープ: サイト

例: デフォルトで、チャット・ウィンドウがコンソールにドッキングされるように設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteId 1010506 -pname MeetingChatInterface -pvalue D
```

EnableChat

説明: 会議でチャット機能を使用できるかどうかを設定します。

デフォルト値: true

有効な値: true、false

スコープ: システム、サイト

例: サイト 1010506 のユーザーによる会議中のチャット機能の使用を許可しないようにするには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteId 1010506 -pname EnableChat -pvalue false
```

EnableRecording

説明: 会議を記録できるかどうかを設定します。

デフォルト値: true

有効な値: true、false

スコープ: システム、サイト

例: 参加者による会議の記録を許可しないようにするには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname EnableRecording -pvalue false
```

EnableSharedControl

説明: 開催者と選択された参加者間で共有操作できるかどうかを設定します。

デフォルト値: true

有効な値: true、false

スコープ: システム、サイト

例: サイト 1010506 で開催される会議で、開催者による参加者との操作権の共有を許可しないようにするには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteId 1010506 -pname EnableSharedControl -pvalue false
```

MeetingSharedControlUseTools

説明: 共有操作権を持つ参加者による注釈ツールの使用を許可します。

デフォルト値: true

有効な値: true、false

スコープ: サイト

例: サイト 1010506 での会議の参加者（会議の共有操作権を付与されている）による注釈ツールの使用を許可するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteId 1010506 -pname MeetingSharedControlUseTools -pvalue true
```

MeetingSharedControlSendPoll

説明: 共有操作権を持つ参加者によるアンケートの送信を許可します。

デフォルト値: false

有効な値: true、false

スコープ: サイト

例: サイト 1010506 での会議の参加者（会議の共有操作権を付与されている）によるアンケートの送信を許可するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteId 1010506 -pname MeetingSharedControlSendPoll -pvalue true
```

MeetingStartUrl

説明: 会議開始時に表示されるデフォルトの URL を設定します。

デフォルト値: なし

有効な値: 任意の有効な URL

スコープ: サイト

例: サイト 1010506 での会議の開始 URL を www.mycompany.com に設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteId 1010506 -pname MeetingStartUrl -pvalue  
http://www.mycompany.com
```

MeetingEndUrl

説明: 会議終了時に表示されるデフォルトの URL を設定します。

デフォルト値: なし

有効な値: 任意の有効な URL

スコープ: サイト

例: サイト 1010506 での会議の終了 URL を www.mycompany.com に設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteId 1010506 -pname MeetingEndUrl -pvalue  
http://www.mycompany.com
```

MeetingIsInstant

説明: サイトで開催される会議がインスタント会議かどうかを設定します。

デフォルト値: false

有効な値: true、false

スコープ: サイト

例: サイト 1010506 での会議をインスタント会議ではなく標準の会議にするには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteId 1010506 -pname MeetingIsInstant -pvalue false
```

MeetingDurationMinutes

説明: 推奨のデフォルトの会議時間 (分) を設定します。

デフォルト値: 60

有効な値: すべての有効な整数

スコープ: サイト

例: サイト 1010506 で予定されている会議をデフォルトで 30 分に設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteId 1010506 -pname MeetingDurationMinutes -pvalue 30
```

MeetingTypeOfMtg

説明: 「予定」タブのデフォルトの会議タイプのオプションを設定します。

デフォルト値: REGULAR

有効な値: REGULAR (会議の URL を通知されたすべてのユーザーが参加できる)、PUBLIC (すべてのユーザーが参加でき、会議は「Web Conferencing」ページで公開される) RESTRICTED (招待された登録済ユーザーのみが会議に参加でき、会議は「Web Conferencing」ページに表示されない)

スコープ: サイト

例: サイト 1010506 でのデフォルトの会議タイプを PUBLIC に設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteId 101 -pname MeetingTypeOfMtg -pvalue PUBLIC
```

MeetingDialInAndConfId

説明: デフォルトのダイヤルイン情報および会議 ID を設定します。これは、Web での会議中に使用する電話会議サービスがある場合に使用できます。

デフォルト値: なし

有効な値: 任意のテキスト

スコープ: サイト

例: サイト 1010506 用のデフォルトのダイヤルイン情報を、会議番号および特定の会議 ID を呼び出すように設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteId 1010506 -pname MeetingDialInAndConfId -pvalue  
"18001234567,,,ID555666#"
```

MeetingInformation

説明: すべての会議に関連するデフォルトの追加情報を設定します。

デフォルト値: なし

有効な値: 任意のテキスト

スコープ: サイト

例: SSL セキュリティがデフォルトでオンであることをサイト 1010506 のユーザーに通知するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteId 1010506 -pname MeetingInformation -pvalue "All  
conferences at ABC Corp. use SSL security."
```

MeetingPublishOption

説明: 開催者が参加者リストを公開するかどうかを設定します。

デフォルト値: true

有効な値: true、false

スコープ: サイト

例: サイト 1010506 での開催者による会議の参加者リストの公開を許可しないようにするには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteId 1010506 -pname MeetingPublishOption -pvalue false
```

MeetingEmailJoin

説明: 参加者による電子メールのリンクから会議への直接参加を許可します。

デフォルト値: true

有効な値: true、false

スコープ: サイト

例: サイト 1010506 での会議の参加者による、電子メールのお知らせに表示されたリンクからの会議への参加を許可するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteId 101 -pname MeetingEmailJoin -pvalue true
```

MeetingShouldSendEmail

説明: 開催者による電子メールでの参加者への通知を許可します。

デフォルト値: true

有効な値: true、false

スコープ: サイト

例: サイト 1010506 での会議の開催者による電子メールでの Web 会議への招待状の送信を許可するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -siteId 101 -pname MeetingShouldSendEmail -pvalue true
```

EarlyJoinMinutes

説明: 会議の予定開始時刻の何分前からユーザーが参加できるかを設定します。

デフォルト値: 30

有効な値: すべての正の整数

スコープ: システム

例: この値を 15 に設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname EarlyJoinMinutes -pvalue 15
```

AllowPublicMeetings

説明: ユーザーが「予定」タブで公開会議を選択できるかどうか、または公開 Web ページでアーカイブされた会議を表示できるかどうかを設定します。

デフォルト値: true

有効な値: false、true

スコープ: システム、サイト

例：サイト 1010506 のユーザーによる公開会議の開催または公開 Web ページにアーカイブされた会議の公開を許可しないようにするには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname AllowPublicMeetings -pvalue false
```

FirstAttendeeBehavior

説明：1 人目の参加者に対してプレゼンタになることを求めるプロンプトが表示されるように設定します。

デフォルト値：Attendee

有効な値：Attendee（プレゼンタではない参加者）、DesktopControl（プレゼンテーションできる参加者）

スコープ：システム、サイト

例：1 人目の参加者に対してプレゼンタ・モード用のプロンプトが表示されるように設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname FirstAttendeeBehavior -pvalue DesktopControl
```

Voice Conversion Server を設定するプロパティ

VoiceDialInPrefix プロパティでは、ダイヤルイン接頭辞を設定できます。すべての Voice Conversion Server 構成の詳細は、4-13 ページの「[Web Conferencing に対する Document Conversion Server および Voice Conversion Server の設定](#)」を参照してください。

VoiceDialInPrefix

説明：このプロパティは、Voice Conversion Server インスタンスのためのダイヤルイン接頭辞を設定します。この接頭辞は、番号呼出しの前に、Voice Conversion Server が受信するすべてのダイヤルイン番号に追加されます。通常、社内電話網の外部の番号を呼び出す際には、ダイヤルイン接頭辞（9 など）が使用されます。

デフォルト値：なし

有効な値：すべての有効なダイヤル・シーケンス。多くの場合、9 などの数字を使用します。有効なダイヤル・シーケンスには、0～9 の数字と、*、#、などの記号があります。

スコープ：インスタンス

例：Voice Conversion Server インスタンスのダイヤルイン接頭辞を 9 に設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -i <instance-name> -pname "VoiceDialinPrefix" -pvalue "9"
```

電子メールでの利用状況レポートを設定するプロパティ

imtreport スクリプトを使用して、Oracle Web Conferencing レポートを生成し、そのレポートを電子メールで送信できます。また、このスクリプトは、「**レポート**」タブに表示される利用状況レポートにデータが移入されるかどうかを制御します。このスクリプトを編集する方法、およびこのスクリプトを定期的に行うように cron ジョブまたはスケジュールされたタスクを設定する方法については、4-4 ページの「[Web Conferencing の設定](#)」を参照してください。

ReportEnvironmentName プロパティでは、電子メール・レポートの最上位に表示される名前を制御します。

ReportEnvironmentName

説明: このレポートの環境名を設定します。この名前はレポート・ヘッダーに表示されます。

デフォルト値: なし

有効な値: 任意のテキスト

スコープ: システム

例: レポート環境名を「My Company Web Conferencing System」に設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname ReportEnvironmentName -pvalue "My Company Web Conferencing System"
```

ロギングを設定するプロパティ

生成されるログの場所および会議ロギングのレベルを設定できます。

LogLevel

説明: ログ・レベル

デフォルト値: CONFIG

有効な値: NONE、SEVERE、WARNING、INFO、CONFIG、FINE、FINER、FINEST、ALL

スコープ: システム、インスタンスおよびコンポーネント。このプロパティをシステム・スコープで設定して、その値を特定のインスタンスでオーバーライドし、さらにその値をインスタンスの特定のコンポーネントでオーバーライドできます。

例：

管理者がシステム全体のログ・レベルを **SEVERE** に設定し、特定のインスタンスでその設定を **WARNING** に変更し、さらにそのインスタンスの **Web Conferencing Server** で **FINE** に変更するとします。

- システム全体のログ・レベルを **SEVERE** に設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname LogLevel -pvalue SEVERE
```

- 現在のインスタンス全体のログ・レベルを **WARNING** に設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -pname LogLevel -pvalue WARNING
```

- このインスタンスの **Web Conferencing Server** のログ・レベルを **FINE** に設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -ct clbsvr -pname LogLevel -pvalue FINE
```

LogPath

説明：IMT_HOME に対応するログ・パスです。プラットフォームが **Microsoft Windows** の場合でも、ファイル名はスラッシュ (/) を使用して指定する必要があります。

デフォルト値：ログ (IMT_HOME に対応しているため、IMT_HOME/logs になります)

有効な値：任意のディレクトリ。プラットフォームが **Microsoft Windows** の場合でも、ディレクトリ名はスラッシュ (/) を使用して指定する必要があります。

スコープ：コンポーネント (デフォルト)、システム、インスタンス

例：ログ・パスを IMT_HOME/imtlogfiles/ ディレクトリに設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname LogPath -pvalue "imtlogfiles"
```

LogFlushInterval

説明：システム全体のログをフラッシュする間隔です。日、時間、分、秒およびミリ秒の組合せを使用して指定します。有効な省略形は、**d**、**hr**、**min**、**sec**、**millis** です。空白のため、値は引用符を使用して指定する必要があります。

デフォルト値：10 秒

スコープ：コンポーネント (デフォルト)、システム、インスタンス

例：ログ・フラッシュ間隔を 1 秒に設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -pname LogFlushInterval -pvalue "1 sec"
```

タイムゾーンを設定するプロパティ

ユーザーは、Web Conferencing アプリケーションにログインして「設定」をクリックすることにより、タイムゾーンを設定できます。使用可能なタイムゾーンが表示されます。

ユーザーがタイムゾーンを設定した後は、Web Conferencing アプリケーションおよび Web Conferencing コンソールのすべての日付と時刻の表示が、設定したタイムゾーンの表示に自動的に変換されます。

例：ユーザー A は、タイムゾーンを「(-05:00) 米国東部標準時」に設定しました。その後、2004 年 3 月 30 日午後 5 時に開催予定の会議を計画しました。彼は、米国東部標準時の午後 5 時に会議を開催する予定です。この会議には、タイムゾーンを「(-08:00) 米国太平洋標準時」に設定したユーザー B が招待されています。ユーザー B が「今後の会議」タブでこの会議を参照すると、2004 年 3 月 30 日午後 2 時として表示されます。ユーザー B の設定に合うように、時刻が太平洋標準時に変換されます。

サポートされているタイムゾーンの全リストは、[付録 A「タイムゾーン」](#)を参照してください。

ユーザーが Oracle Web Conferencing に初めて登録する場合、システム・レベル・プロパティ DefaultTimeZoneName に基づいてユーザーのデフォルト・タイムゾーンが設定されます。

DefaultTimeZoneName

説明：この Web Conferencing システムのデフォルトのタイムゾーンを設定します。

デフォルト：UMT（Universal Mean Time）

有効な値：[付録 A「タイムゾーン」](#)に示すすべてのゾーン

スコープ：システム

例：システムのタイムゾーンをニューヨーク時間に設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname DefaultTimeZoneName -pvalue America/New_York
```

注意： この設定によって、まだタイムゾーンを設定していないユーザーのデフォルトのタイムゾーンのみが変更されます。ユーザーに各自のタイムゾーンを設定するように促す必要があります。

配置サンプル

この章では、基本配置から各地に分散する高度な配置までの、いくつかの配置サンプルについて説明します。また、それぞれの配置で管理者が設定する項目についても説明します。この章は、それぞれの例が前の説明に基づいて構成されているため、最初の例から順番に読み進むと理解しやすくなります。

注意： 第4章「インストール後」では、.imt ファイルを使用して Oracle Web Conferencing プロパティを設定しています。この章の一部の例で示すとおり、imtctl の setProperty コマンドを使用してもプロパティを設定できます。-system true オプションを使用すると、imtctl が起動されているインスタンスだけでなく、システム全体にそのプロパティの設定が適用されることに注意してください。ただし、-system true オプションを使用しない場合、コマンドはそのインスタンスに対してのみ実行されます。

Oracle Web Conferencing の構成に関する基本情報は、第4章「インストール後」を参照してください。

この章のすべての例では、次のことが前提とされています。

- Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・マシンには、1つの Oracle9iAS インスタンスおよび1つのみの Real-Time Collaboration インスタンスが存在します。
- Oracle9iAS Web Cache は、中間層では無効化されています。

基本配置

この例は、最も簡単な配置を示し、通常は試験運用のために使用されます。この配置例では、ユーザーはインターネットから、プロキシを介してインターネットから、またはイントラネットから Oracle Web Conferencing にアクセスできます。

図 6-1 Web Conferencing の基本配置

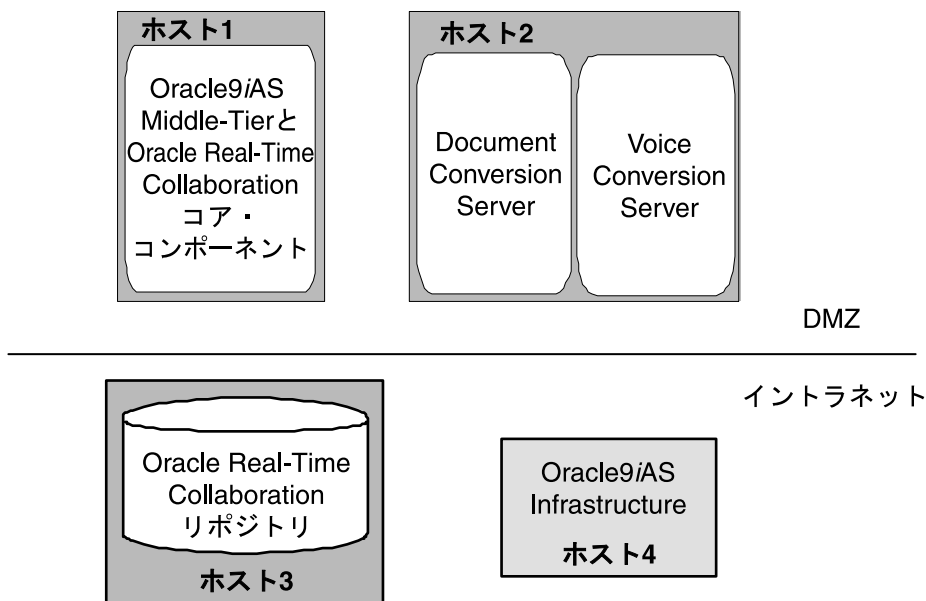


図 6-1「Web Conferencing の基本配置」では、ホスト 1 およびホスト 2 は同じ DMZ に配置され、ホスト 3 およびホスト 4 は企業のイントラネット内に配置されています。

Oracle Web Conferencing の様々な機能が相互に動作するには、次の対応付けが必須になります。

- Real-Time Collaboration コア・コンポーネントと Real-Time Collaboration リポジトリ。この対応付けはインストール中に設定されます。
- Real-Time Collaboration コア・コンポーネントと Oracle9iAS Infrastructure。この対応付けはインストール中に設定されます。
- Document Conversion Server および Voice Conversion Server と Real-Time Collaboration リポジトリ。この対応付けはインストール中に設定されます。

注意： これらの例の場合、Document Conversion Server と Voice Conversion Server が同じマシンにインストールされているとします。

- Document Conversion Server および Voice Conversion Server と Real-Time Collaboration コア・コンポーネント。これは、インストール後の必須手順です。

その他の構成上の問題は、この章で後述します。

作業手順

1. すべてのコンピュータに、基礎となるすべてのコンポーネントをインストールします。
2. ホスト 1 に Real-Time Collaboration コア・コンポーネントをインストールします。
3. ホスト 1 でインストール後の手順を実行します。
4. ホスト 1 で検証テストを行います。
5. ホスト 2 に Document Conversion Server および Voice Conversion Server をインストールします。
6. ホスト 2 でインストール後の手順を実行します。
7. ホスト 2 で検証テストを行います。
8. ホスト 1 で、ホスト 2 と正常に接続されたかを確認するための検証テストを行います。

前提条件

ホスト 1: Oracle9iAS および Real-Time Collaboration コア・コンポーネントが設定され、ホスト 4 にある Oracle9iAS Infrastructure を使用できるように構成されている必要があります。

ホスト 4: Oracle9iAS Infrastructure がこのマシン上に構成されている必要があります。

ホスト 2: テレフォニ製品専用のハードウェアおよびソフトウェアを搭載した Windows NT コンピュータです。

ホスト 3: Real-Time Collaboration リポジトリ用の Oracle9i データベース、リリース 2 (9.2.0.1) です。

関連資料： 前提条件の詳細は、『Oracle Collaboration Suite for HP-UX PA-RISC, Linux Intel, and Solaris Operating System (SPARC) インストールレーションおよび構成ガイド』を参照してください。

設定

社内の既存の電子メール・サーバーおよびプロキシ・サーバーを利用できるように Oracle Web Conferencing を構成します。設定内容は次のようになります。

表 6-1 システム設定

設定名	値	コメント	Web Conferencing プロパティ
既存の電子メール・サーバーの ホスト名（社内に1つ）	"mail-net.company.com"	インストール後の手順	Smtphost
電子メール・サーバーのリスニ ング・ポート	25	デフォルト	SmtphostPort
既存の HTTP 用プロキシ・サー バーのホスト名（社内に1つ）	"www-proxy.company.com"	インストール後の手順	UserAgentProxyHost
HTTPS 用プロキシ・サーバーの ホスト名（社内に1つ）	"www-proxy.company.com"	インストール後の手順	UserAgentProxySSLHost
HTTP 用のプロキシ・ポート	80	デフォルト	UserAgentProxyPort
HTTPS 用のプロキシ・ポート	443	デフォルト	UserAgentProxySSLPort
排除するプロキシ・ドメイン	".company.com"	インストール後の手順	UserAgentProxyExclusions

表 6-2 ホスト1のインスタンス

設定名	値	コメント	Web Conferencing プロパティ
mx の数	1	デフォルト	SrvNumProcs
単一の mx 用のリスニング・ポート	2400	インストール時に設定	MxListenPort
ホスト1の実際のホスト名	"host1.company.com"		なし
ホスト1の別名	"imeeting1.company.com"	インストール後の手順	ApacheWebHost
インスタンス名	"instance1.company.com"	インストール時に自動 設定	なし
ホスト1の Oracle HTTP Server の HTTP リスニング・ポート。	7777	デフォルト。インス トール時に設定。	ApacheWebPort
ホスト1の Oracle HTTP Server の HTTPS リスニング・ポート。	443	デフォルト	ApacheWebSecurePort

Web Conferencing をインストールする際は、必ず表 6-1 および表 6-2 の設定を行う必要があります。

さらに、次に示すようにホスト 2 を構成する必要があります。

表 6-3 ホスト 2 の設定

設定名	値	コメント	Web Conferencing プロパティ
Voice Conversion Server 用の HTTP リスニング・ポート	2460	インストール時に設定	
Voice Conversion Server インスタンス用のダイヤルイン接頭辞	9	インストール後の手順	VoiceDialinPrefix

インストール

ホスト 1 で、Real-Time Collaboration コア・コンポーネントをインストールして、必要なポート番号を指定します。ホスト 2 で、Document Conversion Server および Voice Conversion Server をインストールして、必要なポート番号を指定します。

関連資料： 詳細は、『Oracle Collaboration Suite for HP-UX PA-RISC, Linux Intel, and Solaris Operating System (SPARC) インストールガイド』および構成ガイド』を参照してください。

インストール後

この項のコマンドは、6-4 ページの「設定」に記載の設定リストの内容に基づいています。

手順 1 Web Conferencing を既存の電子メールと統合

```
imctl> setProperty -system true -pname Smtphost -pvalue "mail-net.company.com"
```

ポートは 25 (デフォルト) なので、設定する必要はありません。

手順 2 Web Conferencing を既存のプロキシ・サーバーと統合

```
imctl> setProperty -system true -pname UserAgentProxyHost -pvalue "www-proxy.company.com"
imctl> setProperty -system true -pname UserAgentProxySSLHost -pvalue "www-proxy.company.com"
imctl> setProperty -system true -pname UserAgentProxyExclusions -pvalue "[\".company.com\"] "
```

注意： HTTP 用のデフォルト・プロキシ・ポートは 80、HTTPS 用は 443 になっているため、設定する必要はありません。

手順 3 この Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・マシン上で Web Conferencing と Oracle HTTP Server を統合

mod_imeeting を有効化します。

mod_imeeting を設定する Oracle HTTP Server に対して必要な構成変更を行います。mod_imeeting は、\$ORACLE_HOME/imeeting/conf/mod_imeeting.conf ファイルにインクルードされ、次に Oracle HTTP Server の \$ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/oracle_apache.conf ファイルにインクルードされます。

次の mod_imeeting.conf のインクルード行を oracle_apache.conf に追加します。

```
Include "$ORACLE_HOME/imeeting/conf/mod_imeeting.conf"
```

ORACLE_HOME を実際の Oracle ホームに変更します。

1. DCM を使用して、Oracle HTTP Server の構成を更新します。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl updateConfig -ct ohs -v
```

2. DCM を介して Oracle HTTP Server を再起動します。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl restart -ct ohs -v
```

3. mod_imeeting と Mx 間のリダイレクトを設定します。

単一の mx プロセスの場合（インストーラによるデフォルト設定）、次のようにコマンドを起動します。

```
imtctl> setProperty -ct mxcomm -pname MxRedirectPort -pvalue "[\"2420\"]"
```

4. 次のようにコマンドを起動して、Oracle HTTP Server の基本設定を Web Conferencing に認識させます。

```
imtctl> setProperty -pname ApacheWebHost -pvalue "imeeting1.company.com"
```

80 と 443 がデフォルト値なので、さらに手順を実行してポートを設定する必要はありません。

注意： imeeting1.company.com は、ユーザーが Web 会議にアクセスする際に使用する URL です。

手順 4 レポートの設定

imtreport スクリプトを使用して、Web Conferencing レポートを生成し、そのレポートを電子メールで送信できます。スクリプトは \$ORACLE_HOME/imeeting/bin に格納されており、すべてのプラットフォームで imtreport として起動します。実際のスクリプト・ファイルは、UNIX および Linux の場合は imtreport、Microsoft Windows の場合は imtreport.cmd です。受信者リストなどの必須レポート・オプションは、レポート・スクリプトの最上部の変数を編集して設定します。スクリプトには、提供されているオプションについてのコメントが記述されています。使用プラットフォームに対する適切なスクリプトを編集するようにしてください。週ベースでスクリプトを起動するオペレーティング・システムに備えられた機能（たとえば、UNIX の cron ジョブや Windows のタスク・スケジューラなど）を使用すれば、自動週次レポートを送信することができます。

手順 5 定期監視のための設定

次の URL を定期的に ping するように監視インフラストラクチャを設定します。

- 会議サービスの可用性を監視する場合は、次のようにします。
`http://imeeting1.company.com/mtapp/servlet/ImtTestServlet?mtgtest=true`
- Voice Conversion Server の可用性を監視する場合は、次のようにします。
`http://imeeting1.company.com/mtapp/servlet/ImtTestServlet?voiceconvtest=true`
- Document Conversion Server の可用性を監視する場合は、次のようにします。
`http://imeeting1.company.com/mtapp/servlet/ImtTestServlet?docconvtest=true`

詳細は、7-7 ページの「[Real-Time Collaboration インタフェース](#)」を参照してください。

ホスト 2

インストール後の構成は必要ありません。

検証

ホスト 1

imtcctl> runTests を起動します。これにより、すべての検証テストが実行されます。

通常、すべてのテストは成功します。ただし、ホスト 2 を設定する前にこのコマンドを実行すると、Voice Conversion Server および Document Conversion Server のテストは失敗になります。

6-3 ページの「[作業手順](#)」に従ってテストを実行します。

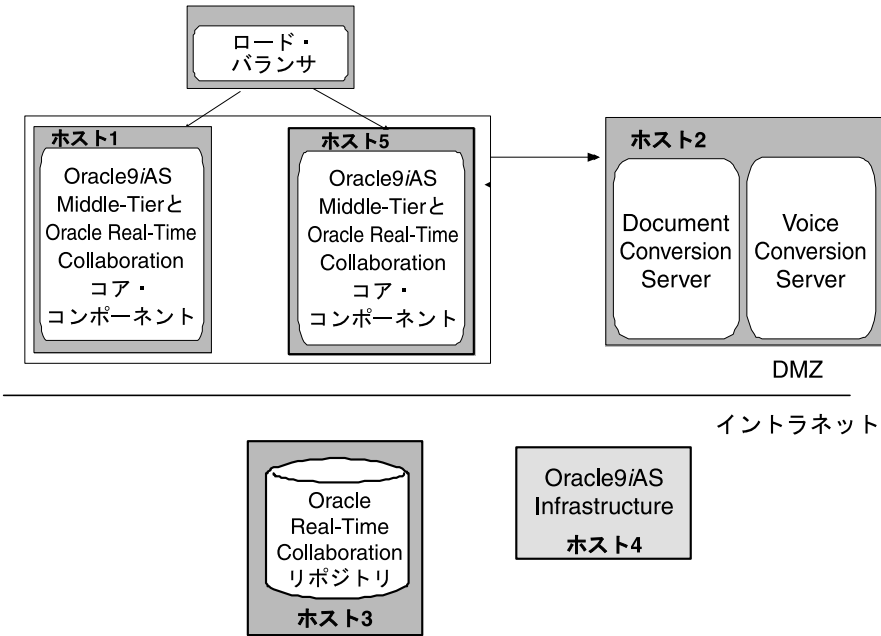
ホスト 2

imtctl> getState を起動してプロセスが起動されているかを検証します。ただし、実際のテストはホスト 1 (imtctl> runTests) で実行し、ホスト 2 によって提供されるドキュメントおよび音声変換サービスが利用できるかどうかを確認する必要があります。

複数の Real-Time Collaboration コア・コンポーネントとロード・バランサ

この配置例では、ホスト 1、ホスト 2 およびホスト 5 は DMZ に配置され、ホスト 3 およびホスト 4 は企業のイントラネット内に配置されています。

図 6-2 複数のコア・コンポーネントと 1 つの LBR での配置



作業手順

1. すべてのコンピュータに、ロード・バランサ（LBR）を含む基礎となるすべてのコンポーネントをインストールします。
2. ホスト 1 に Real-Time Collaboration コア・コンポーネントをインストールします。
3. ホスト 1 でインストール後の手順を実行します。
4. ホスト 1 で検証テストを行います。
5. ホスト 2 に Document Conversion Server および Voice Conversion Server をインストールします。
6. ホスト 2 でインストール後の手順を実行します。
7. ホスト 2 で検証テストを行います。
8. ホスト 1 で、ホスト 2 と正常に接続されたかを確認するための検証テストを行います。
9. ホスト 5 に Real-Time Collaboration コア・コンポーネントをインストールします。
10. ホスト 5 でインストール後の手順を実行します。
11. ホスト 5 で検証テストを行います。

前提条件

ホスト 1: Oracle9iAS Middle-Tier が設定され、ホスト 4 にある Oracle9iAS Infrastructure を使用できるように構成されている必要があります。

ホスト 5: Oracle9iAS Middle-Tier が設定され、ホスト 4 にある Oracle9iAS Infrastructure を使用できるように構成されている必要があります。

ホスト 4: Oracle9iAS Infrastructure がこのマシン上に構成されている必要があります。

ホスト 2: 専用ハードウェアおよびソフトウェアを搭載した Windows NT コンピュータです。

ホスト 3: Real-Time Collaboration リポジトリ用の Oracle9i データベースです。

LBR を使用する場合は、LBR と Oracle9iAS Single Sign-On を複数の Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・セットで使用できるように構成してください。Oracle Web Conferencing へのアクセスに使用される URL は imeeting.company.com で、imeeting1.company.com および imeeting2.company.com は LBR の背後に配置します。ユーザーが imeeting.company.com にアクセスすると、リクエストは自動的に imeeting1.company.com または imeeting2.company.com のいずれかにルーティングされます。

関連資料： 前提条件の詳細は、『Oracle Collaboration Suite for HP-UX PA-RISC, Linux Intel, and Solaris Operating System (SPARC) インストールレーションおよび構成ガイド』を参照してください。

設定

社内の既存の電子メール・サーバーおよびプロキシ・サーバーを利用できるように Web Conferencing を構成します。設定内容は次のようになります。

表 6-4 システム設定

設定名	値	コメント	Web Conferencing プロパティ
既存の電子メール・サーバーの ホスト名（社内に 1 つ）	"mail-net.company.com"	インストール後の手順	Smtphost
電子メール・サーバーのリスニ ング・ポート	25	デフォルト	Smtpport
既存の HTTP 用プロキシ・サー バーのホスト名（社内に 1 つ）	"www-proxy.company.co m"	インストール後の手順	UserAgentProxyHost
HTTPS 用プロキシ・サーバー のホスト名（社内に 1 つ）	"www-proxy.company.co m"	インストール後の手順	UserAgentProxySSLHost
HTTP 用のプロキシ・ポート	80	デフォルト	UserAgentProxyPort
HTTPS 用のプロキシ・ポート	443	デフォルト	UserAgentProxySSLPort
排除するプロキシ・ドメイン	".company.com"	インストール後の手順	UserAgentProxyExclusions
Web Conferencing への URL	"imeeting.company.com"	インストール後の手順。 imeeting.company.com へ のリクエストは、 imeeting1.company と imeeting2.company にリ ダイレクトされます。	GlobalWebHost

ホスト 1 の設定は、表 6-2「ホスト 1 のインスタンス」に記載のとおりです。
ホスト 5 の設定は次のようになります。

表 6-5 ホスト 5 の設定

設定名	値	コメント	Web Conferencing プロパティ
mx の数	1	デフォルト	SrvNumProcs
単一の mx 用のリスニング・ ポート	2400	インストール時に設定。ホ スト 1 と同じ設定にします。	MxListenPort
ホスト 5 の実際のホスト名	"host5.company.com"		なし

表 6-5 ホスト 5 の設定（続き）

設定名	値	コメント	Web Conferencing プロパティ
ホスト 5 の別名	"imeeting2.company.com"	インストール後の手順	ApacheWebHost
ホスト 5 の Apache の HTTP リ スニング・ポート	7777	デフォルト。インストール 時に設定。	ApacheWebPort
ホスト 5 の Apache の HTTPS リ スニング・ポート	443	デフォルト	ApacheWebSecurePort

インストール

ホスト 1 およびホスト 5 で、Real-Time Collaboration コア・コンポーネントをインストールして必要なポート番号を指定します。

インストール後

この項のコマンドは、6-10 ページの「[設定](#)」に記載の設定リストの内容に基づいています。

ホスト 1

手順 1 GlobalWebHost の設定

```
imctl> setProperty -system true -pname GlobalWebHost -pvalue "imeeting.company.com"
```

6-5 ページの「[インストール後](#)」に記載されている手順 2 ～手順 7 に従います。

手順 2 電子メールの設定

前述の手順に従って、Web Conferencing を電子メールと統合します。

手順 3 プロキシの設定

前述の手順に従って、既存のプロキシ・サーバー用に設定します。

手順 4 Web Conferencing と Oracle HTTP Server の統合

この Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・マシン上の HTTP サーバーと統合します。

手順 5 監視のための設定

前述の手順に従って、監視用に設定します。

手順 6 レポートの設定

前述の手順に従って、Web Conferencing レポートを設定します。

ホスト 5

電子メール、プロキシ、またはグローバル Web ホストの設定はグローバルに設定され、このインスタンスにも適用されるため、改めてこれらを設定する必要はありません。

手順 1 この Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・マシン上で Web Conferencing と Oracle HTTP Server を統合

6-5 ページの「[インストール後](#)」に記載されている手順に従います。

手順 2 監視のための設定

6-5 ページの「[インストール後](#)」に記載されている手順に従います。

ホスト 2

インストール後の手順を行う必要はありません。

検証

ホスト 1

`imctl> runTests` を起動します。これにより、すべての検証テストが実行されます。

通常、すべてのテストは成功します。ただし、ホスト 2 を設定する前にこのコマンドを実行すると、Voice Conversion Server および Document Conversion Server のテストは失敗します。

6-9 ページの「[作業手順](#)」に従って実行します。

ホスト 5

`imctl> runTests` を起動します。これにより、すべての検証テストが実行されます。

通常、すべてのテストは成功します。ただし、ホスト 2 を設定する前にこのコマンドを実行すると、Voice Conversion Server および Document Conversion Server のテストは失敗します。

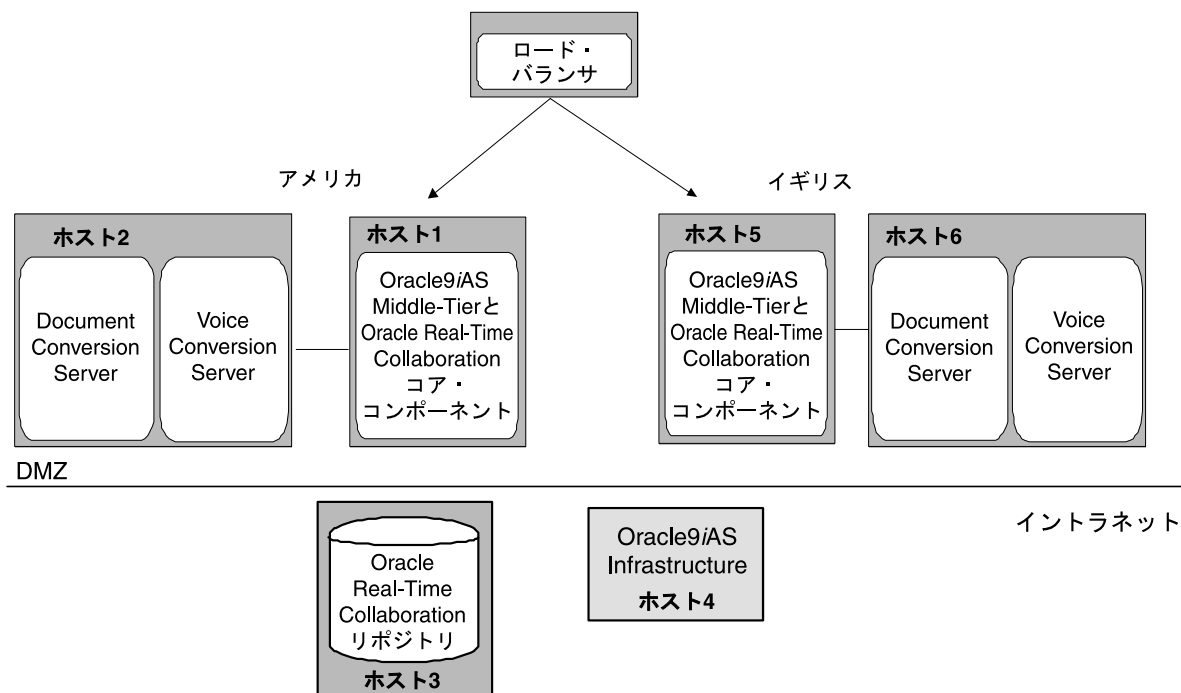
6-9 ページの「[作業手順](#)」に従って実行します。

ホスト 2

`imctl> getState` を起動してプロセスが起動されているか検証します。ただし、実際のテストはホスト 1 およびホスト 5 (`imctl> runTests`) で実行し、ホスト 2 によって提供されるサービスが利用できるかどうかを確認します。

複数の地域とロード・バランサ

図 6-3 複数の地域と 1 つの LBR での配置



この配置例では、ホスト 1、ホスト 2、ホスト 5 およびホスト 6 は DMZ に配置されています。ホスト 3 およびホスト 4 は企業イントラネット内に配置されています。

これは前述の例（6-8 ページの「複数の Real-Time Collaboration コア・コンポーネントとロード・バランサ」）と同じですが、次の点のみが異なります。

- LBR の構成: ホスト 1 およびホスト 5 は、それぞれアメリカ合衆国とイギリスにあります。さらに、イギリスのユーザーからの URL リクエストはイギリスの Real-Time Collaboration コア・コンポーネント（ホスト 5）へ、アメリカ合衆国のユーザーからの URL リクエストはアメリカの Real-Time Collaboration コア・コンポーネントへ送るように構成されています。イギリスのユーザーが `imeeting.company.com` にアクセスすると、そのリクエストはホスト 5 の `imeeting1.company.com` へリダイレクトされます。同様に、アメリカ合衆国のユーザーが `imeeting.company.com` にアクセスすると、リクエストは `imeeting2.company.com` へリダイレクトされます。

- Document Conversion Server と Voice Conversion Server の組合せの分離：ホスト 1 の Real-Time Collaboration コア・コンポーネントは、ホスト 2（アメリカ合衆国）の Document Conversion Server と Voice Conversion Server のみを使用でき、ホスト 5 の Real-Time Collaboration コア・コンポーネントは、ホスト 6 の Document Conversion Server と Voice Conversion Server のみを使用できます。

ホスト 1 からホスト 5 と、システム設定のすべての値については、前述の項の表 6-4 および [表 6-5](#) を参照してください。次の設定が異なります。

表 6-6 前述の項と異なるホスト 5 の設定

設定名	値	コメント	Web Conferencing プロパティ
ホスト 5 の場所	"UK"	インストール後の手順。	InstanceLocation

表 6-7 ホスト 6 の設定

設定名	値	コメント	Web Conferencing プロパティ
Voice Conversion Server 用の HTTP リスニング・ポート	2460	インストール時に設定。	
場所	"UK"	インストール後の手順。ホスト 5 と同じ 設定にします。	InstanceLocation

表 6-8 前述の項と異なるホスト 1 の設定

設定名	値	コメント	Web Conferencing プロパティ
場所	"US"	インストール後の手順。	InstanceLocation

表 6-9 ホスト 2 の設定

設定名	値	コメント	Web Conferencing プロパティ
Voice Conversion Server 用の HTTP リスニング・ポート	2460	インストール時に設定。	
場所	"US"	インストール後の手順。ホスト 1 と同じ 設定にします。	InstanceLocation

6-8 ページの「[複数の Real-Time Collaboration コア・コンポーネントとロード・バランサ](#)」に記載されているインストール、前提条件およびインストール後の手順に従い、次のようにします。

ホスト 1

手順 1 場所の設定

```
imtctl> setProperty -pname InstanceLocation -pvalue "US"
```

ホスト 2

ホスト 1 の Real-Time Collaboration コア・コンポーネントにサービスを提供するように設定します。

```
imtctl> setProperty -pname InstanceLocation -pvalue "[\"US\"]"
```

ホスト 5

手順 1 場所の設定

```
imtctl> setProperty -pname InstanceLocation -pvalue "UK"
```

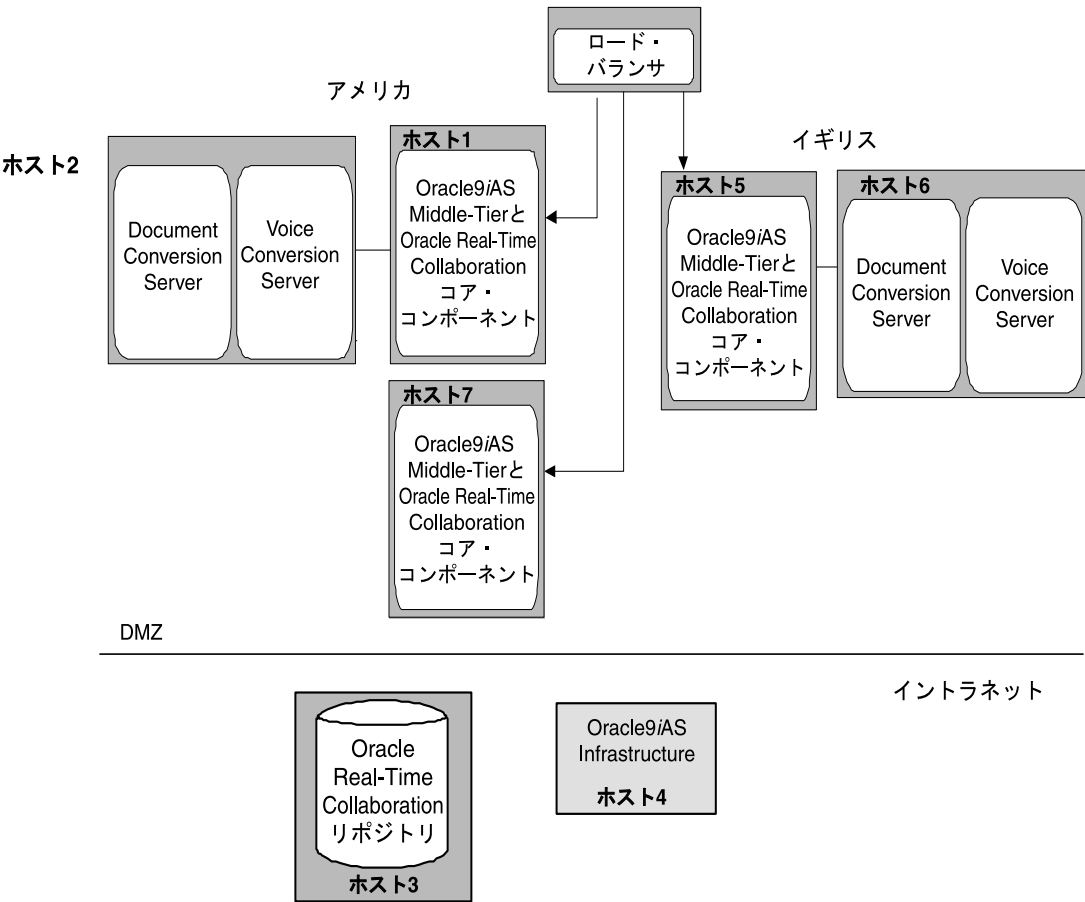
ホスト 6

ホスト 5 の Real-Time Collaboration コア・コンポーネントにサービスを提供するように設定します。

```
imtctl> setProperty -pname InstanceLocation -pvalue "[\"UK\"]"
```

既存システムへの新規コア・コンポーネントの追加

図 6-4 既存の Web Conferencing の配置にコア・コンポーネントを追加した例



- この例は、前述の配置例にホスト7のマシンを追加したものです。次の設定が異なります。
- ホスト7はアメリカ合衆国に追加します。
 - ホスト2は、ホスト7の Real-Time Collaboration コア・コンポーネントにドキュメントおよび音声変換サービスを提供します。
 - LBR は、アメリカ合衆国からのすべてのリクエストをホスト1かホスト7のいずれかに送り、さらにすべてのイギリスからのリクエストをホスト5に送るように構成する必要があります。

作業手順

1. ホスト7に基礎となるコンポーネントをインストールします。
2. ホスト7に Real-Time Collaboration コア・コンポーネントをインストールします。
3. ホスト7でインストール後の手順を実行します。
4. ホスト7で検証テストを行います。
5. ホスト2で Document Conversion Server および Voice Conversion Server を再起動します。
6. ホスト7で検証テストを行います。

前提条件

ホスト7: Oracle9iAS Middle-Tier が設定され、ホスト4にある Oracle9iAS Infrastructure を使用できるように構成されている必要があります。

関連資料： 詳細は、『Oracle Collaboration Suite for HP-UX PA-RISC, Linux Intel, and Solaris Operating System (SPARC) インストレーションおよび構成ガイド』を参照してください。

設定

ホスト7は次のように設定します。

表 6-10 ホスト7の設定

設定名	値	コメント	Web Conferencing プロパティ
mx の数	1	デフォルト	SrvNumProcs
単一の mx 用のリスニング・ ポート	2400	インストール時に設定。ホ スト1と同じ設定にします。	MxListenPort
ホスト7の実際のホスト名	"host7.company.com"		なし

表 6-10 ホスト 7 の設定（続き）

設定名	値	コメント	Web Conferencing プロパティ
ホスト 5 の別名	"imeeting3.company.com"	インストール後の手順	ApacheWebHost
ホスト 5 の Apache の HTTP リ スニング・ポート	7777	デフォルト。インストール 時に設定。	ApacheWebPort
ホスト 5 の Apache の HTTPS リ スニング・ポート	443	デフォルト	ApacheWebSecurePort
ホスト 5 の場所	"US"	インストール後の手順。ホ スト 1 と同じ設定にします。	InstanceLocation

インストール

ホスト 1 およびホスト 5 で、Real-Time Collaboration コア・コンポーネントをインストールして必要なポート番号を指定します。

インストール後

Web Conferencing プロパティを設定する際には、この項で説明する imctl コマンドを起動します。この項のコマンドは、6-17 ページの「設定」に記載の設定リストの内容に基づいています。

ホスト 7

電子メール、プロキシ、またはグローバル Web ホストの設定はグローバルに設定され、このインスタンスにも適用されるため、改めてこれらを設定する必要はありません。

手順 1 この Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・マシン上で Web Conferencing と Oracle HTTP Server を統合

6-5 ページの「インストール後」に記載されている手順に従います。

手順 2 場所の設定

```
imctl> setProperty -pname InstanceLocation -pvalue "US"
```

手順 3 監視のための設定

6-5 ページの「インストール後」に記載されている手順に従います。

手順 4 ホスト 2 の再起動

ホスト 7 の Real-Time Collaboration コア・コンポーネントを認識できるようにホスト 2 を再起動します。

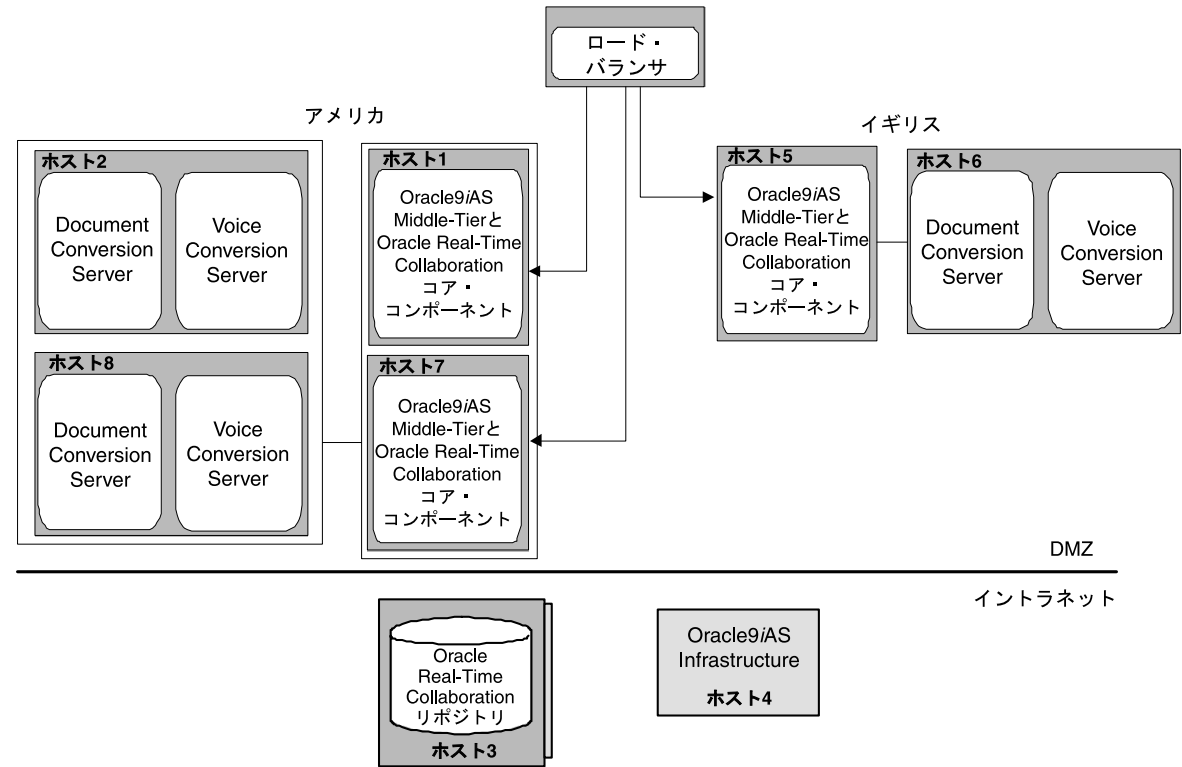
検証

ホスト 7

imtctl> runTests を起動します。これにより、すべての検証テストが実行されます。
すべてのテストは成功します。

既存システムへの Document Conversion Server および Voice Conversion Server の追加

図 6-5 既存の配置に Document Conversion Server および Voice Conversion Server を追加した例



Document Conversion Server および Voice Conversion Server が動作するマシン（ホスト 8）をさらに追加しました。

作業手順

- 1. ホスト 8 に基礎となるコンポーネントをインストールします。
- 2. ホスト 8 に Document Conversion Server および Voice Conversion Server をインストールします。
- 3. ホスト 8 でインストール後の手順を実行します。
- 4. ホスト 8 で検証テストを行います。
- 5. サービスを提供できるマシンがホスト 8 のみになるように、ホスト 2 の Document Conversion Server および Voice Conversion Server を停止します。
- 6. ホスト 7 またはホスト 1 で検証テストを行います。
- 7. ホスト 2 で Document Conversion Server および Voice Conversion Server を再起動します。

前提条件

前提条件の詳細は、『Oracle Collaboration Suite for HP-UX PA-RISC, Linux Intel, and Solaris Operating System (SPARC) インストレーションおよび構成ガイド』を参照してください。

設定

表 6-11 ホスト 8 の設定

設定名	値	コメント	Web Conferencing プロパティ
Voice Conversion Server 用の HTTP リスニング・ ポート	2460	インストール時に設定	
場所	"US"	インストール後の手順	InstanceLocation

インストール

ホスト 8 で、Document Conversion Server および Voice Conversion Server をインストールして必要なポート番号を指定します。

インストール後

ホスト 8

1. 場所が "US" の Real-Time Collaboration コア・コンポーネントにサービスを提供するように設定します。

```
imtctl> setProperty -pname InstanceLocation -pvalue "[\"US\"]"
```

2. `imtctl> stop` を起動し、次に `imtctl> start` を起動して、Document Conversion Server および Voice Conversion Server を再起動します。

検証

ホスト 8

`imtctl> getState` を起動してプロセスが起動されているかを検証します。ただし、実際のテストはホスト 1 (`imtctl> runTests`) で実行し、ホスト 8 によって提供されるサービスが利用できるかどうかを確認します。

ホスト 2

ホスト 2 を停止します。

ホスト 1

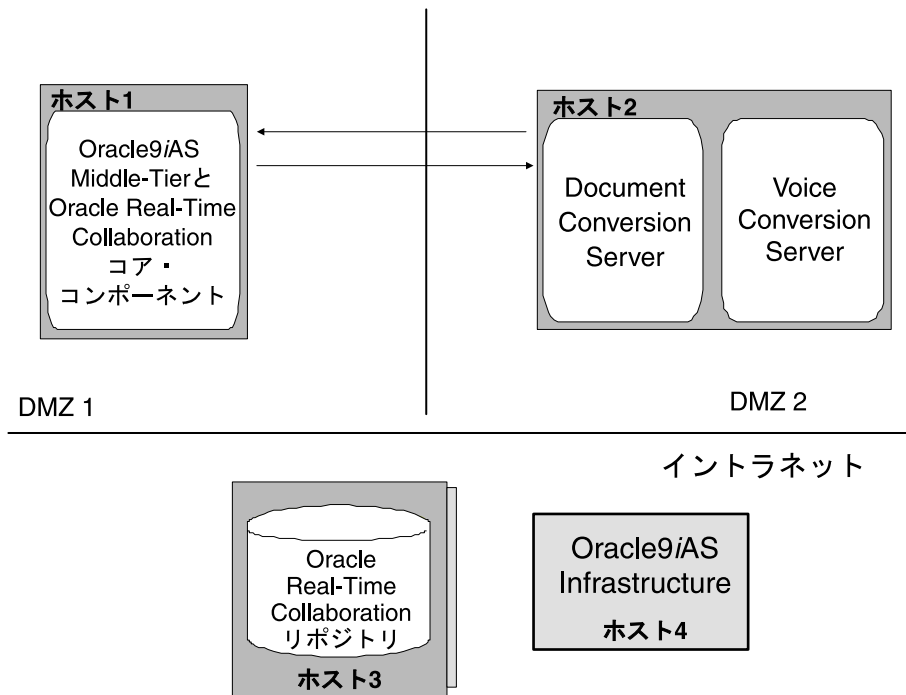
`imtctl> runTests` を起動します。これにより、すべての検証テストが実行されます。

すべてのテストは成功します。

その他の例

このトポロジは、Document Conversion Server および Voice Conversion Server が異なる DMZ に配置されている点以外は、基本配置と同じです。

図 6-6 異なる DMZ にコア・コンポーネントを配置した例



次の構成を追加する必要があります。

- DMZ1 から DMZ2 へ、HTTP リクエストをポート 2450 でリスニングできるようにします。
- DMZ2 から DMZ1 へ、TCP/IP リクエストをポート 2450 でリスニングできるようにします。

この章では、会議サービスの優れた品質と安定した可用性を提供するために、**Real-Time Collaboration** コンポーネントを監視する方法について説明します。この章は、次の内容について説明します。

- すべての **Real-Time Collaboration** プロセスを監視し、プロセスが停止した場合に再起動する方法
- システム内のインスタンスがダイレクト・サービスを提供できるかどうかを監視する方法
- **Real-Time Collaboration** システムをチューニングするため、パフォーマンスに関する統計データを監視する方法
- 各会議のイベントなど、現在の会議を監視する方法
- 主な構成の設定を検証する方法
- **Real-Time Collaboration** サービスを任意の監視システムで監視するためのインタフェース

プロセスの監視

Real-Time Collaboration Process Monitor (imt-pm) は Java ベースのプロセスでデーモンとして動作し、インスタンス内のすべての Real-Time Collaboration プロセスを管理します。Real-Time Collaboration Process Monitor は、HTTP リスニング・ポイントを開き、リクエストを受け入れてプロセスを起動および停止します。具体的には、次のように動作します。

- インスタンスのすべての Real-Time Collaboration プロセスを定期的に ping し、プロセスがアクティブかどうかを確認します。
- アクティブでないプロセス (ping に応答しないプロセス) を、手動操作をせずに自動的に再起動します。

Oracle Process Management and Notification システムは imt-pm を監視し、ウォッチドッグとして機能します。imt-pm がアクティブでないことを検出すると、Oracle Process Management and Notification システムは自動的に imt-pm を再起動します。imt-pm が停止した場合でも、imt-pm が監視するプロセスには影響しません。imt-pm は、停止する前に監視していたプロセスに影響を与えることなく、正常にリカバリできます。

imt-pm および start/stop コマンド

```
imtctl> start
```

引数を指定せずに start コマンドを imtctl から起動すると、Oracle Process Management and Notification および (必要に応じて) imt-pm は、管理する必要があるプロセスをすべて起動します。

その他の方法で start コマンドを起動する場合は、imt-pm がすでに稼働している必要があります。

```
imtctl >stop
```

引数を指定せずに stop コマンドを imtctl から起動すると (すべて停止動作)、imt-pm とその管理対象のすべてのプロセスが停止します。

imt-pm および Oracle Process Management and Notification

imt-pm は、Web Conferencing (Real-Time Collaboration) のインストール中に Oracle Process Management and Notification と統合されます。

サービス可用性の監視

Oracle Real-Time Collaboration では、インスタンスのサービス可用性をチェックできます。プロセスが動作するために必要な環境が提供されていない場合があります。また、そのインスタンスで会議サービスを提供できるかどうか重要です。

imctl で次のようにコマンドを起動して、サービス可用性を確認します。

```
imctl> runtests -testlist mtgtest,voiceconvtest,docconvtest
```

このコマンドでは、コマンドを実行する対象のインスタンスが次のサービスを提供しているかをチェックします。

会議サービス : エンド・ユーザーと同じ手順で Oracle Web Conferencing アプリケーションのフローを実行してインスタント会議を開始し、会議をテストします。インスタンス内の利用可能ないずれかの Web Conferencing Server で、会議が正常に開始されることを確認します。次に、他のクライアントを同じ会議に参加させ、会議の状態がそのクライアントと開催者の間で一致するかどうかを確認します。最後に、テスト会議を終了します。このテストによって、特定の Real-Time Collaboration インスタンスで会議サービスを利用できるかどうかを確認します。テストが失敗した場合は、1 つ以上の mx と Web Conferencing Server がこのインスタンスで動作しているかどうかを確認します (imctl> getState を使用)。

音声変換サービス : このテストは、音声ストリーミング・サービスが利用できるかどうかを検証します。テストでは、コラボレーション・サーバーの動作を模倣して利用可能な Voice Conversion Server に接続し、T1 ラインが機能しているかどうか、音声チャネルが利用できるかどうか、Voice Conversion Server が音声を配信できるかどうかを確認します。テストが失敗した場合は、Voice Conversion Server がこのインスタンスに対してサービスを提供するように構成されていないか、構成された Voice Conversion Server が利用できないかのどちらかです。

ドキュメント変換サービス : このテストは、ドキュメント変換フローを模倣してドキュメント変換サービスの可用性を検証します。テスト用ドキュメントをアップロードし、このインスタンスの Document Conversion Server を使用してそのドキュメントを変換します。テストが失敗した場合は、Document Conversion Server がこのインスタンスに対してサービスを提供するように構成されていないか、構成された Document Conversion Server が利用できないかのどちらかです。

Real-Time Collaboration では、任意の監視インフラストラクチャに組み込むことができる、サービス可用性監視のインタフェースを公開しています。詳細は、7-7 ページの「[Real-Time Collaboration インタフェース](#)」を参照してください。

サービス可用性テストを監視インフラストラクチャで定期的に起動して、テスト結果をアラート管理システムに組み込むことができます。

runtests の詳細は、10-18 ページの「[システムのテストおよび監視](#)」を参照してください。

コンポーネントの監視

Oracle Real-Time Collaboration では、システム内の主要コンポーネントの監視データを利用できます。監視データには次のものが含まれます。

インスタンスの各 `imt-collab` について、次のデータを取得できます。

- アクティブな会議の数
- アクティブなユーザーの数
- 総メモリー容量
- 使用メモリー容量
- プロセス開始時刻後の総会議数

これらのデータを取得するには、そのインスタンスに対して `getMonitorStats` を使用するか、`-i` オプションを使用して別のインスタンスに対してコマンドを実行します。

インスタンスの `Voice Conversion Server` について、次のデータを取得できます。

- 総チャンネル数
- 現在使用されているチャンネル
- 不良チャンネル
- T1 ライン・ステータス

これらのデータを取得するには、そのインスタンスに対して `getMonitorStats` を使用するか、`-i` オプションを使用して別のインスタンスに対してコマンドを実行します。

Oracle Real-Time Collaboration では、XML 形式でこのデータを取得するためのインタフェースを公開しています。これは、履歴分析のために監視インフラストラクチャで定期的に起動できます。`getMonitorStats` を `publish` オプションとともに使用します。

```
imtctl> getMonitorStats -publish true
```

`getMonitorStats` の詳細は、10-18 ページの「[システムのテストおよび監視](#)」を参照してください。

会議の監視

Oracle Web Conferencing アプリケーションでは、システムで現在開催されている会議を監視するために Web ページを利用できます。Oracle Web Conferencing アプリケーションの「モニター」タブを使用すると、この機能にアクセスできます。

注意：「モニター」タブは、**businessmonitor** または **businessadmin** ロールを所有するユーザーのみが使用できます。ユーザー・ロールの設定については、10-16 ページの「[ユーザー・ロールの設定](#)」を参照してください。

「モニター」タブの「現在の会議ステータス」ページには、システムで現在開催されているすべての会議のリストが表示されます。各会議の会議 ID、会議タイトル、開催者名、会議タイプ、サイト、開始時刻、参加者総数および会議の現在の状態が表示されます。現在開催中の各会議の詳細情報を確認できる「会議の詳細」リンクも表示されます。

「会議の詳細」ページには、各参加者の詳細情報などその会議の参加者についての情報が表示されます。現在のコラボレーション・モード、音声開始時刻などの会議レベルの詳細情報もこれらのページに表示されます。会議のログもこのページで表示できます。

インスタンスの状態ページ

インスタンスの状態ページは、Web Conferencing アプリケーションの Web ページの「システム」タブから使用できます。

注意：「モニター」タブは、**businessadmin** ロールを所有するユーザーのみが使用できます。ユーザー・ロールの設定については、10-16 ページの「[ユーザー・ロールの設定](#)」を参照してください。

「インスタンス」レポートを使用すると、Web Conferencing システム内で実行されているインスタンスおよびコンポーネントのアクティビティを監視できます。インスタンスおよびそのコンポーネントの階層リストをクリックすると、そのリストを開いたり閉じたりできます。レポートには、インスタンスのテスト結果、アクティブな会議の進捗、システムのプロパティ・セット、システム用に作成されたすべてのサイト、および現在実行されている Web アプリケーションのセッションの詳細も表示されます。

構成テスト

次のテストは、電子メールの構成などの、**Real-Time Collaboration** システムが適切に動作するうえでの必要不可欠なインストール後の手順が正常に終了しているかを確認するもので、管理者の検証ツールとして機能します。これらのテストは定期的に行う必要はなく、インストール後に1度だけ実行します。テストの実行の詳細は、10-18 ページの「[システムのテストおよび監視](#)」を参照してください。

電子メール構成テスト

このテストでは、**Oracle Web Conferencing** で電子メールの招待状を送信できるようにするため、管理者が必要なインストール後の手順を行ったかどうかをチェックします。電子メールの招待状を送信するには、**Oracle Web Conferencing** プロパティで企業の **SMTP** ホストとポートを指定する必要があります。テストでは、これらのプロパティが設定されているか、**SMTP** サーバーが **Oracle Real-Time Collaboration** の中間層からアクセス可能かどうかを確認します。

プロキシ構成テスト

このテストでは、**Oracle Web Conferencing** での共有ブラウザを可能にするために必要なインストール後の手順を、管理者が行ったかどうかをチェックします。このテストは、中間層でエンタープライズ・サーバーを使用してインターネットにアクセスする場合のみ、成功する必要があります。テストでは、プロキシ構成に必要なプロパティが設定されているか、プロキシ・サーバーが **Oracle Real-Time Collaboration** の中間層からアクセス可能かどうかを確認します。

MX 構成テスト

別の企業のプロキシからインターネット経由で接続するインターネット・ユーザーをサポートするためには、**Real-Time Collaboration** システムで **mod_imeeting** が有効化され、いくつかのプロパティが設定されている必要があります。テストでは、必要なプロパティが設定されているか、**HTTP** または **HTTPS** リクエストを処理して **Mx** に接続するように **mod_imeeting** が有効化されているかどうかを確認します。

リポジトリ（データベース）アクセス・テスト

すべての **Real-Time Collaboration** サービスは、データベースを唯一の情報拠点および基幹として依存していることから、**Real-Time Collaboration** リポジトリへのアクセスを検証するテストが用意されています。テストでは、データベースが利用できるかどうか（アクセス可能で、問合せに回答するかどうか）を確認します。

構成ステータス

「構成ステータス」レポートは、Web Conferencing アプリケーションの Web ページの「システム」タブから使用できます。

注意：「モニター」タブは、businessadmin ロールを所有するユーザーのみが使用できます。ユーザー・ロールの設定については、10-16 ページの「[ユーザー・ロールの設定](#)」を参照してください。

「構成」レポートには、Web Conferencing システムのすべてのサービスの現在の設定が表示されます。このレポートには、ホスト名、サービス・タイプ、配置情報（ホストがイントラネット、インターネットまたは DMZ 内のいずれに存在するか）、インスタンスの位置（存在する場合）、オペレーティング・システムおよびハードウェア情報（プラットフォーム、CPU および総メモリー容量）が表示されます。また、レポートには「**編集**」ボタン（表示されている各サーバーのプロパティを対話形式で編集できる）および「**削除**」ボタン（サービスを削除できる）もあります。

Real-Time Collaboration インタフェース

ここでは、任意の監視インフラストラクチャに組み込むことができる Real-Time Collaboration の監視インタフェースについて説明します。次の 2 種類のインタフェースがあります。

- サーブレット・インタフェース：サービス可用性の監視に使用します。
- imtctl インタフェース：主な Real-Time Collaboration コンポーネントの監視データの取得に使用します。

サーブレット・インタフェース

Oracle Web Conferencing には、Web Conferencing の主要機能の可用性を検証する一連の機能テストが含まれています。このテストには、Real-Time Collaboration リポジトリの接続性、Voice Conversion Server および Document Conversion Server の可用性、アプリケーションの可用性、インスタント会議を開催する機能のテストが含まれます。

ImtTestServlet を使用すると、これらのテストを任意の監視インフラストラクチャで起動できます。ImtTestServlet は、すべての Real-Time Collaboration テストを HTTP ベースの Web アプリケーション監視のための Web アプリケーションとして利用できるようにするアダプタとして動作します。このサーブレットは、標準の HTTP ベースの監視クライアントから利用できます。結果は自動分析に使用されます。ImtTestServlet は、Real-Time Collaboration の機能テストを既存の監視システムに簡単に統合できる、最も柔軟な方法です。

サーブレットへの入力

HTTP サーブレットとして、`ImtTestServlet` はクライアントから送信される HTTP リクエストからサーブレットへの入力情報をすべて取得します。サーブレットは、URL の問合せ文字列または POST メソッドで送信されるボディからパラメータを受け入れます。どちらの場合でも、同じパラメータがサポートされます。入力パラメータにより、実行されるテストと成功または失敗時に返される情報が決定します。

表 7-1 `ImtTestServlet` への入力

テスト名	オプション	デフォルト	コメント
<code>alltests</code>	<code>true</code> 、 <code>false</code>	<code>false</code>	サーブレットでサポートされているすべてのテストを実行します（サポートされていないテスト選択パラメータは無視されます）。
<code>mtgtest</code>	<code>true</code> 、 <code>false</code>	<code>false</code>	会議のエンド・トゥ・エンド・テストを実行し、会議の機能を利用できるかどうかを検証します。
<code>voiceconvtest</code>	<code>true</code> 、 <code>false</code>	<code>false</code>	Voice Conversion Server のテストを実行し、会議で音声サポートを利用できるかどうかを検証します。
<code>docconvtest</code>	<code>true</code> 、 <code>false</code>	<code>false</code>	Document Conversion Server のテストを実行し、会議でドキュメント変換を利用できるかどうかを検証します。
<code>dbtest</code>	<code>true</code> 、 <code>false</code>	<code>false</code>	Real-Time Collaboration リポジトリ・テストを実行し、リポジトリを利用できるかどうかを検証します。
<code>errorcode</code>	すべての有効な HTTP レスポンス・コード	500	選択したいいずれかのテストが失敗した場合に送信する HTTP レスポンス・コードを設定します。
<code>successcode</code>	すべての有効な HTTP レスポンス・コード	200	選択したすべてのテストが成功した場合に送信する HTTP レスポンス・コードを設定します。
<code>errmsg</code>	任意の文字列	<code>null</code>	選択したいいずれかのテストが失敗した場合にレスポンス・ボディに含まれるメッセージ。（ 注意： レスポンス・ボディには追加テキストが含まれる場合があります。）
<code>successmsg</code>	任意の文字列	<code>"Test(s) successful."</code>	選択したすべてのテストが成功した場合にレスポンス・ボディに含まれるメッセージ。（ 注意： レスポンス・ボディには追加テキストが含まれる場合があります。）

サーブレットからの出力

ImtTestServlet は、HTTP レスポンスを使用してテストの結果を返します。レポートされる結果は、選択したすべてのテストに成功、または一部のテストに失敗のいずれかになります。入力パラメータで複数のテストを選択した場合、どのテストが失敗したかを示す詳細は結果には含まれません。さらに、失敗の内容についてのメッセージは何も返されません。

テストの結果は HTTP レスポンス・コードで返されます。または、オプションで、レスポンス・ボディに含まれる静的な文字列で返される場合もあります。これらの 2 つの手段により、統合された製品でテストが成功したか失敗したかを十分に判断できると考えられます。

複数のテストを実行した場合、テスト・サーブレットからは各テストの詳細な結果が返されないため、オラクル社では、個々の失敗情報を検出する必要がある場合にはサーブレットを何回もコールする（1 回のリクエストで 1 つのテストを実行する）ことをお勧めしています。ただし、システム全体の状態を 1 度にまとめて確認する場合は、1 回のリクエストですべてのテストを実行する方法が最も適しています。

サンプル

次の例に、便利な入力パラメータのセットを示します。これらをテンプレートとして様々なホスト名、ポート、アプリケーション・ルート・コンテキストとともに使用します。

`http://<host>:<port>/<root-context>/servlet/ImtTestServlet`

テスト・サーブレットが適切にインストールされているかを確認します。テストは実行されません。

`http://<host>:<port>/<root-context>/servlet/ImtTestServlet?alltests=true`

標準のエラー・コード（500）および成功コード（200）を返すすべてのテストを実行します。

`http://<host>:<port>/<root-context>/servlet/ImtTestServlet?mtgtest=true&errorcode=404`

エンド・トゥ・エンドの会議のテストのみを実行し、失敗した場合には 404 を返します。

`http://<host>:<port>/<root-context>/servlet/ImtTestServlet?mtgtest=true&voiceconvtest=true&errormsg=mtgorvoic
efailed`

会議および音声テストを実行し、失敗した場合には標準レスポンス・コードの 500 とカスタム・メッセージを返します。

制限

IntTestServlet には現在、次のような制限があります。サーブレットは OC4J_immeeting で動作するため、OC4J_immeeting へアクセスできないと、他の Web Conferencing Server および Document Conversion Server などの Real-Time Collaboration コンポーネントの障害を細かく検出することができなくなります。ただし、OC4J_immeeting はすべての Web Conferencing サービスのゲートキーパーとして機能するため、この制限は重大な問題ではありません。クライアントにとっては、OC4J_immeeting にアクセスできないことはすべての Web Conferencing サービスにアクセスできないのと同じことを意味します。

Oracle Real-Time Collaboration は、Oracle Web Conferencing アプリケーションで利用可能な電子メール・レポートおよび利用状況レポートなどの様々なレポート機能をサポートしています。これらの機能には、送信者および受信者の電子メール・アドレスなどのように、インストール後の構成が必要な部分もあります。構成の詳細は、[第4章「インストール後」](#)を参照してください。

利用状況レポート

利用状況レポートは、Web Conferencing アプリケーションの Web ページの「レポート」タブから使用できます。

注意：「レポート」タブは、businessmonitor または businessadmin ロールを所有するユーザーのみが使用できます。ユーザー・ロールの設定については、10-16 ページの「[ユーザー・ロールの設定](#)」を参照してください。

利用状況レポートは、ビジネス管理者およびビジネス・マネージャに高水準な Web Conferencing 利用状況の統計データ（メトリック）を提供するように設計されています。レポートには、次の 2 つのメトリックのいずれかに基づいたデータが含まれます。

- 時間（分 / 時間）
- 利用数（会議やユーザーなどのカウント数）

重要業績評価指標（KPI）には、前回の集計に対するカウント数およびパーセンテージの変化を示す利用状況の動向パターンが表示されます。ビジネス管理者およびビジネス・マネージャはこのレポートを確認して、使用されているコラボレーション・モードおよび機能、上位ユーザー、ライン・オブ・ビジネスなどに関する情報を把握することができます。利用状況レポートは週ベースで計算されます。また、関連する日付を入力すると履歴データを参照できます。

利用状況レポートには、次のメトリックが含まれます。

会議時間サマリー（分）：

- 総ユーザー使用時間（分）
- 総会議時間（分）
- 総音声使用時間（分）
- 総記録時間（分）
- 総再生時間（分）
- 開催者の評価
- 平均会議時間
- 最長会議時間（分）

会議の利用状況サマリー：

- 会議
- 音声会議
- 総ユーザー数
- 総記録数
- 総再生回数
- 会議中のユーザー
- 音声ユーザー
- 会議ごとの平均ユーザー数
- 最大会議（ユーザー数）

ユーザー登録およびログインの詳細：

- 週ごとおよび現在までの一意のユーザー
- 週ごとの新規登録数および現在までの総登録数

ユーザーおよびサイトのトップ 10 リスト

週ベースの KPI 表の他に、会議使用時間および利用状況の詳細は、毎週、毎月、四半期ごと、年に 1 度の間隔で表示されます。週ベースのピーク時に対する平均値も計算されます。

フィードバック・レポート

フィードバック・レポートは、Web Conferencing アプリケーションの Web ページの「レポート」タブから使用できます。

注意：「レポート」タブは、businessmonitor または businessadmin ロールを所有するユーザーのみが使用できます。ユーザー・ロールの設定については、10-16 ページの「[ユーザー・ロールの設定](#)」を参照してください。

フィードバック・レポートは、ユーザーの評価を利用して、ビジネス管理者およびビジネス・マネージャに高水準なシステム・パフォーマンス・フィードバックを提供するように設計されています。レポートには、各会議の終了時に会議開催者が行うパフォーマンス評価に基づいたデータが含まれます。

会議の開催者は、「優れている」、「よい」、「悪い」のいずれかの会議の評価の他に、コメント（テキスト・フィードバック・データ）を追加できます。開催者はオプションで会議を評価しないこともできます。この場合、会議は回答なしで分類されます。重要業績評価指数には、前回の集計に対するカウント数およびパーセンテージの変化を示す利用状況の動向パターンが表示されます。

KPI 表の下には、「優れている」、「よい」、「悪い」のいずれかの評価を示すトップ 10 の会議と、ユーザーのコメントが付いた「回答なし」の評価が一覧表示されます。これらは、4 つの個別の表にグループ化されます。開催者のコメント付きの会議のみ、表に表示されます。このような形式により、管理者が悪い評価を示したユーザーに対して迅速に対応できるようになっています。

稼働時間レポート

Oracle Real-Time Collaboration には、サービス可用性のために定期的に Web Conferencing を監視するため、監視インフラストラクチャで使用可能なテストが用意されています。このデータは、稼働時間レポートの生成に使用できます。テストに関する情報および監視インフラストラクチャとの統合の詳細は、7-7 ページの「[Real-Time Collaboration インタフェース](#)」を参照してください。

Web Conferencing のサイト

Oracle Web Conferencing を使用すると、個々のサイトを作成し、それらのシステム、アプリケーションおよび会議レベルのプロパティをカスタマイズすることによって、様々なライン・オブ・ビジネスの要件を満たす単一の配置インスタンスを簡単に構成できます。

Web Conferencing のサイトはビジネス管理者が作成します。(ユーザーへのビジネス管理者ロールの割当てについては、10-16 ページの「[ユーザー・ロールの設定](#)」を参照してください。) 作成された各サイトでは、統合アプリケーションまたはライン・オブ・ビジネスが一意の認証トークンとサイト ID を使用して、Web Conferencing アプリケーションと通信します。サイトを作成する場合、次のことが可能です。

- システム、アプリケーションおよび会議のプロパティのカスタマイズ
- Oracle Web Conferencing アプリケーションを介さないカスタム統合フローのサポート
- サイトのプロパティ・セットに基づいた Web Conferencing コンソールの動作のカスタマイズ
- グローバルな Web Conferencing サイト・レポートと同等の詳細データを提供するサイトレベル・レポート
- 特定サイト専用の公開会議を一覧表示するための完全なサポートを備えた、個々の Oracle Web Conferencing ログイン前アプリケーション・ページなどのカスタム・ユーザー・インタフェース
- 統合サイトまたはライン・オブ・ビジネスを一意に特定するためのカスタムのブランド情報の追加

グローバル・サイトはあらかじめ作成され、削除はできません。デフォルトでは、すべてのユーザーはグローバル・サイトである「Web Conferencing」サイトに属しています。ただし、ユーザーは複数のサイトに属することができます。

アプリケーションとサイトの統合

Real-Time Collaboration システムはサイトの概念を使用して、各統合アプリケーションごとに、カスタマイズされた Web Conferencing の配置のビューを提供します。企業では、ライン・オブ・ビジネス（営業部や業務支援部など）をサポートする様々な統合アプリケーションによって、Real-Time Collaboration システムの単一の配置を使用できます。統合アプリケーションをサポートするには、一意のサイト ID を持つサイトを作成します。

企業内のアプリケーションは、次の 2 通りの方法で Oracle Web Conferencing と統合できます。

- Oracle Real-Time Collaboration Integration Service コールを使用して、プログラマ的に Web Conferencing を起動します。
- アプリケーションがブラウザ・ベースのインタフェースを使用している場合は、Oracle Web Conferencing アプリケーション・ページを直接呼び出すことができます。

どちらの場合も、サイト ID により、Real-Time Collaboration システムで統合アプリケーションごとにカスタマイズされたサービスを利用できます。

サイトの作成

Oracle Web Conferencing 管理者は、一意のサイト名、表示名およびサイトの説明を指定してサイトを作成します。サイトを作成するには、管理者は次の手順を実行します。

1. 管理者アカウントでログインします（10-16 ページの「[ユーザー・ロールの設定](#)」で説明するように、アカウントに **businessadmin** ロールが割り当てられている必要があります）。
2. 「**サイト**」タブをクリックします。
3. 「**サイトの作成**」ボタンをクリックします。
4. サイトを作成し、サイトにサイト名（必須）および説明（オプション）を割り当てます。
5. 「**適用**」をクリックします。

Real-Time Collaboration システムは、そのサイトを登録し、システムで作成されるサイト ID と認証トークンを管理者に提供します。Real-Time Collaboration システムと統合するアプリケーションでは、その新しいサイト ID を使用して適切なコールを実行できます。

サイト ID の使用

Oracle Real-Time Collaboration Integration Service コールでは、HTTP リクエストの HTTP ヘッダー・フィールドの一部としてサイト ID を渡し、サービスを起動します。Oracle Web Conferencing アプリケーション・ページへのリンクが含まれるアプリケーション Web ページの場合、サイト ID を URL パラメータとして使用できます。たとえば、次のような URL を使用して、サイト 123456 用に Oracle Web Conferencing のカスタマイズされたビューを提供できます。

```
http://<hostname>:<port-number>/imtapp/app/prelogin.uix?siteID=123456
```

ブラウザにこの URL を入力すると、Web Conferencing プロパティを使用して、ルック・アンド・フィールドとサイト 123456 に指定したコンテンツを含むページが返されます (9-3 ページの「[サイト・プロパティのカスタマイズ](#)」を参照)。アプリケーション・ページから作成されたすべての会議には、そのサイトの会議に対して定義された属性が含まれます。

サイト・プロパティのカスタマイズ

サイトを作成した後、Oracle Web Conferencing と統合サイトの相互作用を制御するためのサイト固有のプロパティを設定できます。プロパティを変更しない場合は、対応するデフォルトの Web Conferencing サイトの値が適用されます。サイト・レベルで設定可能なプロパティの説明は、[第 5 章「構成」](#)を参照してください。

次の 2 種類のユーザーとサイトの相互作用に影響するプロパティがあります。

- アプリケーション・プロパティ : Oracle Web Conferencing アプリケーション・ページのルック・アンド・フィールドを変更します。このプロパティには、各アプリケーション・ページの最上部に表示される共同ブランド名、「連絡先」ページの電子メール・アドレス、アプリケーション・ページの各表に表示される行数などがあります。
- 会議のプロパティ : アプリケーション・ページまたは Integration Service コールのどちらを使用して呼び出すかに関係なく、会議の任意の属性を変更します。このプロパティには、会議のスタートアップ (コラボレーション)・モード、会議中のチャットの可用性などがあります。

図 9-1 サイト・プロパティの継承

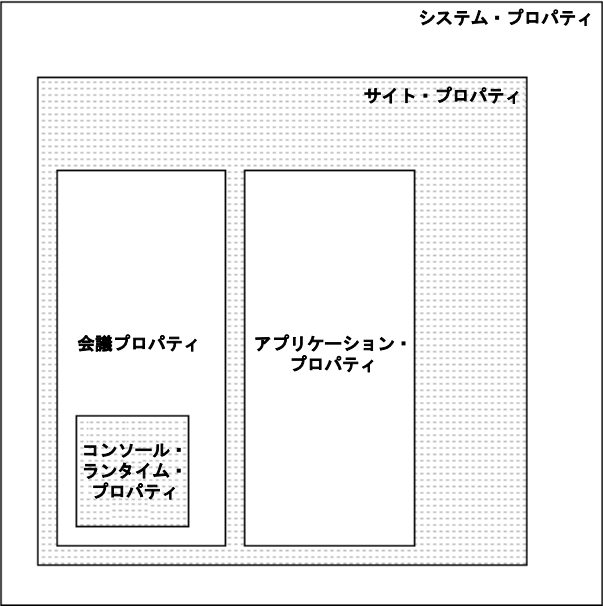


図 9-1「**サイト・プロパティの継承**」は、Oracle Web Conferencing の様々なプロパティがどのように継承、設定されるかを示しています。サイトが作成された場合、システム設定からすべてのプロパティのデフォルト値が継承されます。管理者は各サイトでデフォルト値をオーバーライドして、様々な会議レベルおよびアプリケーション・レベルのプロパティを設定できます。会議レベル・プロパティには、会議実行時に **Web Conferencing** コンソールの内部から変更できるものがあります。たとえば、システムのデフォルト設定で、各会議の開始モードが共有ブラウズ・モードに設定されているとします。サイトが作成されると、このデフォルト値が継承されます。サイト管理者は、StartupMeetingMode プロパティをデスクトップ共有モードなどに変更することにより、デフォルト値をオーバーライドできます。

imtctl コマンドライン・ユーティリティ

imtctl ユーティリティは、Real-Time Collaboration システムを管理および構成するためのコマンドライン・インタフェースを提供します。ユーティリティでは、Real-Time Collaboration プロセスの起動と停止、プロセスの現在の状態の表示、Web Conferencing システムの構成などを行える様々なコマンドを利用できます。

imtctl の実行

imtctl ユーティリティは、すべてのプラットフォーム上の \$ORACLE_HOME/imeeting/bin で使用できます。次に imtctl コマンドを対話形式で実行する 2 通りの方法を示します。また、imtctl コマンドを実行するスクリプトを作成することもできます。

- コマンドラインで imtctl コマンド全体を入力します。これによって、一連のコマンドが一度で実行されます。次に例を示します。

```
> $ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtctl setProperty -system true -pname
"StartupMeetingMode" -pvalue "DesktopSharing"
```

- オプションを指定せずに imtctl と入力します。これによって、ユーティリティが対話形式のコマンド・モードでオープンされます。詳細は、10-2 ページの「[コマンドライン・モードでの imtctl の使用](#)」を参照してください。

次の項では、imtctl を対話モードで使用方法および imtctl スクリプトを実行する方法について説明します。

コマンドライン・モードでの imtctl の使用

コマンドライン・モードで imtctl を起動するには、オペレーティング・システムのシェルまたはコマンド・ウィンドウでオプションを指定せずに imtctl と入力します。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin> imtctl
imtctl>
```

その後、任意の数の imtctl コマンドを入力できます。

```
imtctl> setProperty -siteId 1024536 -pname "MeetingStartUrl" -pvalue
"www.oracle.com"
imtctl> setProperty -siteId 1024536 -pname "MeetingEndUrl" -pvalue "www.oracle.com"
imtctl>
```

サポートされているコマンドのリストを表示するには、help と入力します。

```
imtctl> help
```

特定のコマンドの説明を表示するには、次のように -help オプションを付けてコマンドを入力します。

```
imtctl> getState -help
```

exit と入力すると、コマンドライン・モードは停止します。

```
imtctl> exit
```

imctl スクリプト

imctl ユーティリティの簡単なスクリプト（imctl コマンドおよびオプションのコメントで構成）を記述できます。

Oracle Web Conferencing には、インストール後の一般的な構成タスクの実行に使用できる標準スクリプト・セットが付属しています。これらのスクリプトは、拡張子 .imt で \$ORACLE_HOME/imeeting/bin/scripts ディレクトリに格納されています。各スクリプトにはサンプル行が含まれており、スクリプトの実行前に必要な値を指定できるようになっています。次のように標準的な入力リダイレクションを使用してスクリプトを起動します。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin> imctl < scripts/sample.imt
```

必要に応じて新しいスクリプトを作成できます。スクリプトには、サポートされている任意の imctl コマンド、コメント行（# で始まる行）、スクリプトで実行されているコマンドをエコーするための特別な echo [on/off] コマンドを記述できます。

システム、インスタンス、コンポーネントおよびサイトの値の設定

第 5 章で説明するように、imctl を使用して、システム全体、特定のインスタンスまたは特定のコンポーネントを構成することができます。10-5 ページの「imctl コマンドのリスト」に、使用可能なオプションを含む imctl コマンドのすべての構文を示します。次の表に、すべてのスコープ関連のオプションに指定可能な値を示します。これらの値は、これらのいずれかのオプションを含むコマンドで使用できます。

表 10-1 システム、インスタンスまたはコンポーネントのオプションの有効値

imctl オプション	影響するスコープ	有効値
-system	システム全体	true
-i	インスタンス	正式なインスタンス名： instance_name. マシン名 . ドメイン名。ここでは、 instance_name はインスタンスのインストール時に 割り当てた名前です。 このシステムのすべてのインスタンスの ID を表示 するには、imctl listInstances を使用しま す。また、すべてのインスタンスを表示するには、 「システム」タブをクリックします。 例 : myinst.machine.us.oracle.com

表 10-1 システム、インスタンスまたはコンポーネントのオプションの有効値（続き）

imtctl オプション	影響するスコープ	有効値
-cid	単一のコンポーネント (ID ごと)	コンポーネントのインストール時に、Real-Time Collaboration システムによってそのコンポーネントに割り当てられた番号。 現在のインスタンス内のすべてのコンポーネントの ID を表示するには、imtctl listComponents を使用します。また、ご使用のシステムのすべてのコンポーネントとその ID を表示するには、「 システム 」タブをクリックします。
-cname	特定の名称の任意のコンポーネント	次のいずれかの名称： imt-collab: Web Conferencing Server imt-docconv: Document Conversion Server imt-mx: Multiplexer (mx) imt-pm: Web Conferencing Process Monitor imt-voiceconv: Voice Conversion Server
-ct	特定のタイプの任意のコンポーネント	次のいずれかのタイプ： clbsvr: Web Conferencing Server docconv: Document Conversion Server imtpm: Web ConferencingProcess Monitor mxcomm: Multiplexer (mx) voiceconv: Voice Conversion Server
-siteID	単一のサイト (ID ごと)	サイトの作成時に、Real-Time Collaboration システムによってそのサイトに割り当てられた番号。 ご使用のシステムのすべてのサイトとその ID を表示するには、「 サイト 」タブをクリックします。

imtctl コマンドのリスト

次に、すべての imtctl コマンドの概要をアルファベット順に示します。

表 10-2 imtctl コマンド

コマンド	使用目的	参照先
addSysDialin	音声会議のダイヤルイン番号の追加	「会議のダイヤルイン情報の設定」
deleteSysDialin	音声会議のダイヤルイン番号の削除	「会議のダイヤルイン情報の設定」
exit または quit	imtctl コマンドライン・モードの終了	「ヘルプの表示および imtctl の終了」
getMonitorStats	監視対象の統計データの表示	「システムのテストおよび監視」
getPids	現在の Web Conferencing プロセスの識別子の表示	「システムのテストおよび監視」
getProperties	指定されたスコープの現在のプロパティ値の取得	「プロパティの設定および表示」
getProperty	任意のプロパティの現在の値の取得	「プロパティの設定および表示」
getState	Web Conferencing コンポーネントの現在の状態の判断	「システムのテストおよび監視」
getSysDialins	現在設定されているすべてのダイヤルイン番号の表示	「会議のダイヤルイン情報の設定」
help	使用可能なコマンドのリストの表示	「会議のダイヤルイン情報の設定」
listComponents	Web Conferencing コンポーネントの現在のプロパティの表示	「システム情報の表示」
listInstances	Web Conferencing インスタンスの現在のプロパティの表示	「システム情報の表示」
modifyRole	任意の Web Conferencing ユーザーのロールの設定または変更	「ユーザー・ロールの設定」
runTests	Web Conferencing システムでの状態テストの実行	「システムのテストおよび監視」
setProperty	Web Conferencing システムを構成するプロパティの設定	「プロパティの設定および表示」

表 10-2 imtctl コマンド (続き)

コマンド	使用目的	参照先
start	Web Conferencing インスタンスの起動	「インスタンスの起動および停止」
stop	Web Conferencing インスタンスの停止	「インスタンスの起動および停止」
versions	インスタンスのバージョン情報の表示	「システム情報の表示」

次の項では、imtctl コマンドについて説明します。内容は次のとおりです。

- [インスタンスの起動および停止](#)
- [システム情報の表示](#)
- [プロパティの設定および表示](#)
- [ユーザー・ロールの設定](#)
- [会議のダイヤルイン情報の設定](#)
- [システムのテストおよび監視](#)
- [「ヘルプの表示および imtctl の終了」](#)

インスタンスの起動および停止

start および stop コマンドを使用して、インスタンスまたはコンポーネントのプロセスを起動します。

注意： start および stop コマンドを使用すると管理目的で個々のコンポーネントを起動および停止できますが、このマニュアルでは、通常はすべてのインスタンスの起動または停止（可能な場合）のみを使用することをお勧めします。

start

現在のインスタンス、または現在のインスタンスの個々のコンポーネントを起動します。インスタンスおよびコンポーネントのオプションの有効値は、[表 10-1](#) を参照してください。

- **start**
現在のインスタンスのすべてのコンポーネントを起動します。これは、推奨するインスタンスの起動方法です（すべての起動時の依存性が処理されるため）。
- **start -i *instance-name***
特定のインスタンスのすべてのコンポーネントを起動します。
- **start -cid *component-ID***
指定した ID を持つコンポーネントを起動します。
- **start -cname *component-name***
指定した名前のコンポーネントを起動します。
- **start -ct *component-type***
指定したタイプのコンポーネントを起動します。

例 1: 指定した ID を持つコンポーネントの起動

現在のインスタンス内の ID 10001 を持つコンポーネントを起動するには、次のように入力します。

```
imctl> start -cid 10001
```

注意： 入力した ID を持つコンポーネントは、imctl コマンドを入力したインスタンスで実行されている必要があります。

例 2: 指定した名前のコンポーネントの起動

現在のインスタンス内の imt-collab という名前のコンポーネントを起動するには、次のように入力します。

```
imctl> start -cname imt-collab
```

注意： 入力した名前のコンポーネントは、imctl コマンドを入力したインスタンスで実行されている必要があります。

stop

現在のインスタンス、または現在のインスタンスの個々のコンポーネントを停止します。インスタンスおよびコンポーネントのオプションの有効値は、[表 10-1](#) を参照してください。

- **stop**

現在のインスタンスのすべてのコンポーネントを停止します。これは、推奨するインスタンスの停止方法です（インスタンス内のすべてのコンポーネントが適切な順序で停止されるため）。

- **stop -i *instance-name***

特定のインスタンスのすべてのコンポーネントを停止します。

- **stop -cid *component-ID***

指定した ID を持つコンポーネントを停止します。

- **stop -cname *component-name***

指定した名前のコンポーネントを停止します。

- **stop -ct *component-type***

指定したタイプのコンポーネントを停止します。

例 1: 指定した ID を持つコンポーネントの停止

ID 10001 を持つコンポーネントを停止するには、次のように入力します。

```
imtctl> stop-cid 10001
```

注意： 入力した ID を持つコンポーネントは、imtctl コマンドを入力したインスタンスで実行されている必要があります。

例 2: 指定した名前のコンポーネントの停止

imt-collab という名前のコンポーネントを停止するには、次のように入力します。

```
imtctl> stop -cname imt-collab
```

注意： 入力した名前のコンポーネントは、imtctl コマンドを入力したインスタンスで実行されている必要があります。

システム情報の表示

次の3つの情報コマンド（`listInstances`、`listComponents` および `versions`）を使用すると、ご使用のシステムの一部の詳細を表示できます。

listInstances

Real-Time Collaboration システムのすべてのインスタンスを一覧表示します。

```
imtctl> listInstances
INSTANCE NAME          HOST NAME          IMT HOME
instance1.oracle.com   host1.oracle.com   C:/core/imeeting
instance2.oracle.com   host2.oracle.com   /u02/90200b/imeeting
```

listComponents

任意の Real-Time Collaboration インスタンスのコンポーネントを一覧表示します。コンポーネントおよびインスタンスのオプションの有効値は、[表 10-1](#) を参照してください。

- `listComponents`
現在のインスタンスのすべてのコンポーネントの情報を一覧表示します。
- `listComponents -i instance-name`
特定のインスタンスのすべてのコンポーネントを一覧表示します。
- `listComponents -cid component_ID`
指定した ID を持つコンポーネントを一覧表示します。
- `listComponents -cname component-name [-i instance-name]`
指定した名前のコンポーネントを一覧表示します。`-i` を使用すると、指定したインスタンス内の指定した名前のコンポーネントを一覧表示します。
- `listComponents -ct component-type [-i instance-name]`
指定したタイプのコンポーネントを一覧表示します。`-i` を使用すると、指定したインスタンス内の指定したタイプのコンポーネントを一覧表示します。

例 1: 現在のインスタンスのコンポーネントの一覧表示

現在のインスタンスのコンポーネントを一覧表示するには、次のように入力します。

```
imtctl> listComponents
```

ID	NAME	TYPE	DESCRIPTION	NUM_PROCS
10006	imt-collab	clbsvr	Collaboration Server	4
10008	imt-pm	imtpm	iMeeting Process Monitor	1
10009	imtctl	imtctl	iMeeting CmdLine Control	1
10007	OC4J_imeeting	oc4j	OC4J	1
10005	imt-mx	mxcomm	Multiplexer	1

例 2: 特定のインスタンスのコンポーネントの一覧表示

異なるインスタンス (instance1.company.com) のコンポーネントを一覧表示するには、次のように入力します。

```
imtctl> listComponents -i instance1.company.com
```

ID	NAME	TYPE	DESCRIPTION	NUM_PROCS
10003	imt-voice	voiceconv	Voice Conversion Server	1
10004	imt-converter	docconv	Document Conversion Server	1

例 3: 特定の ID のコンポーネントの一覧表示

ID 10007 のコンポーネントを表示するには、次のように入力します。

```
imtctl> listComponents -cid 10006
```

ID	NAME	TYPE	DESCRIPTION	NUM_PROCS
10007	OC4J_imeeting	oc4j	OC4J	1

例 4: 特定のタイプのコンポーネントの一覧表示

現在のインスタンスのタイプ clbsvr のコンポーネントを一覧表示するには、次のように入力します。

```
imtctl> listComponents -ct clbsvr
```

ID	NAME	TYPE	DESCRIPTION	NUM_PROCS
10006	imt-collab	clbsvr	Collaboration Server	4

versions

インスタンスまたはコンポーネントのソフトウェア・バージョンを一覧表示します。インスタンスおよびコンポーネントのオプションの有効値は、[表 10-1](#) を参照してください。

- **versions [-i *instance-name*]**

現在のインスタンスまたは指定したインスタンスのすべてのコンポーネントのバージョンを一覧表示します。

- **versions -cid *component-ID***

特定のコンポーネントのバージョンを ID ごとに一覧表示します。

- **versions -cname *component-name* [-i *instance-name*]**

特定の名前のすべてのコンポーネント（およびオプションで特定のインスタンス）のバージョンを一覧表示します。

- **versions -ct *component-type* [-i *instance-name*]**

特定のタイプのすべてのコンポーネント（およびオプションで特定のインスタンス）のバージョンを一覧表示します。

例 1: 現在のインスタンスのバージョンの一覧表示

現在のインスタンスのすべてのコンポーネントで実行されているソフトウェア・バージョンを一覧表示するには、次のように入力します。

```
imtctl> versions
ID          NAME          TYPE          VERSION
10006      imt-collab      clbsvr        2.0.4.3.0 Rel20430_135
10008      imt-pm          imtpm         2.0.4.3.0 Rel20430_135
10007      OC4J_imeeting   oc4j          2.0.4.3.0 Rel20430_135
```

例 2: 特定のインスタンスのコンポーネントのバージョンの一覧表示

myinstance.oracle.com の Document Conversion Server のソフトウェア・バージョンを一覧表示するには、次のように入力します。

```
imtctl> versions -ct docconv -i myinstance.oracle.com
ID          NAME          TYPE          VERSION
10010      imt-docconv     docconv       2.0.4.3.0 Rel20430_135
```

プロパティの設定および表示

プロパティを設定して、Web Conferencing システムを構成します。setProperty、getProperty および getProperties コマンドを使用すると、プロパティの詳細を設定および表示できます。

設定可能なすべてのプロパティのリストは、[第 5 章「構成」の表 5-2「Web Conferencing プロパティ」](#)を参照してください。各プロパティの特定の構文についても参照してください。

setProperty

Real-Time Collaboration システム、インスタンス（デフォルト）、コンポーネントまたはサイト（あるいはすべて）を構成するためにプロパティを設定します。システム、インスタンス、コンポーネントおよびサイトのオプションの有効値は、[表 10-1](#)を参照してください。

- `imctl> setProperty -pname property-name -pvalue property-value`
プロパティの値をインスタンス・レベルで設定します。
- `imctl> setProperty -cid component-id -pname prop_name -pvalue prop_value`
指定した ID を持つコンポーネントのプロパティ値を設定します。
- `imctl> setProperty -cname component-name [-i instance-name] -pname prop_name -pvalue prop_value`
現在のインスタンスの指定した名前のコンポーネントのプロパティ値を設定します。-i を使用すると、指定したインスタンス内の指定した名前のコンポーネントのプロパティ値を設定します。
- `imctl> setProperty -ct component-type [-i instance-name] -pname prop_name -pvalue prop_value`
現在のインスタンスの指定したタイプのコポーネントのプロパティ値を設定します。-i を使用すると、指定したインスタンス内の指定したタイプのコンポーネントのプロパティ値を設定します。
- `imctl> setProperty -system true -pname property_name -pvalue property_value`
プロパティの値をシステム・レベルで設定します。
- `imctl> setProperty -siteid site-id -pname property_name -pvalue property_value`
プロパティの値をサイト・レベルで設定します。
- `imctl> setProperty -pname property-name -pvalue null true|false`
-pvalue null が true の場合にプロパティ値を null に設定します。プロパティを設定解除して値が NULL になるようにする場合に使用します。一部のプロパティでは、NULL が特殊な方法で解釈されます。たとえば、GlobalWebhost プロパティは、設定すると、値を null に設定しないかぎり設定解除できません。デフォルトでは、-pvalue null の値は false で、-pvalue が必要です。

例 1: インスタンスのプロパティの設定

現在のインスタンスの ApacheWebHost プロパティを imeeting4.company.com に設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -pname ApacheWebHost -pvalue imeeting4.company.com
```

例 2: システムのプロパティの設定

システム全体のログ・レベルを SEVERE に設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname LogLevel -pvalue SEVERE
```

その他の例は、[第 5 章「構成」](#)を参照してください。

getProperty

指定の範囲でプロパティを取得できます。Oracle Real-Time Collaboration では、システム、インスタンス（デフォルト）、コンポーネント、サイトの範囲をサポートしています。システム、インスタンス、コンポーネントおよびサイトのオプションの有効値は、[表 10-1](#)を参照してください。

- `imtctl> getProperty -pname property_name`
このインスタンスのプロパティ値を取得します。
- `imtctl> getProperty -cid component-id -pname property_name`
指定した ID を持つコンポーネントのプロパティ値を取得します。
- `imtctl> getProperty -cname component-name [-i instance-name] -pname property_name`
現在のインスタンスの指定した名前のコンポーネントのプロパティ値を取得します。-i を使用すると、指定したインスタンス内の指定した名前のコンポーネントのプロパティ値を取得します。
- `imtctl> getProperty -ct component-type [-i instance-name] -pname property_name`
現在のインスタンスの指定したタイプのコンポーネントのプロパティ値を取得します。-i を使用すると、指定したインスタンス内の指定したタイプのコンポーネントのプロパティ値を取得します。
- `imtctl> getProperty -system true -pname property_name`
システム・レベルでプロパティ値を取得します。
- `imtctl> getProperty -siteid site-id -pname property_name`
指定したサイトのすべてのサイト・レベルでプロパティ値を取得します。

例 1: 現在のインスタンスのプロパティの取得

現在のインスタンスの ApacheWebHost プロパティを取得するには、次のように入力します。

```
imtctl> getProperty -pname ApacheWebHost
The effective value for instance myinstance.ap079sun.us.oracle.com of the property
"ApacheWebHost" is "imeeting4.company.com"
```

例 2: システムのプロパティの取得

システムで SSL セキュリティが有効（これによってセキュアな会議を作成可能）にされているかどうかを表示するには、次のように入力します。

```
imtctl> getProperty -system true -pname GlobalMeetingSSLSupportEnabled
The effective value at system scope of the property "GlobalMeetingSSLSupportEnabled"
is "true"
```

すべての指定可能なプロパティのリストは、[第 5 章「構成」](#)を参照してください。

getProperties

指定したスコープとその上位のすべてのプロパティのアルファベット順のリストを表示します。システムおよびインスタンス、コンポーネントまたはサイトのプロパティを表示できます。システム、インスタンス、コンポーネントおよびサイトのオプションの有効値は、[表 10-1](#)を参照してください。

- `imtctl> getProperties`

このインスタンスおよびシステムのプロパティ値を表示します。

- `imtctl> getProperties -ct component-type [-i instance-name]`

現在のインスタンスの指定したタイプのコンポーネントのすべてのプロパティ値を表示します。`-i`を使用すると、指定したインスタンス内の指定したタイプのコンポーネントのプロパティ値を取得します。コンポーネント、インスタンスおよびシステムのプロパティを返します。

- `imtctl> getProperties -system true`

システム・プロパティのみを表示します。

- `imtctl> getProperties -siteld site-id`

指定されたサイトおよびシステムのすべてのプロパティ値を表示します。

例 1: システムのみのプロパティを表示

システム・レベルのプロパティのみを表示するには、次のように入力します。

```
imtctl> getProperties -system true
AllSitesID="100"
ApplicationContainerName="RTC"
ApplicationEntryName="RTCApplication"
CheckConnectionTimePeriod="15"
ConsolePrivacyEnabled="true"
CorpImageName="oracle_ocs_crop.gif"
DateFormat="dd-MMM-yyyy h:mm a"
...
```

注意： このコマンドはシステムに設定されたすべてのプロパティを表示します。このプロパティには、デフォルトまたは Web Conferencing の Graphical User Interface (GUI) によって設定されたプロパティが含まれます。通常、システムを構成するために `setProperty` を使用して設定するプロパティについては、[第 5 章「構成」](#) を参照してください。

例 2: コンポーネントのプロパティの表示（タイプごと）

このインスタンスのすべてのコラボレーション・サーバー (clbsvr)・コンポーネントのプロパティ、インスタンス・プロパティおよびシステム・プロパティを表示するには、次のように入力します。

```
imtctl> getProperties -ct clbsvr
AdditionalLocationsServed="(null) "
AdminEmail="imeeting@us"
AllSitesID="100"
ApacheProtocolSecure="true"
ApacheTunnelHost="machine1.us.oracle.com"
ApacheTunnelPort="443"
ApacheWebHost="machine1.us.oracle.com"
ApacheWebPort="80"
ApacheWebSecurePort="443"
...
```

ユーザー・ロールの設定

2-13 ページの「[ユーザー管理](#)」で説明するとおり、Web Conferencing システムではユーザーを識別するために Oracle Internet Directory ストアを使用します。これらのユーザーが Web Conferencing システムの様々な機能にアクセスできるように、ユーザーにロールを割り当てます。ロールを割り当てるには、`modifyRole` コマンドを使用します。

`modifyRole`

ユーザーがアクセスできる Web Conferencing システムの機能を制御するために、ユーザーのロールを設定します。

`modifyRole -username username -rolename rolename`

名前付きユーザーにロールを割り当てます。ユーザー名は、Oracle Internet Directory で `john.smith@oracle.com` のように表示されます。ロールは次のいずれかです。

- **enduser:** すべての標準の Web Conferencing 機能（会議の予定、会議資料のアップロード、会議のアーカイブの表示など）を使用できます。
- **businessmonitor:** 標準の Web Conferencing 機能を使用できます。また、「監視」および「レポート」タブを表示して、現在の会議を監視したり、会議の履歴、利用状況、およびユーザーからの会議についてのフィードバックに関するレポートを参照できます。
- **businessadmin:** 前述のすべての機能を使用できます。また、「サイト」および「システム」タブを表示して、Web Conferencing のサイトを作成および管理したり、システム of すべてのインスタンスおよびコンポーネントに関する統計を表示できます。

注意： `businessadmin` 権限を持つユーザーのみが他のユーザーのロールを設定できます。第 4 章「[インストール後](#)」で説明するとおり、Web Conferencing 環境に対して 1 人以上の `businessadmin` ユーザーを設定する必要があります。

例：ビジネス管理者ロールの設定

`jane.roe@oracle.com` をビジネス管理者として設定するには、次のように入力します。

```
imtctl> modifyRole -username jane.roe@oracle.com -rolename businessadmin
```


会議のダイヤルイン情報の設定

音声配信会議を使用する場合、`addSysDialin`、`deleteSysDialin` および `getSysDialins` コマンドを使用すると、ご使用の電話会議ベンダーのすべてのダイヤルイン番号を管理できます。ダイヤルイン情報の設定の詳細は、[第 5 章「構成」](#)を参照してください。

addSysDialin

名前付きのダイヤルインに、あらかじめプログラミングされた番号を設定します。この番号は、ユーザーが会議を予定する際、ドロップダウン・リストから選択できます。繰り返し開催する電話会議について、会議 ID およびパスワードとともに完全な番号を登録できます。また、ユーザーが自身の情報に置き換える必要があることを示す説明とともに、テンプレートの番号を登録できます。ユーザーは、このダイヤルインを選択すると、テキスト・フィールドで番号を編集できます。

- `addSysDialin -name dialin-name -sequence dialin-sequence [-default true]`

指定した名前と番号（シーケンス）でダイヤルインを追加します。`-default` が `true` に設定されている場合、このダイヤルインは Web Conferencing システムのすべてのユーザーのデフォルトです。

注意： Voice Conversion Server は、その番号に実際に電話をかけます。自身の企業に外線をかけるために入力する必要がある識別コードがある場合は、`VoiceDialInPrefix` プロパティを使用して識別コードを設定します。ダイヤルインに識別コードを入力しないでください。詳細は、[4-13 ページの「Web Conferencing に対する Document Conversion Server および Voice Conversion Server の設定」](#)を参照してください。

例 1: システムのデフォルトのダイヤルインの設定

すべてのユーザーが使用可能な Standard Conference という名前のダイヤルインをデフォルトとして設定するには、次のように入力します。

```
imctl> addSysDialin -name "Standard Conference" -sequence "18005551234,,<Conf ID>#<Passcode>#,,,,,,,,,#" -default true
New system dialin created with id = 21994
```

Web Conferencing システムは、自動的にダイヤルインに ID 番号を割り当てます。

前述の例では、ユーザーは山カッコ内のテキストを削除し、特定の会議 ID およびパスワードを入力できます。カンマ (,) を使用すると、ダイヤルインが 1 秒間一時停止します。# 記号は、ユーザーが # ボタンを押すと ID またはパスワード（通常はほとんどの電話会議ベンダーから要求されます）の入力が完了することを表します。ユーザーが # を押して応答する必要がある追加メッセージが電話会議システムに含まれている場合、メッセージが表示されている間、一時停止するためにカンマを、応答するために # を含めることができます。

例 2: 繰り返し開催する会議のダイヤルインの設定

ID 80904 およびパスコード 56221 を持つ、繰り返し開催する会議のダイヤルインを設定するには次のように入力します。

```
addSysDialin -name "Sales Force Mtg" -sequence
"18005551234,,80904#56221#,,,,,,,,,#"
```

getSysDialins

現在設定されているダイヤルインを表示します。

```
getSysDialins
ID      NAME                      SEQUENCE
21994   Standard Conference         18005551234,,<Conf ID>#<Passcode>#,,,,,,,,,#
21998   Sales Force Mtg              18005551234,,80904#56221#,,,,,,,,,#
```

deleteSysDialin

既存のダイヤルイン番号を削除します。削除するダイヤルインの名前または ID を入力すると、そのダイヤルインを削除できます。たとえば、Standard Conference という名前の会議を削除するには次のように入力します。

```
imtctl> deleteSysDialin -name "Standard Conference"
Standard Conference has been deleted
```

ID 21994 の会議を削除するには、次のように入力します。

```
imtctl> deleteSysDialin -id 21994
Dialin with id 21994 has been deleted
```

システムのテストおよび監視

getState、getPids、getMonitorStats および runTests コマンドを使用すると、様々なコンポーネントおよびプロセスの状態を表示したり、インスタンスまたはコンポーネントでクイック・テストを実行できます。

getState

任意のインスタンスのコンポーネントの状態を表示します。コンポーネントおよびインスタンスのオプションの有効値は、[表 10-1](#) を参照してください。

- imtctl> getState [-i instance-name]
現在のインスタンスのすべてのコンポーネントの状態を表示します。インスタンス名を指定してコンポーネントの状態を表示するには、-i を使用します。

- `imtctl> getState -cid component-ID`
指定した ID を持つコンポーネントの状態を表示します。
- `imtctl> getState -cname component-name [-i instance-name]`
現在のインスタンスの指定した名前のコンポーネントの状態を表示します。`-i`を使用すると、指定したインスタンス内の指定した名前のコンポーネントの状態を表示します。
- `imtctl> getState -ct component-type [-i instance-name]`
現在のインスタンスの指定したタイプのコンポーネントの状態を表示します。`-i`を使用すると、指定したインスタンス内の指定したタイプのコンポーネントの状態を表示します。

例：すべてのコンポーネントの状態の表示

現在のインスタンスのすべてのコンポーネントの状態を表示するには、次のように入力します。

```
imtctl> getState
ID      NAME      TYPE      STATUS    NUM_PROCS
10001   imt-collab  clbsvr    UP         4
10000   mx         mxcomm    UP         1
```

getPids

すべての実行中のプロセス識別子を表示します。インスタンスおよびコンポーネントのオプションの有効値は、[表 10-1](#) を参照してください。

- `getPids [-i instance-name]`
現在のインスタンスまたは指定されたインスタンス（`-i`が使用されている場合）のプロセス識別子を表示します。
- `getPids -cid component-id`
特定のインスタンスのプロセス識別子を ID 番号ごとに表示します。
- `getPids -cname component-name [-i instance-name]`
コンポーネントのプロセス識別子を名前ごとに表示します。`-i`を使用すると、名前付きのインスタンスの名前付きコンポーネントの識別子が表示されます。
- `getPids -ct component-type [-i instance-name]`
コンポーネントのプロセス識別子をタイプごとに表示します。`-i`を使用すると、名前付きのインスタンスの指定したコンポーネントの識別子が表示されます。

例 1: インスタンスのすべてのプロセス識別子の表示

現在のインスタンスのすべてのプロセス識別子を表示するには、次のように入力します。

```
imtctl> getPids
ID      NAME      COMPONENT TYPE    PIDS
10006   imt-collab  clbsvr           12650
10006   imt-collab  clbsvr           912
10006   imt-collab  clbsvr           12549
10006   imt-collab  clbsvr           31966
10008   imt-pm      imtpm            25921
10007   OC4J_meeting oc4j             15585
10005   imt-mx      mxcomm           26003
```

例 2: インスタンス上のコンポーネントのプロセス識別子の表示

インスタンス myinstance.oracle.com 上のすべての Document Conversion Server のプロセス識別子を表示するには、次のように入力します。

```
imtctl> getPids -ct docconv -i myinstance.oracle.com
ID      NAME      COMPONENT TYPE    PIDS
10010   imt-docconv docconv          3020
```

getMonitorStats

システム、インスタンスまたはコンポーネントの監視対象の統計データを表示します。システム、インスタンスおよびコンポーネントのオプションの有効値は、[表 10-1](#) を参照してください。監視対象のコンポーネントについては、[第 7 章「監視」](#) を参照してください。

- `getMonitorStats [-i instance-name]`
現在のインスタンス（または `-i` を使用する場合は名前付きのインスタンス）の統計データを表示します。
- `getMonitorStats -cid component-id`
このインスタンスの特定のコンポーネントの統計データを、コンポーネントの ID 番号ごとに表示します。
- `getMonitorStats -cname component-name [-i instance-name]`
このインスタンス（または `-i` を使用している場合は名前付きのインスタンス）の特定の名称のすべてのコンポーネントの統計データを表示します。
- `getMonitorStats -ctype component-type [-i instance-name]`
このインスタンス（または `-i` を使用している場合は名前付きのインスタンス）の特定のタイプのすべてのコンポーネントの統計データを表示します。

- `getMonitorStats -system true`

システム内のすべてのコンポーネントの統計データを表示します。

- `getMonitorStats -publish true`

このインスタンスのすべてのコンポーネントの統計データを表示します。また、他のアプリケーションとの統合で使用する場合は、このデータを XML 形式で表示します。
`-publish` オプションは、システム、サイト、コンポーネントまたはインスタンスを指定するオプションとともに使用できます。

表示される結果はコンポーネントのタイプによって異なります。表示される結果には、次のいずれかが含まれます。

コラボレーション・サーバー・コンポーネントの統計データの場合：

- TMTGS: プロセスが起動された後の会議の数
- CMTGS: アクティブな会議の数
- CLTS: アクティブなユーザーの数
- TMEM: このコンポーネントに割り当てられた総メモリー容量
- UMEM: このコンポーネントで現在使用されている総メモリー容量

Voice Conversion Server コンポーネントの統計データの場合：

- AVAIL: Voice Conversion Server が使用可能かどうか
- T1LINE: T1 ラインを使用できるかどうか
- IN-USE: 現在使用されている音声チャネルの数
- IDLE: アイドル状態の音声チャネルの数
- BAD: 不良音声チャネルの数

例 1: インスタンスの統計データの表示

特定のインスタンスのすべてのコンポーネントの統計データを表示するには、次のように入力します。

```
intctl> getMonitorStats -i instance1.oracle.com
Instance - instance1.oracle.com:
Component Name: imt-collab, Component Type: clbsvr
SERVICE_NAME          TMTGS CMTGS  CLTS  TMEM      UMEM
clbsvr:instance1.oracle.com.imt-collab.01      1      2    4,708K  4,285K
clbsvr:instance1.oracle.com.imt-collab.11      0      0    4,624K  3,836K
clbsvr:instance1.oracle.com.imt-collab.20      0      0    8,644K  3,457K
```

この統計データは、現在 `imt-collab.01` で 1 つの会議を実行中で、2 人の参加者がいることを示します。

例 2: システムの統計データの表示

このシステムのすべてのコンポーネントとインスタンスの統計データを表示するには、次のように入力します。

```
intctl> getMonitorStats -system true
Instance - instance1.oracle.com:
Component Name: imt-collab, Component Type: clbsvr
SERVICE_NAME          TMIGS CMIGS  CLTS  TMEM      UMEM
clbsvr:instance1.oracle.com.imt-collab.01      1    2    4,708K  4,285K
clbsvr:instance1.oracle.com.imt-collab.11      0    0    4,624K  3,836K
clbsvr:instance1.oracle.com.imt-collab.20      0    0    8,644K  3,457K
Instance - instance2.oracle.com:
Component Name: imt-voiceconv, Component Type: voiceconv
SERVICE_NAME          AVAIL T1LINE IN-USE  IDLE  BAD
voiceconv:instance2.oracle.com.imt-voiceconv.0 true  true   0      12    0
```

この統計データは、現在 imt-collab.01 で 1 つの会議を実行中で、2 人の参加者がおり、また Voice Conversion Server に T1 ラインで使用可能なチャネルが 12 ありますが、いずれも使用中ではないことを示します。

runTests

システム内の特定のインスタンスまたはすべてのインスタンスで Real-Time Collaboration テストを実行します。インスタンスのオプションの有効値は、表 10-1 を参照してください。テストの使用については、第 7 章「監視」を参照してください。

- runTests [-i instance-name]
現在のインスタンスでテストを実行します。インスタンス名を 1 つ指定してすべてのテストを実行するには、-i を使用します。
- runTests -testlist test-name, test-name, test-name...
実行可能なテストは次のとおりです。
 - apptest: アプリケーション接続性テスト
 - dbtest: データベース接続性テスト
 - docconvtest: ドキュメント変換サービス・テスト
 - emailtest: 電子メール構成テスト
 - mtgtest: 会議サービス・テスト
 - mxmodtest: multiplexer/mod_immeeting 構成テスト
 - proxytest: プロキシ構成テスト
 - voiceconvtest: 音声変換サービス・テスト

- **runTests -system true**

システムのすべてのインスタンスでテストを実行します。

- **runTests -publish true**

現在のインスタンスでテストを実行し、出力を構造化された XML タグで表示します。このオプションはスクリプトで使用でき、Web Conferencing と統合されたサービスに出力を提供します。

- **runTests -v true**

現在のインスタンスでテストを実行します。テストの失敗に関するメッセージを表示する verbose オプション付きです。

- **runTests -cluster true**

クラスタのインスタンスで会議サービス・テストを実行します。このインスタンスがクラスタの一部ではない場合、テストは現在のインスタンスでのみ実行されます。

例 1: インスタンスのテスト

インスタンスをインストールした後、次のコマンドを入力して、インスタンスが適切に構成されて動作しているかどうかを確認します。runTests コマンドは、このインスタンスにインストールされているコンポーネントに対してすべての適切なテストを実行します。

```
imtctl> runTests
Instance - myinstance.oracle.com
TESTNAME          SUCCESS
mtgtest            true
voiceconvtest      true
docconvtest        true
dbtest             true
apptest            true
mxmodtest          true
proxytest          true
emailtest          true
```

例 2: 単一のテストの実行

会議テストのみを実行する場合は、次のようにコマンドを起動します。

```
imtctl> runTests -testlist mtgtest
Instance - myinstance.oracle.com
TEST NAME          SUCCESS
mtgtest            true
```

例 3: Verbose オプション付きでの複数テストの実行

複数テストを Verbose オプション付きで実行するには、次のように入力します。

```
imtctl> runTests -testlist mtgtest,emailtest,modtest -v true
Instance - myinstance.oracle.com
TEST NAME          SUCCESS  MESSAGE
mtgtest             true
emailtest           true
modtest             false    Unknown test
```

この例では、1つのオプションが適切に入力されていません（mxmodtest を modtest と入力）。そのため、-v オプションによって表示されるメッセージに問題が報告されます。

ヘルプの表示および imtctl の終了

help コマンドは、imtctl で使用可能なすべてのコマンドに関するヘルプを表示します。
imtctl コマンドライン・インタフェースを終了するには、exit または quit と入力します。

help

imtctl コマンドのリストを表示します。

```
imtctl> help
Commands are:
start - Start a specified component or complete instance.
stop - Stop a specified component or complete instance.
getstate - Gets the state of a specified component or complete instance.
...
```

exit または quit

imtctl コマンドライン・インタフェースを終了します。exit または quit のどちらでも使用できます。

```
> $ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtctl
imtctl>
imtctl> exit
>
```

トラブルシューティング

Oracle Web Conferencing の構成が正常に終了し、動作することが確認された後で、管理者は次の種類の問題を解決する必要があります。

- ユーザーの苦情 : Oracle Web Conferencing を使用できない、ログインできないなどの問題が一部のユーザーに発生する場合があります。
- アラート : Oracle Real-Time Collaboration の監視機能を企業の監視インフラストラクチャに統合した後で、アラートが発生します。

この他にも、管理者がシステムを構成している際に発生する問題もあります。

これらの問題の解決方法およびその他の一般的なガイドラインについては、<http://www.oracle.com/technology/products/ortc/index.html> にあるトラブルシューティング・ドキュメントおよびその他のリファレンス・ガイドを参照してください。

タイムゾーン

次の表は、Oracle Real-Time Collaboration でサポートされているタイムゾーンのリストです。Web Conferencing システムのデフォルト・タイムゾーンの設定については、5-46 ページの「[タイムゾーンを設定するプロパティ](#)」を参照してください。

表 A-1 Real-Time Collaboration タイムゾーン

内部名	ユーザーに表示される外部名
Pacific/Pago_Pago	(-11:00) パゴパゴ
Pacific/Honolulu	(-10:00) ハワイ
America/Anchorage	(-09:00) アラスカ
America/Vancouver	(-08:00) カナダ太平洋標準時
America/Los_Angeles	(-08:00) 米国太平洋標準時
America/Tijuana	(-08:00) ティファナ
America/Edmonton	(-07:00) カナダ山地標準時
America/Denver	(-07:00) 米国山地標準時
America/Phoenix	(-07:00) アリゾナ
America/Mazatlan	(-07:00) マサトラン
America/Winnipeg	(-06:00) カナダ中部標準時
America/Regina	(-06:00) サスカチュワン
America/Chicago	(-06:00) 米国中部標準時
America/Mexico_City	(-06:00) Mexico City
America/Guatemala	(-06:00) グアテマラ

表 A-1 Real-Time Collaboration タイムゾーン (続き)

内部名	ユーザーに表示される外部名
America/El_Salvador	(-06:00) エルサルバドル
America/Managua	(-06:00) マナグア
America/Costa_Rica	(-06:00) コスタリカ
America/Montreal	(-05:00) カナダ東部標準時
America/New_York	(-05:00) 米国東部標準時
America/Indianapolis	(-05:00) インディアナ東部
America/Panama	(-05:00) パナマ
America/Bogota	(-05:00) ボゴタ
America/Lima	(-05:00) リマ
America/Halifax	(-04:00) カナダ大西洋標準時
America/Puerto_Rico	(-04:00) プエルトリコ
America/Caracas	(-04:00) カラカス
America/Santiago	(-04:00) サンティアゴ
America/St_Johns	(-03:30) ニューファンドランド
America/Sao_Paulo	(-03:00) サンパウロ
Atlantic/Azores	(-01:00) アゾレス諸島
Etc./UTC	(00:00) 世界標準時
UTC	(00:00) 世界標準時
Atlantic/Reykjavik	(00:00) レイキャビク
Europe/Dublin	(00:00) ダブリン
Europe/London	(00:00) ロンドン
Europe/Lisbon	(00:00) リスボン
Africa/Casablanca	(00:00) カサブランカ
Africa/Nouakchott	(00:00) スアクショット
Europe/Oslo	(+01:00) オスロ
Europe/Stockholm	(+01:00) ストックホルム

表 A-1 Real-Time Collaboration タイムゾーン（続き）

内部名	ユーザーに表示される外部名
Europe/Copenhagen	(+01:00) コペンハーゲン
Europe/Berlin	(+01:00) ベルリン
Europe/Amsterdam	(+01:00) アムステルダム
Europe/Brussels	(+01:00) ブリュッセル
Europe/Luxembourg	(+01:00) ルクセンブルク
Europe/Paris	(+01:00) パリ
Europe/Zurich	(+01:00) チューリヒ
Europe/Madrid	(+01:00) マドリード
Europe/Rome	(+01:00) ローマ
Africa/Algiers	(+01:00) アルジェ
Africa/Tunis	(+01:00) チュニス
Europe/Warsaw	(+01:00) ワルシャワ
Europe/Prague	(+01:00) プラハ、プラチスラバ
Europe/Vienna	(+01:00) ウィーン
Europe/Budapest	(+01:00) ブダペスト
Europe/Sofia	(+02:00) ソフィア
Europe/Istanbul	(+02:00) イスタンブール
Europe/Athens	(+02:00) アテネ
Asia/Nicosia	(+02:00) ニコシア
Asia/Beirut	(+02:00) ベイルート
Asia/Damascus	(+02:00) ダマスカス
Asia/Jerusalem	(+02:00) エルサレム
Asia/Amman	(+02:00) アンマン
Africa/Tripoli	(+02:00) トリポリ
Africa/Cairo	(+02:00) カイロ
Africa/Johannesburg	(+02:00) ヨハネスブルク

表 A-1 Real-Time Collaboration タイムゾーン (続き)

内部名	ユーザーに表示される外部名
Europe/Moscow	(+03:00) モスクワ
Asia/Baghdad	(+03:00) バクダッド
Asia/Kuwait	(+03:00) クウェート
Asia/Riyadh	(+03:00) リヤド
Asia/Bahrain	(+03:00) バーレーン
Asia/Qatar	(+03:00) カタール
Asia/Aden	(+03:00) アデン
Africa/Khartoum	(+03:00) ハルツーム
Africa/Djibouti	(+03:00) ジブチ
Africa/Mogadishu	(+03:00) モガディシオ
Asia/Dubai	(+04:00) ドバイ
Asia/Muscat	(+04:00) マスカット
Asia/Yekaterinburg	(+05:00) エカテリンバーグ
Asia/Tashkent	(+05:00) タシケント
Asia/Calcutta	(+05:30) インド
Asia/Novosibirsk	(+06:00) ノボシビルスク
Asia/Almaty	(+06:00) アルマトウイ
Asia/Dacca	(+06:00) ダッカ
Asia/Krasnoyarsk	(+07:00) クラスノヤルスク
Asia/Bangkok	(+07:00) バンコク
Asia/Saigon	(+07:00) ベトナム
Asia/Jakarta	(+07:00) ジャカルタ
Asia/Irkutsk	(+08:00) イルクーツク
Asia/Shanghai	(+08:00) 北京、上海
Asia/Hong_Kong	(+08:00) 香港
Asia/Taipei	(+08:00) 台北

表 A-1 Real-Time Collaboration タイムゾーン（続き）

内部名	ユーザーに表示される外部名
Asia/Kuala_Lumpur	(+08:00) クアラルンプール
Asia/Singapore	(+08:00) シンガポール
Australia/Perth	(+08:00) パース
Asia/Yakutsk	(+09:00) ヤクーツク
Asia/Seoul	(+09:00) ソウル
Asia/Tokyo	(+09:00) 東京
Australia/Darwin	(+09:30) ダーウィン
Australia/Adelaide	(+09:30) アデレード
Asia/Vladivostok	(+10:00) ウラジオストク
Australia/Brisbane	(+10:00) ブリズベン
Australia/Sydney	(+10:00) シドニー、キャンベラ
Australia/Hobart	(+10:00) ホーバート
Asia/Magadan	(+11:00) マガダン
Asia/Kamchatka	(+12:00) カムチャッカ
Pacific/Auckland	(+12:00) オークランド

用語集

DMZ

非武装地帯。企業のイントラネットとインターネット間のサブネットワークを指す。

Document Conversion Server

Document Conversion Server により、Web Conferencing アプリケーションでドキュメント・プレゼンテーション・モード用に自動的にドキュメントを変換することができる。

Oracle Web Conferencing アプリケーション (Oracle Web Conferencing Application)

Web Conferencing システムの管理に使用されるコンポーネントのセット。アプリケーション Web ページ、Web リスナー、および Document Conversion Server で構成される。

Oracle Web Conferencing コンソール (Oracle Web Conferencing Console)

リアルタイムで会議が開催されるコンソール。

Web Conferencing Server

会議の実行時の状態をすべて管理するバックエンド・サーバー。クライアントは直接 Web Conferencing Server と通信することはない。かわりに、クライアントは HTTP リスナーと通信し、HTTP リスナーは mod_immeeting を使用して適切な Web Conferencing Server と通信する。

Voice Conversion Server

Voice Conversion Server では、Dialogic カードから音声ストリームを取り込み、それを GSM コードでエンコードして、記録または聴取専用の音声サポートのために Web Conferencing Server へ配信することによって、聴取専用の音声ストリーミングを可能にする。

ロード・バランサ (Load Balancer)

Web リクエストを多くの物理サーバーに分散させる非常に高速なネットワーク・デバイス。ロード・バランサ (LBR) は、単一の公開アドレスをクライアント・ブラウザに提供し、Real-Time Collaboration の場合は LBR によるリクエストの分散を基に、リクエストを実際に処理する複数の Real-Time Collaboration コア・コンポーネントの中間層を提供する。

A

AdditionalLocationsServed, 5-27
AdminEmail, 5-29
AllowPublicMeetings, 5-42
ApacheProtocolSecure, 5-17
ApacheTunnelHost, 5-18
ApacheTunnelPort, 5-18
ApacheWebHost, 5-16
ApacheWebPort, 5-16
ApacheWebSecurePort, 5-17

E

EarlyJoinMinutes, 5-42
EmailEnabled, 5-29
EnableChat, 5-38
EnableCobrowseMode, 5-34
EnableDesktopSharingMode, 5-34
EnableDocumentPresentationMode, 5-34
EnableRecording, 5-38
EnableSharedControl, 5-38
EnableWhiteboardMode, 5-34

F

FirstAttendeeBehavior, 5-43

G

GlobalMeetingSSLSupportEnabled, 5-23
GlobalProtocolSecure, 5-21
GlobalWebHost, 5-20
GlobalWebPort, 5-20
GlobalWebSecurePort, 5-21

I

InstanceLocation, 5-27
IsCalendarOCSInstalled, 5-32

L

LogFlushInterval, 5-45
LogLevel, 5-44
LogPath, 5-45

M

MeetingAllControlLayout, 5-36
MeetingAllUseTools, 5-36
MeetingAllViewAttendeeList, 5-36
MeetingAllViewStatusMsg, 5-37
MeetingAutoHide, 5-35
MeetingChatInterface, 5-37
MeetingChatType, 5-37
MeetingDialInAndConfId, 5-41
MeetingDurationMinutes, 5-40
MeetingEmailJoin, 5-42
MeetingEndUrl, 5-39
MeetingExpandHelpText, 5-35
MeetingExpandSecondRow, 5-35
MeetingInformation, 5-41
MeetingIsInstant, 5-40
MeetingPublishOption, 5-41
MeetingSharedControlSendPoll, 5-39
MeetingSharedControlUseTools, 5-38
MeetingShouldSendEmail, 5-42
MeetingStartUrl, 5-39
MeetingTypeOfMtg, 5-40
MxListenPort, 5-19

MxRedirectEnabled, 5-15
MxRedirectPort, 5-15
MxWalletLocation, 5-23
MxWalletPassword, 5-24

O

Oracle Web Conferencing
 インスタンスの起動, 4-17
 インスタンスの停止, 4-17
 インストール後のタスク
 インスタンス・タスク, 4-4
 システム・タスク, 4-4

P

PreLoginMessage, 5-29
PrivacyLink, 5-31
PrivacyText, 5-31
PublicMeetingNumRows, 5-30
PublicMeetingSortBy, 5-30
PublicMeetingSortOrder, 5-30

Q

QuicklinkNName, 5-32
QuicklinkNURL, 5-33

R

ReportEnvironmentName, 5-44

S

ShowPrivacyLink, 5-31
Smtphost, 5-28
Smtpport, 5-28
SrvNumProcs, 5-19
SSL
 SSL Web サイトの共有ブラウズ, 5-25
 構成, 5-22
 ユーザーによる構成, 5-25
SSL Web サイトの共有ブラウズ, 5-25
SSLRequiredForMeetings, 5-24
StartupMeetingMode, 5-33

U

UserAgentProxyEnabled, 5-14
UserAgentProxyExclusions, 5-13
UserAgentProxyHost, 5-11
UserAgentProxyPort, 5-12
UserAgentProxySSLHost, 5-12
UserAgentProxySSLPort, 5-13

V

VoiceDialInPrefix, 5-43

W

Web Calendar, ユーザーが会議を予定する際に必要,
5-32

あ

アプリケーション・ページ, 構成, 5-29

い

インスタンスの状態ページ, 7-5
インスタンス・プロパティ, 5-3
インターネット, 配置の問題, 3-2
イントラネット, 配置の問題, 3-2

え

エンド・ユーザー・ロール, 2-13

お

オーバーライド, 5-4

か

会議, 監視, 7-5
監視
 会議, 7-5
 コンポーネント, 7-4
 サービス可用性, 7-3
 プロセス, 7-2
管理者, 「ビジネス管理者」を参照

く

クラスタ, 3-6
クラスタ, 構成, 5-27

け

継承, 5-3

こ

構成テスト, 7-6
コンポーネント, 2-2
 プロパティ, 5-3
コンポーネント, 監視, 7-4

さ

サービス可用性の監視, 7-3
サイト・プロパティ, 5-3

し

「システム」タブのレポート, 7-5
システム・プロパティ, 5-3
信頼できるルート認証局の証明書の追加, 5-25

す

スコープの定義, 5-4

た

多重スコープ・プロパティ, 5-3

て

テスト, 構成, 7-6
電子メール
 構成, 5-28

は

場所属性, 3-8, 5-3

ひ

ビジネス管理者ロール, 2-13, 4-5

ふ

プライバシー声明, 構成, 5-31
プロセスの監視, 7-2
プロパティ, 5-40
 AdditionalLocationsServed, 5-27
 AdminEmail, 5-29
 AllowPublicMeetings, 5-42
 ApacheProtocolSecure, 5-17
 ApacheTunnelHost, 5-18
 ApacheTunnelPort, 5-18
 ApacheWebHost, 5-16
 ApacheWebPort, 5-16
 ApacheWebSecurePort, 5-17
 EmailEnabled, 5-29
 EnableChat, 5-38
 EnableCobrowseMode, 5-34
 EnableDesktopSharingMode, 5-34
 EnableDocumentPresentationMode, 5-34
 EnableRecording, 5-38
 EnableSharedControl, 5-38
 EnableWhiteboardMode, 5-34
 FirstAttendeeBehavior, 5-43
 GlobalMeetingSSLSupportEnabled, 5-23
 GlobalProtocolSecure, 5-21
 GlobalWebHost, 5-20
 GlobalWebPort, 5-20
 GlobalWebSecurePort, 5-21
 InstanceLocation, 5-27
 IsCalendarOCSInstalled, 5-32
 LogFlushInterval, 5-45
 LogLevel, 5-44
 LogPath, 5-45
 MeetingAllControlLayout, 5-36
 MeetingAllUseTools, 5-36
 MeetingAllViewAttendeeList, 5-36
 MeetingAllViewStatusMsg, 5-37
 MeetingAutoHide, 5-35
 MeetingChatInterface, 5-37
 MeetingChatType, 5-37
 MeetingDialInAndConfId, 5-41
 MeetingDurationMinutes, 5-40
 MeetingEmailJoin, 5-42

MeetingEndUrl, 5-39
MeetingExpandHelpText, 5-35
MeetingExpandSecondRow, 5-35
MeetingInformation, 5-41
MeetingIsInstant, 5-40
MeetingPublishOption, 5-41
MeetingSharedControlSendPoll, 5-39
MeetingSharedControlUseTools, 5-38
MeetingShouldSendEmail, 5-42
MeetingStartUrl, 5-39
MxListenPort, 5-19
MxRedirectEnabled, 5-15
MxRedirectPort, 5-15
MxWalletLocation, 5-23
MxWalletPassword, 5-24
PreLoginMessage, 5-29
PrivacyLink, 5-31
PrivacyText, 5-31
PublicMeetingNumRows, 5-30
PublicMeetingSortBy, 5-30
PublicMeetingSortOrder, 5-30
QuicklinkNName, 5-32
QuicklinkNURL, 5-33
ReportEnvironmentName, 5-44
ShowPrivacyLink, 5-31
Smtphost, 5-28
Smtpport, 5-28
SrvNumProcs, 5-19
SSLRequiredForMeetings, 5-24
StartupMeetingMode, 5-33
UserAgentProxyEnabled, 5-14
UserAgentProxyExclusions, 5-13
UserAgentProxyHost, 5-11
UserAgentProxyPort, 5-12
UserAgentProxySSLHost, 5-12
UserAgentProxySSLPort, 5-13
VoiceDialInPrefix, 5-43
インスタンス, 5-3
コンポーネント, 5-3
サイト, 5-3
システム, 5-3
多重スコープ, 5-3
分散配置, 3-5

ほ

ポートとネットワークの接続性, 5-11

ゆ

ユーザー権限, 構成, 5-21

よ

「予定」タブ
表示の抑制, 5-32

ろ

ロード・バランシング, 5-27, 6-8
ロード・バランシング, 問題, 3-5
ルール
 businessadmin, 2-13, 4-5
 businessmon
 ビジネス・モニター・ルール, 2-13
 enduser, 2-13
 割当て, 5-21
 ルールの割当て, 5-21
 ロギング, 構成, 5-44